

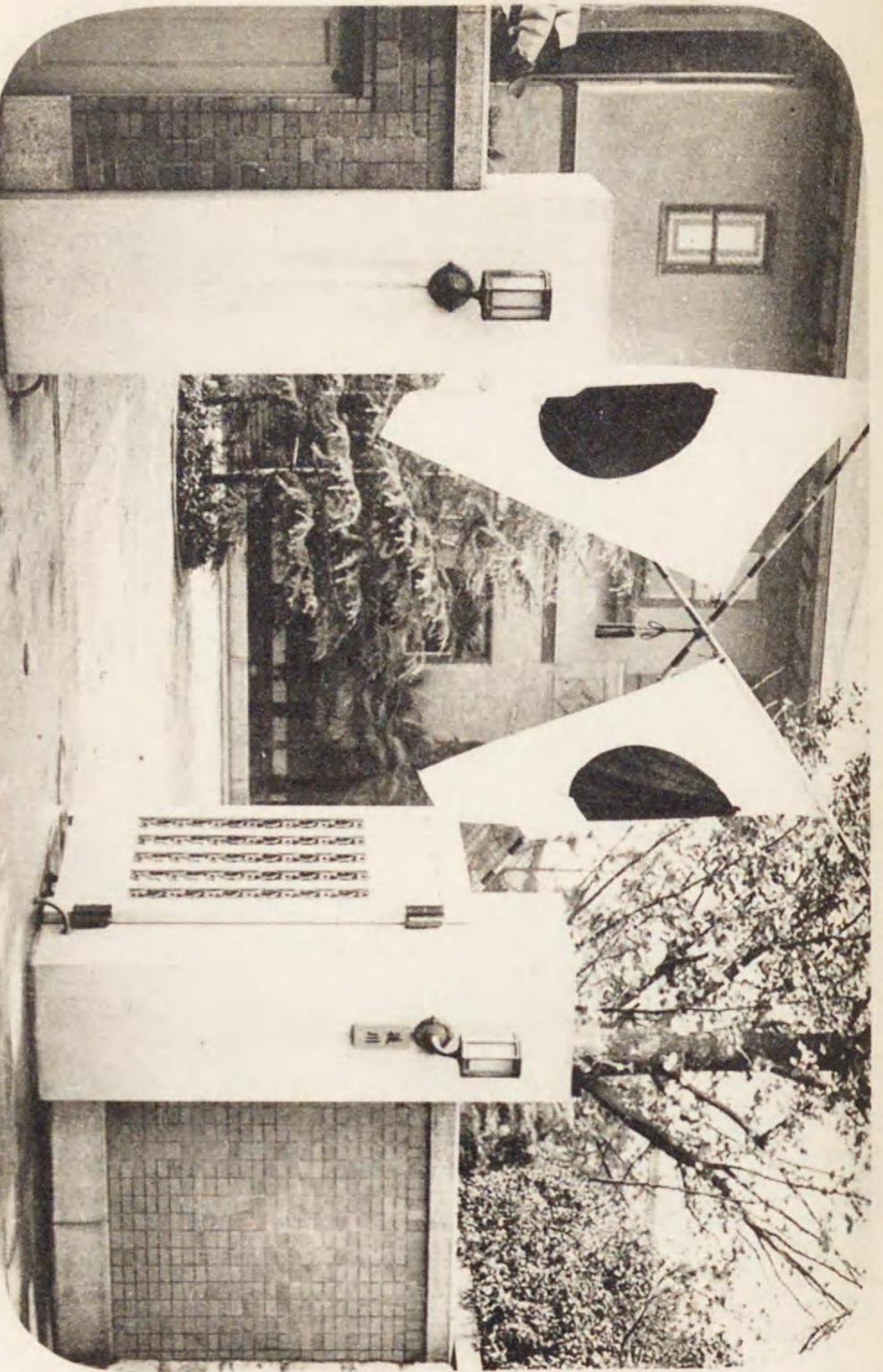
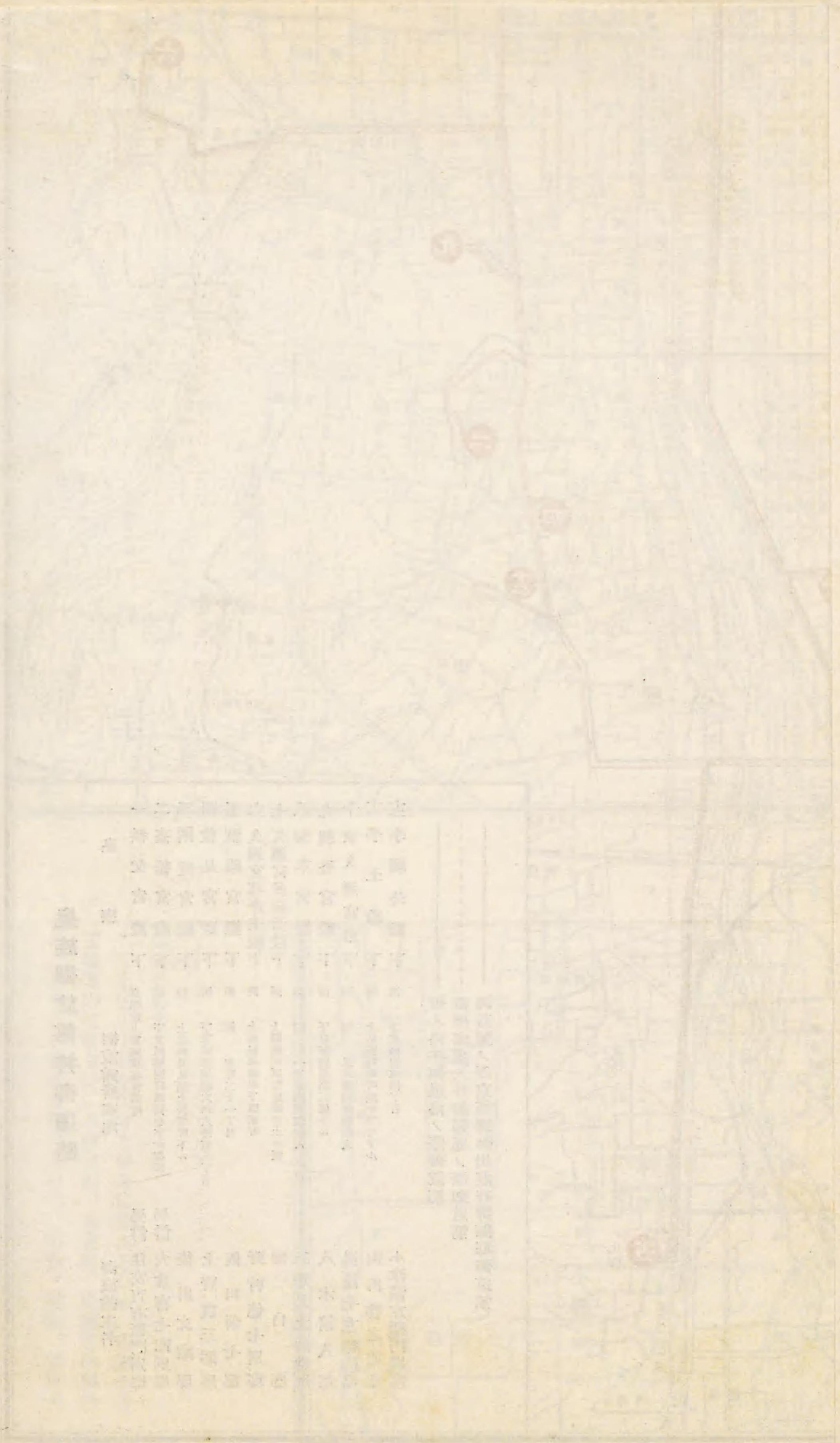
秋屋町二條下ル 澤文 (電上三二一三三)
 海軍大臣 岡田 啓介
 柳ノ馬場通四丁目 近太 (電下二四二九)
 陸軍大臣 白川 義則
 河原町二條 田中市藏別邸 (電上一四一四)
 商工大臣 中橋 徳五郎
 烏丸上長者町上ル 長瀬傳三郎 (電西陣七八一)
 内務大臣 望月 圭介
 岡崎圓勝寺町 藤井善助 (電上四一五)
 大藏大臣 三土 忠造
 木屋町三條上ル 大千賀 (電上二二六)
 農林大臣 山本 悌二郎
 東山線新門前 自邸 (電中一一二一一二)
 逓信大臣 久原 房之助

等級、客室數、疊數、收容人員等詳細調査の上臺帳を調製したり。
 一、旅館數 一、〇四四
 一、疊數 五〇、六三七
 一、收容人員 五〇、〇〇〇
 二、市内寺院其他の收容力
 前記旅館のみにて宿舍の不足を生ずる場合に備ふるため、市内全寺院、各學校、工場等の寄宿舍並に各種會館、集會所、民家等の開放又は提供を求め、豫め之が承諾を得たるもの、室數、疊數、收容人員、寢具賄の有無並に之が使用料等を調査し臺帳を調製したり。
 種別 室數 疊數 收容人員 賄の有無
 寺院 四五〇 二、七〇〇 一、三五〇 有
 其他 三七〇 三、五〇〇 一、七五〇 有

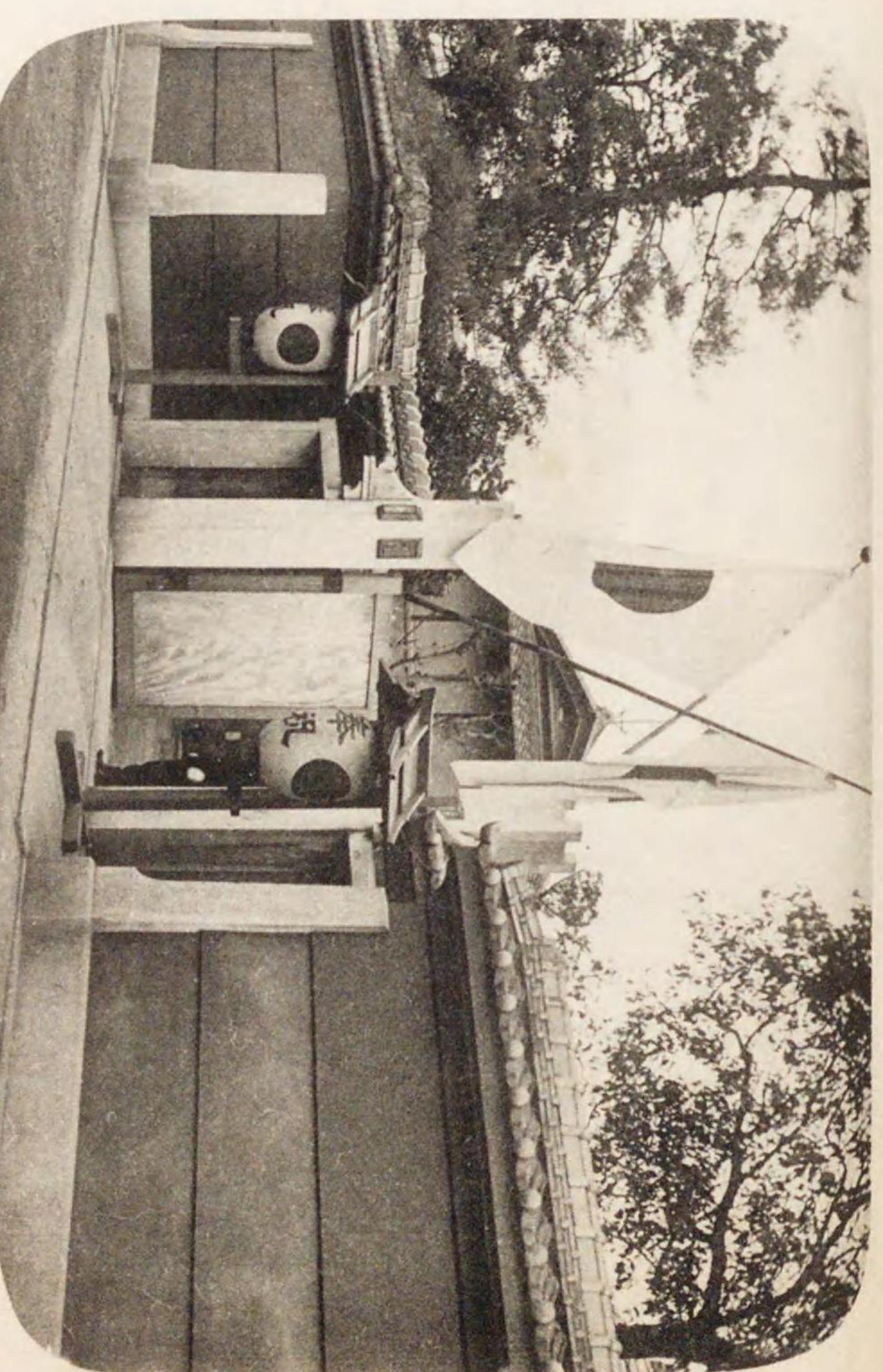
皇族御旅館并御通路

皇族	御旅館所在地	御旅館主名
一 秩父宮殿下	京都市上京區熊谷宮前町	男爵 住友吉右衛門別邸
二 高松宮殿下	下京區祇園町南側小字女御畑	男爵 大倉喜七郎別邸
三 閑院宮殿下	上京區烏丸通上長者町下ル	後 川文藏邸
四 伏見宮殿下	下京區松原通大和路東三丁目	飯田新三邸
五 賀陽宮殿下	同 本町二丁目	野村徳七別邸
六 久通宮多嘉王殿下	上京區河原町東通下河原町	御 自邸
七 久通宮多嘉王殿下	上京區河原町東通日下東	三井元之助別邸
八 梨本宮殿下	同 一條通西側東入	八木清八邸
九 朝香宮殿下	下京區白川筋三條下ル	湯淺七左衛門邸
十 東久通宮殿下	同 五條通柳馬場西入	山田啓之助邸
十一 李王殿下	上京區河原町通今出川下ル	小津清左衛門別邸
十二 李王殿下	同 下京區清水四丁目	

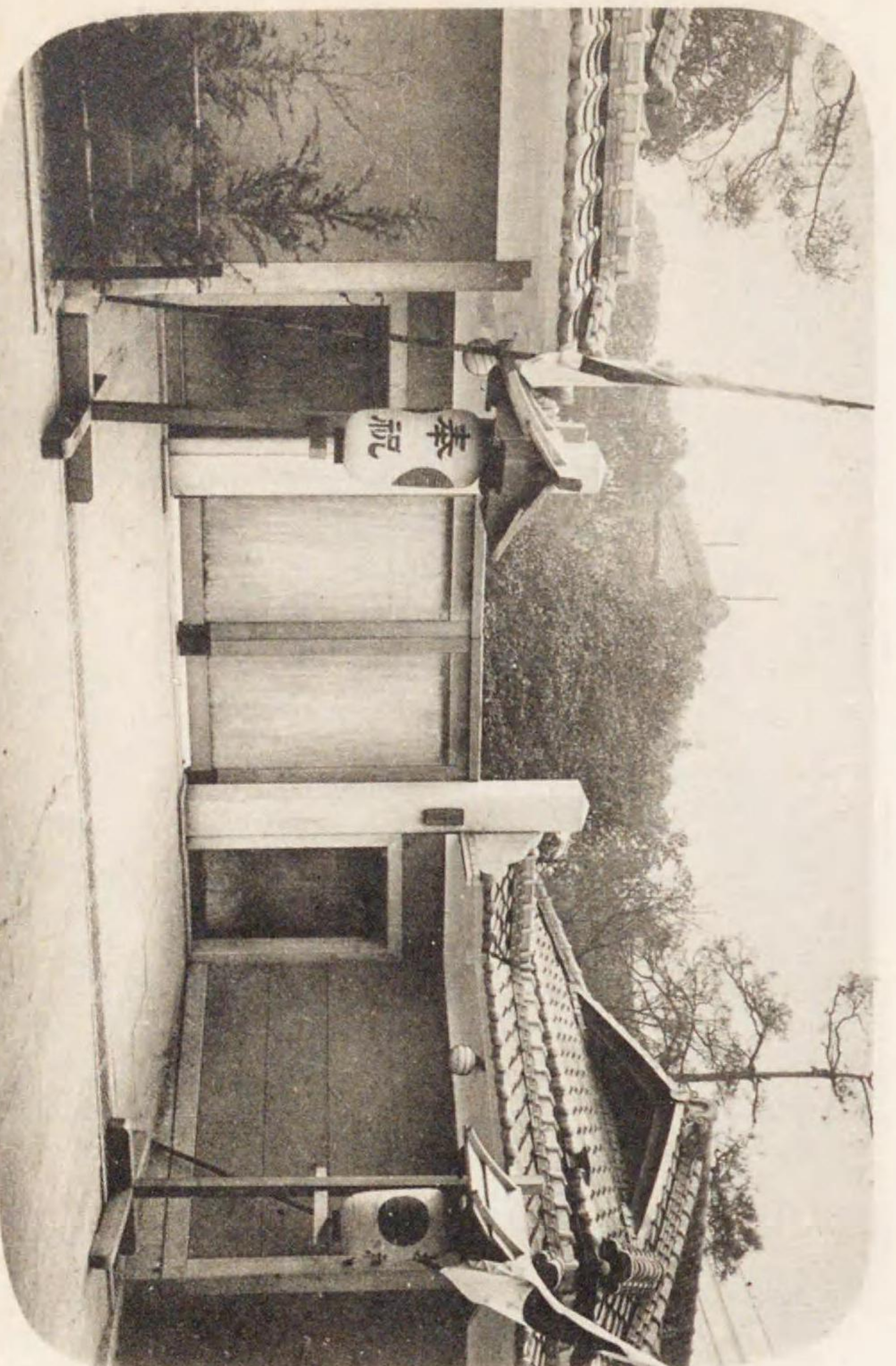
御入洛并御退洛ノ際御道筋
 御所御参入并御歸邸ノ際御道筋
 御着輩ノ際京都驛御出迎并御歸邸御道筋



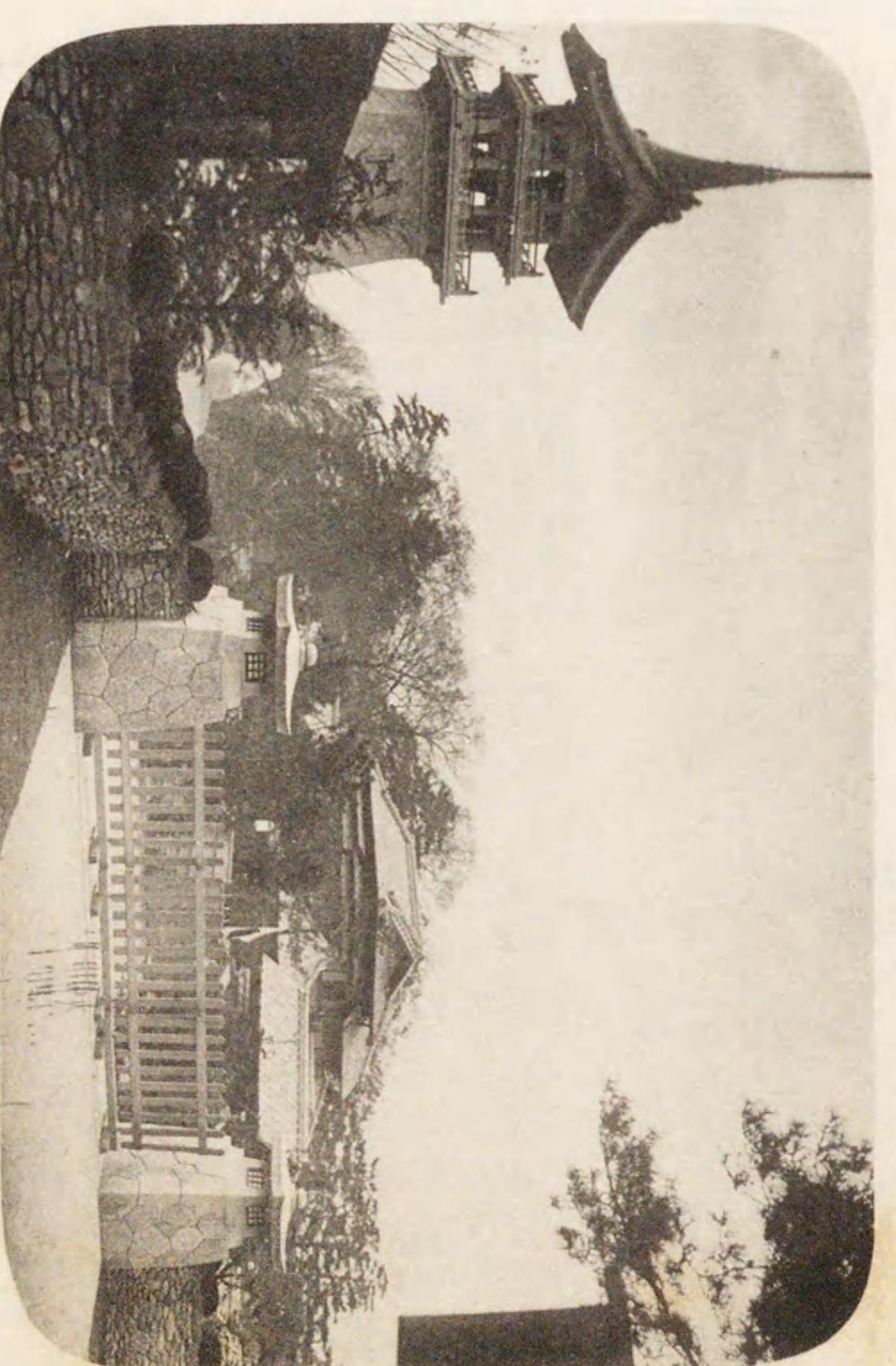
(邸藏文川後) 館旅御下殿宮院附



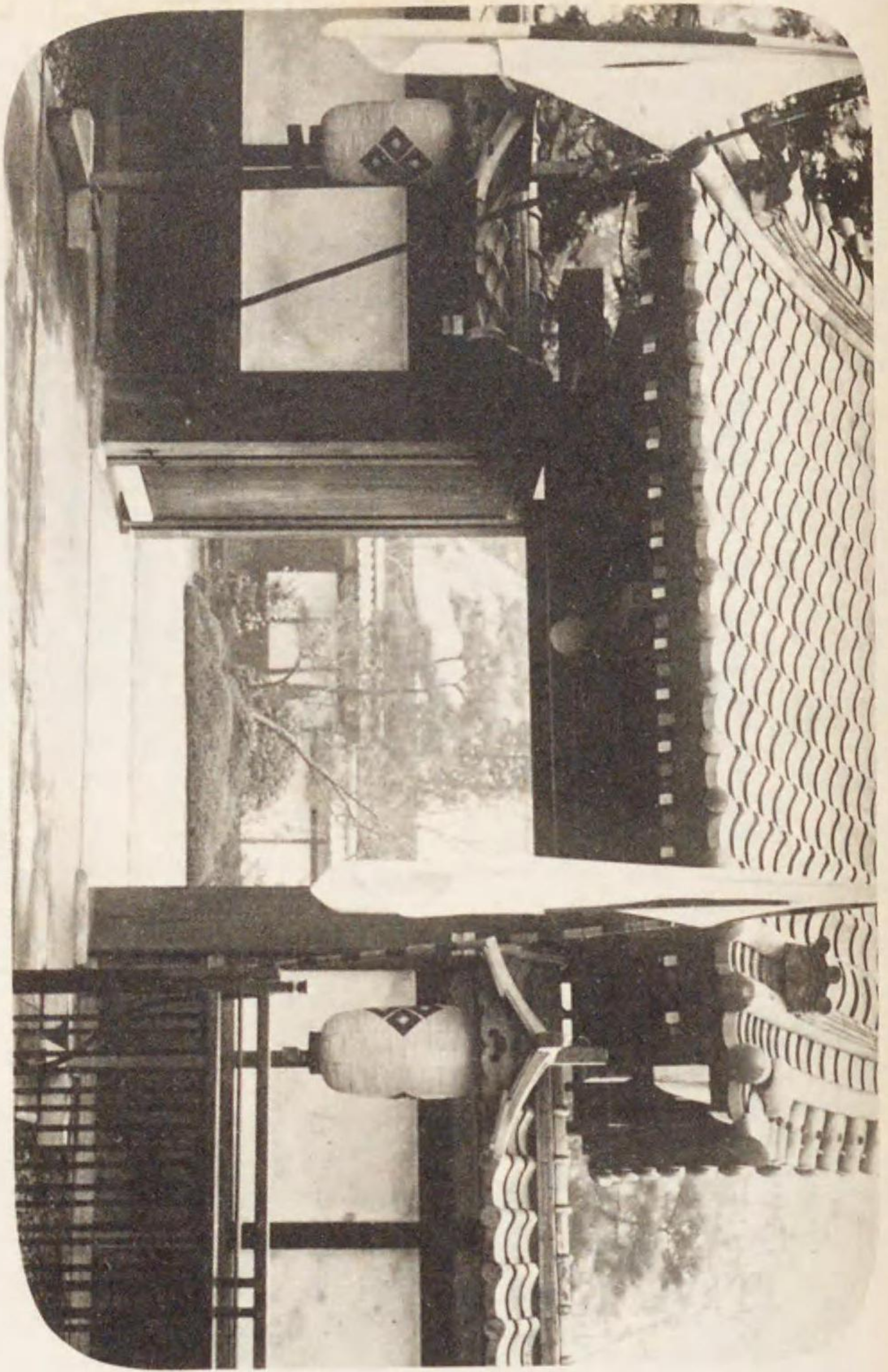
(邸別門籬左吉友住) 館旅御下殿宮交秩



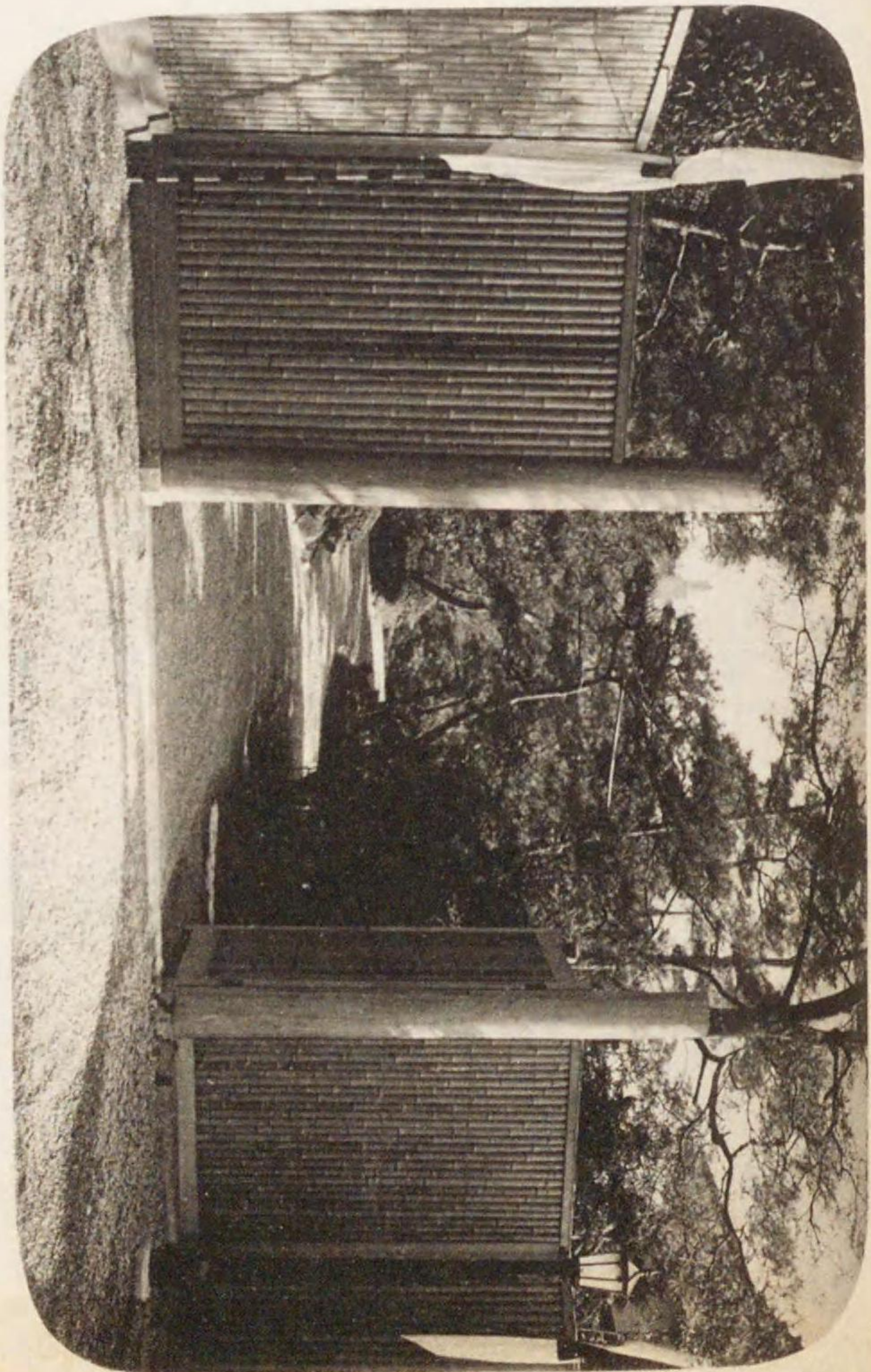
(邸耶三貫野上) 館旅御下殿宮見伏



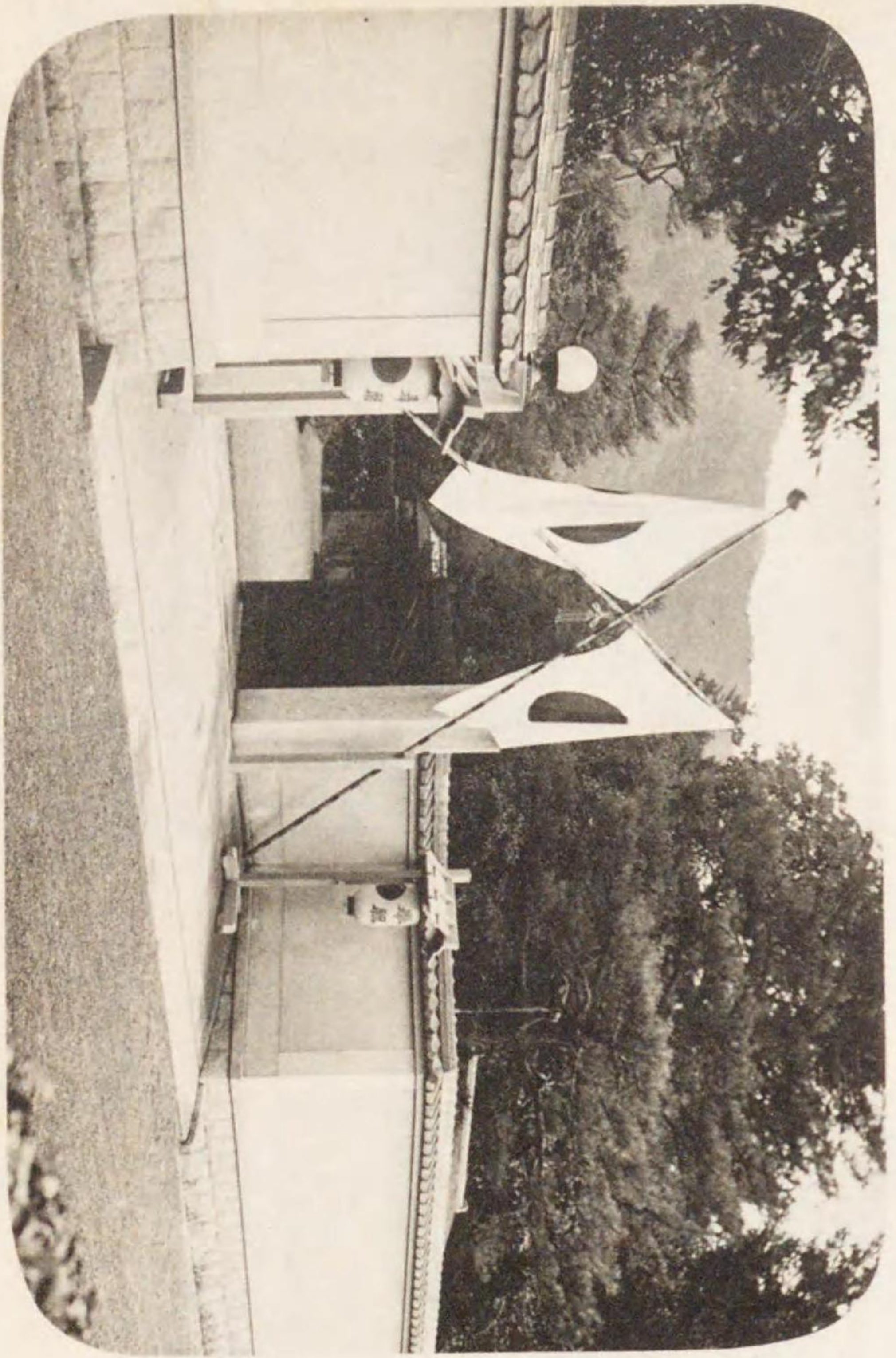
(邸別耶七喜倉大) 館旅御下殿宮松高



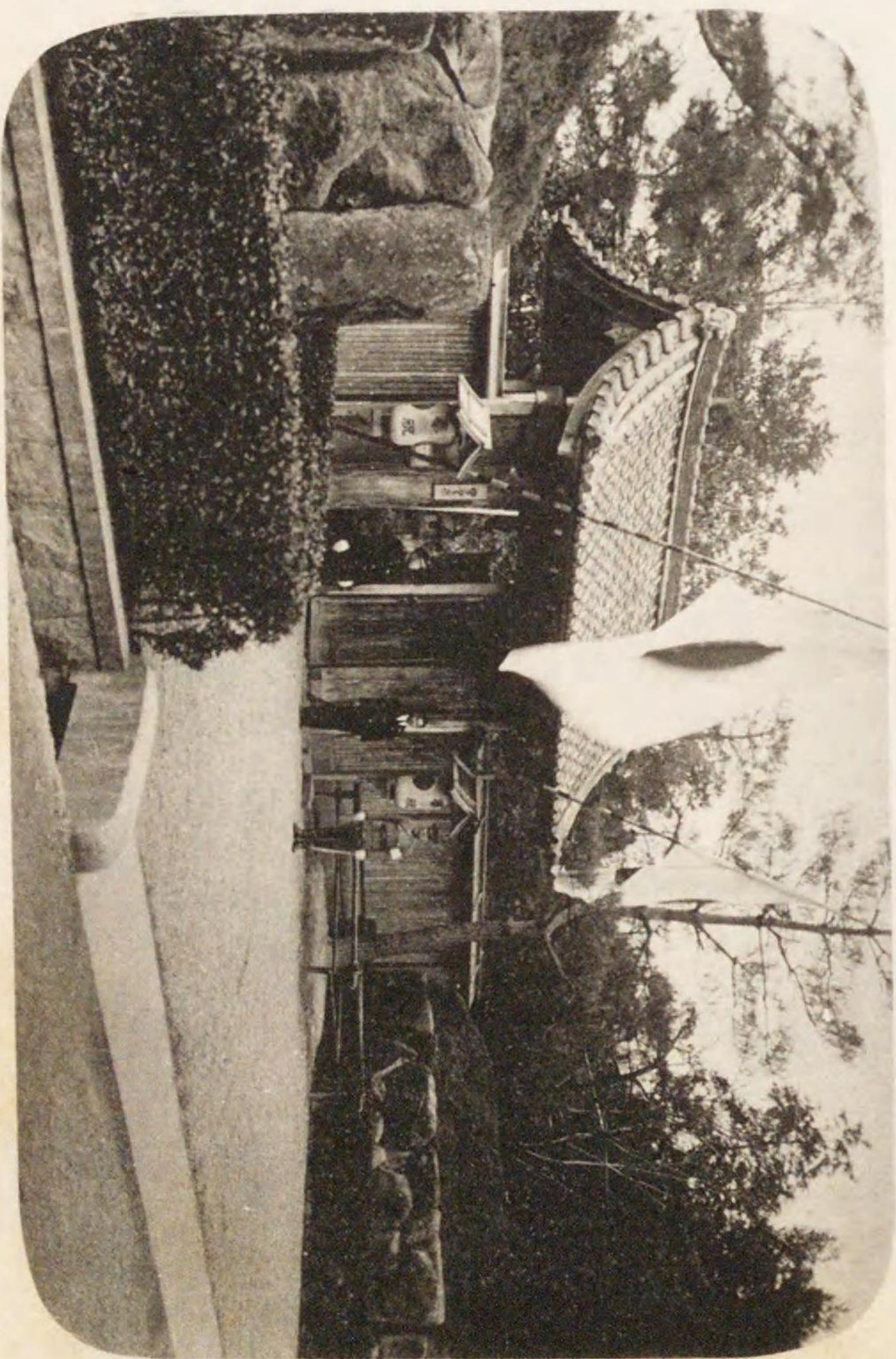
(邸別之元井三) 館旅御下殿宮本梨



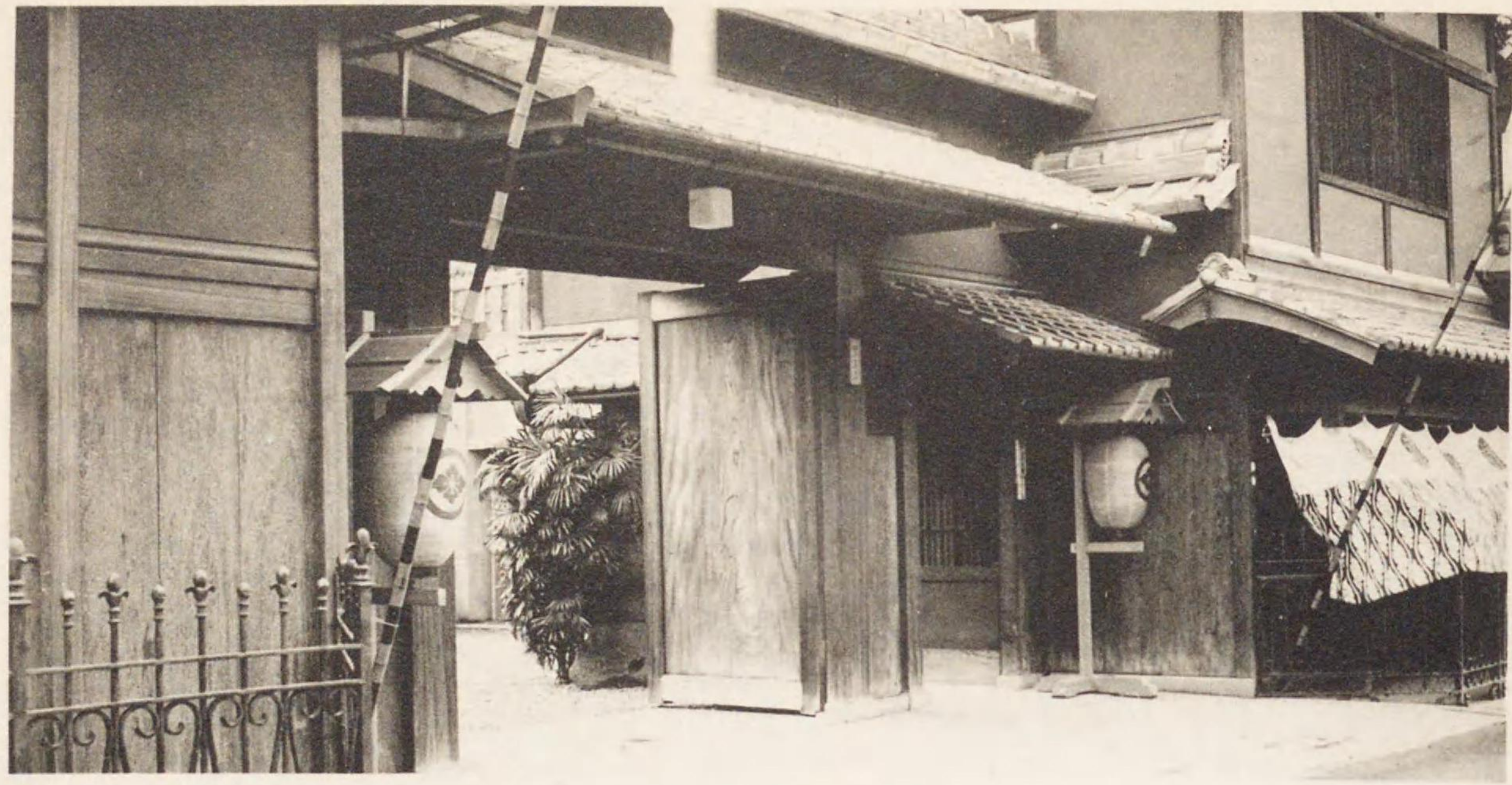
(邸別七徳村野) 館旅御下殿宮陽賀



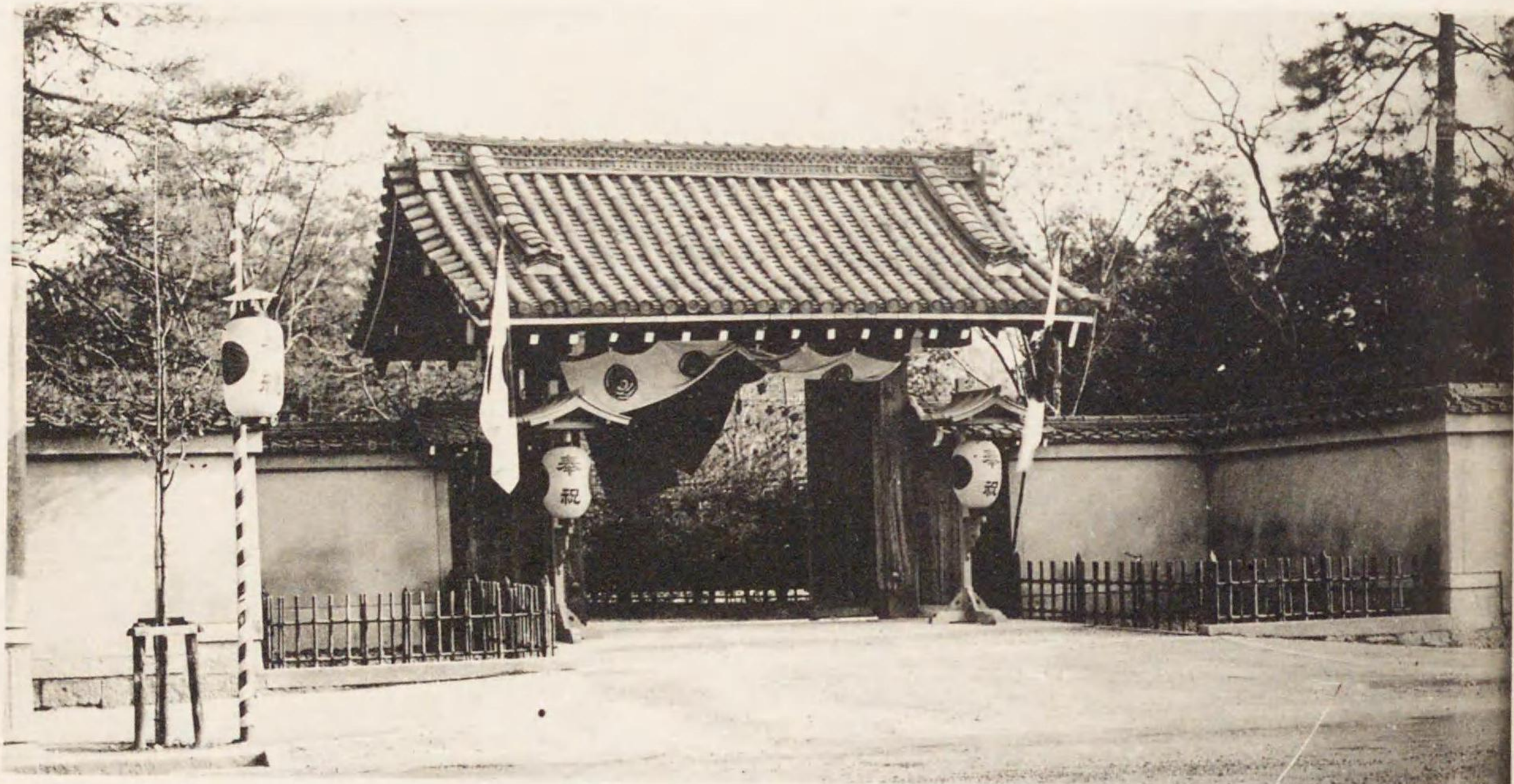
(邸八清木八) 館旅御下殿宮香朝



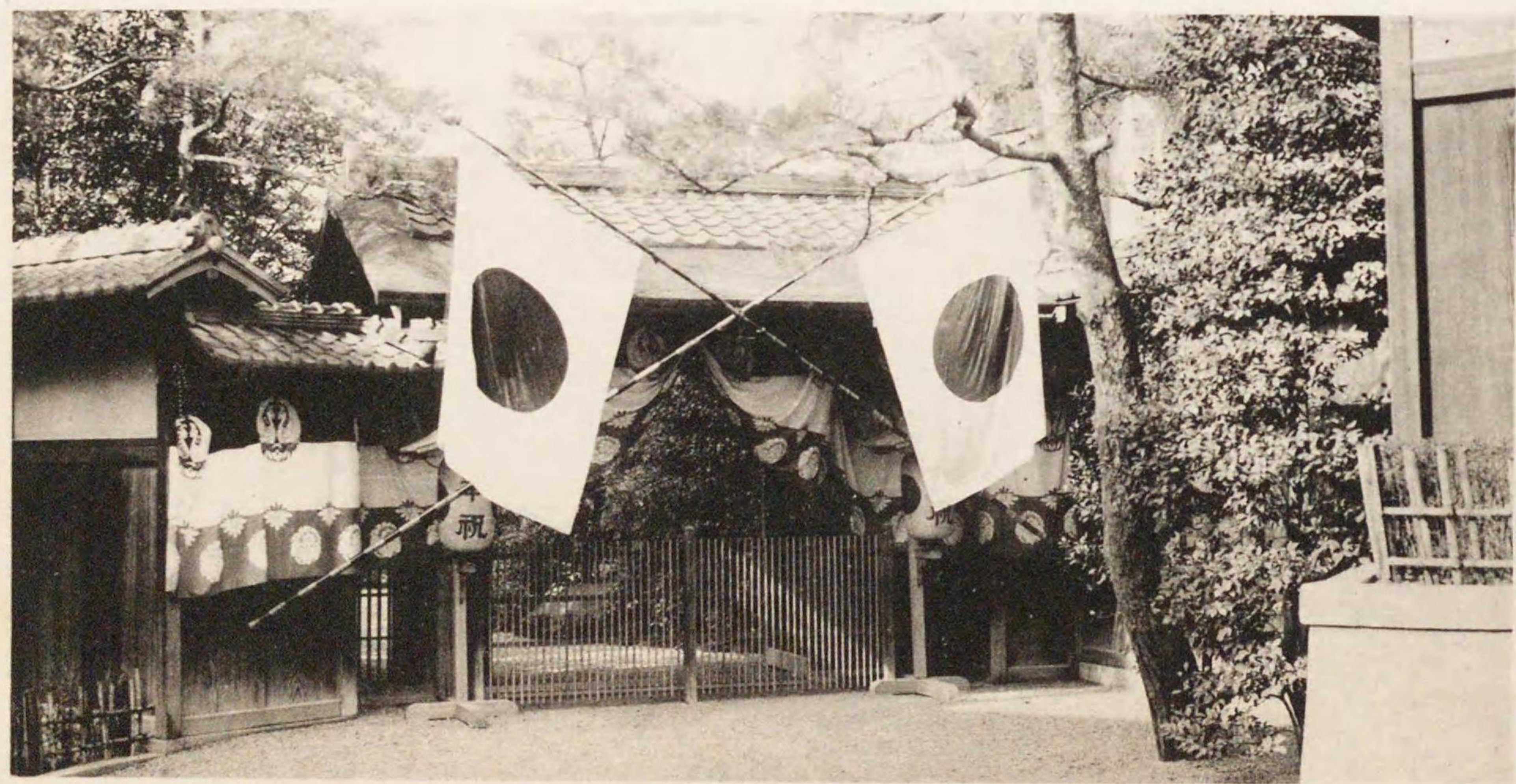
(邸別七徳村野) 館旅御下殿宮通久



(邸門衛左七淺湯) 館旅御下殿宮邇久東



(邸助之啓田山) 館旅御下殿王李



(邸別門衛左清津小) 館旅御下殿公桐李



（廳府都京）所張出時臨閣內



所張出時臨省道鐵
（驛都京）

所張出時臨省法司
（所判裁都京）

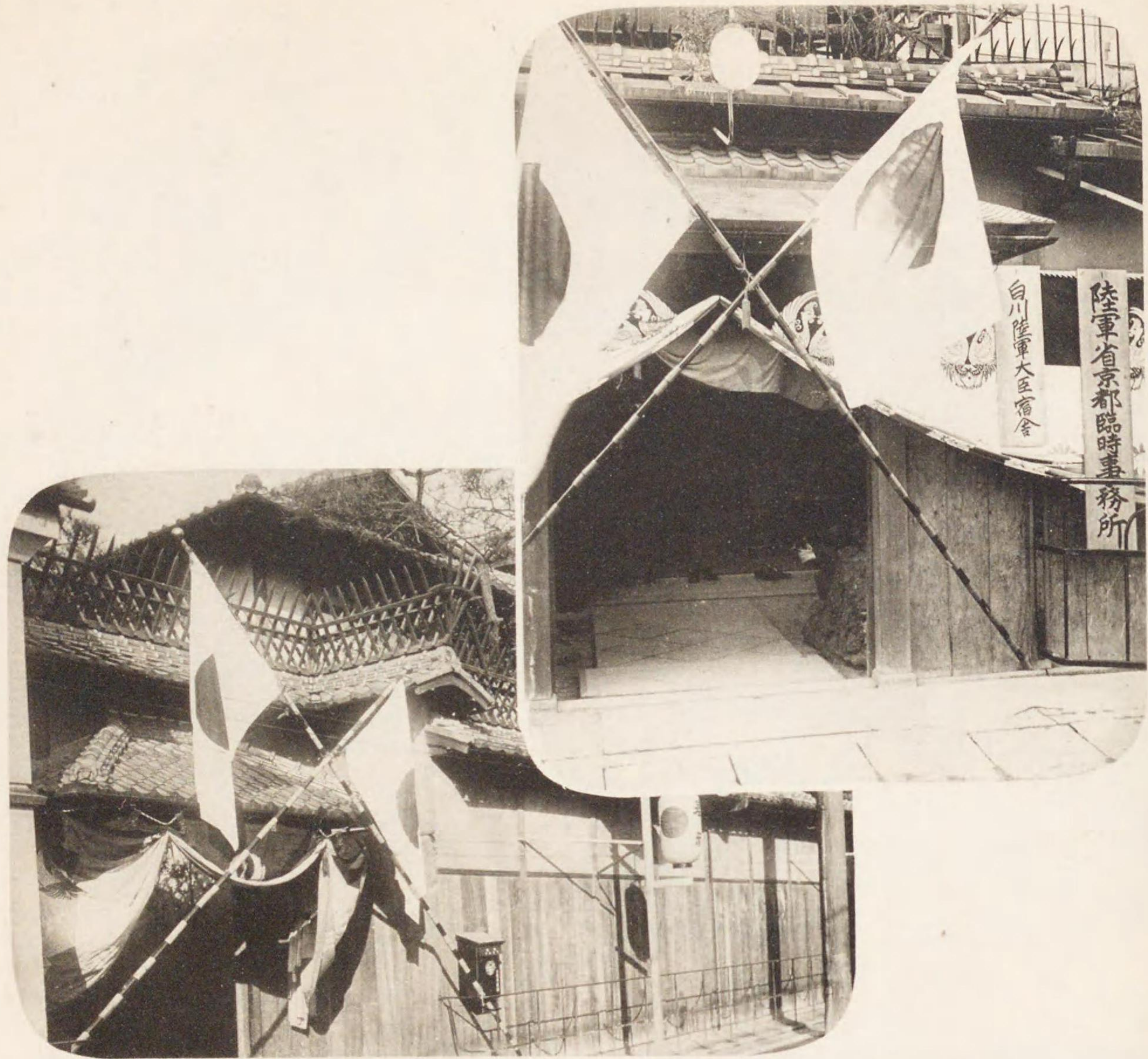


(所張出察匠内) 所張出時臨省内宮



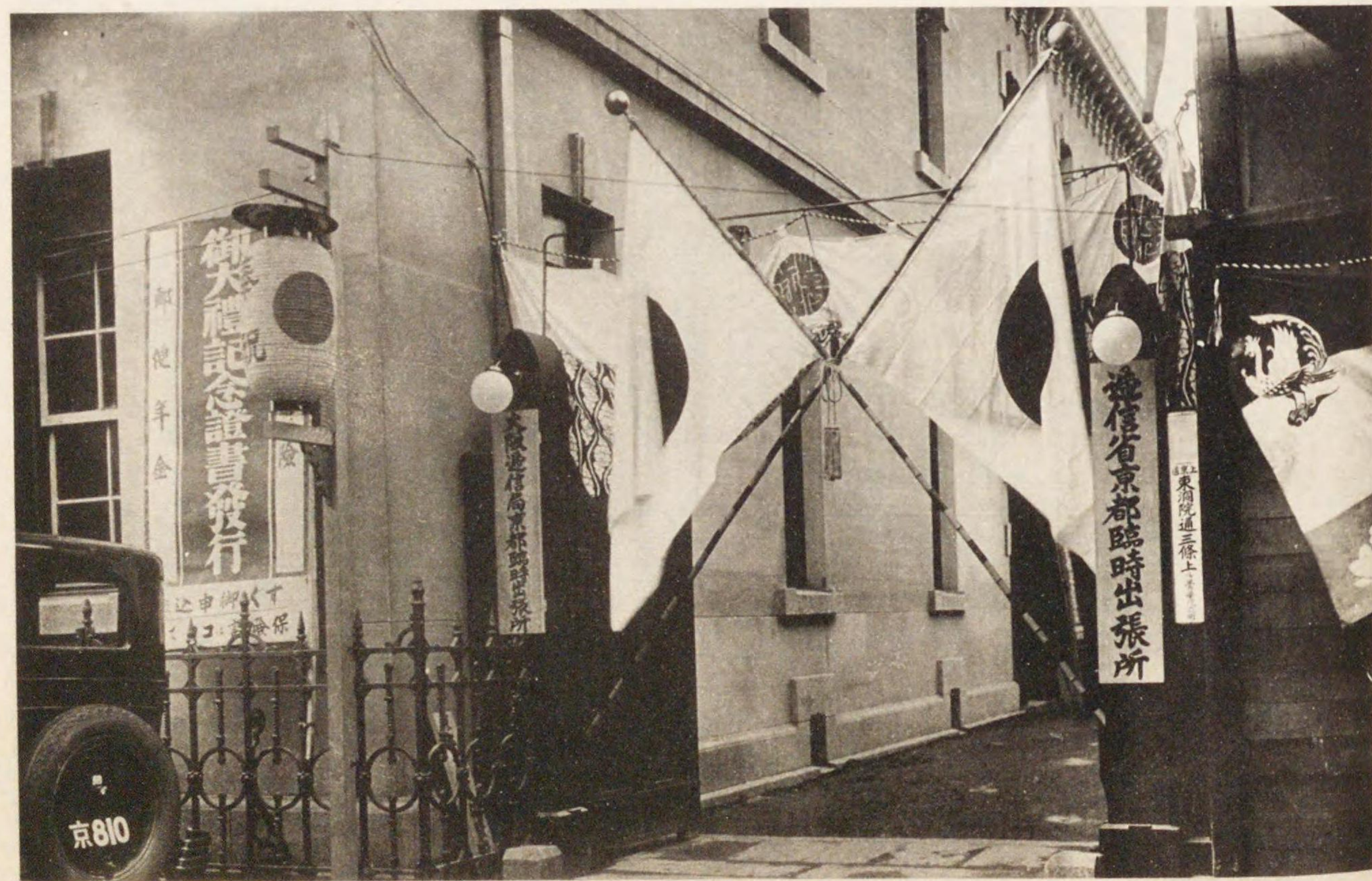
所張出時臨省部文
(學大國帝都京)

所張出時臨省務外
(部樂俱都京)



陸軍省臨時出張所 (近大旅館)

(館旅文澤) 所張出時臨省軍海

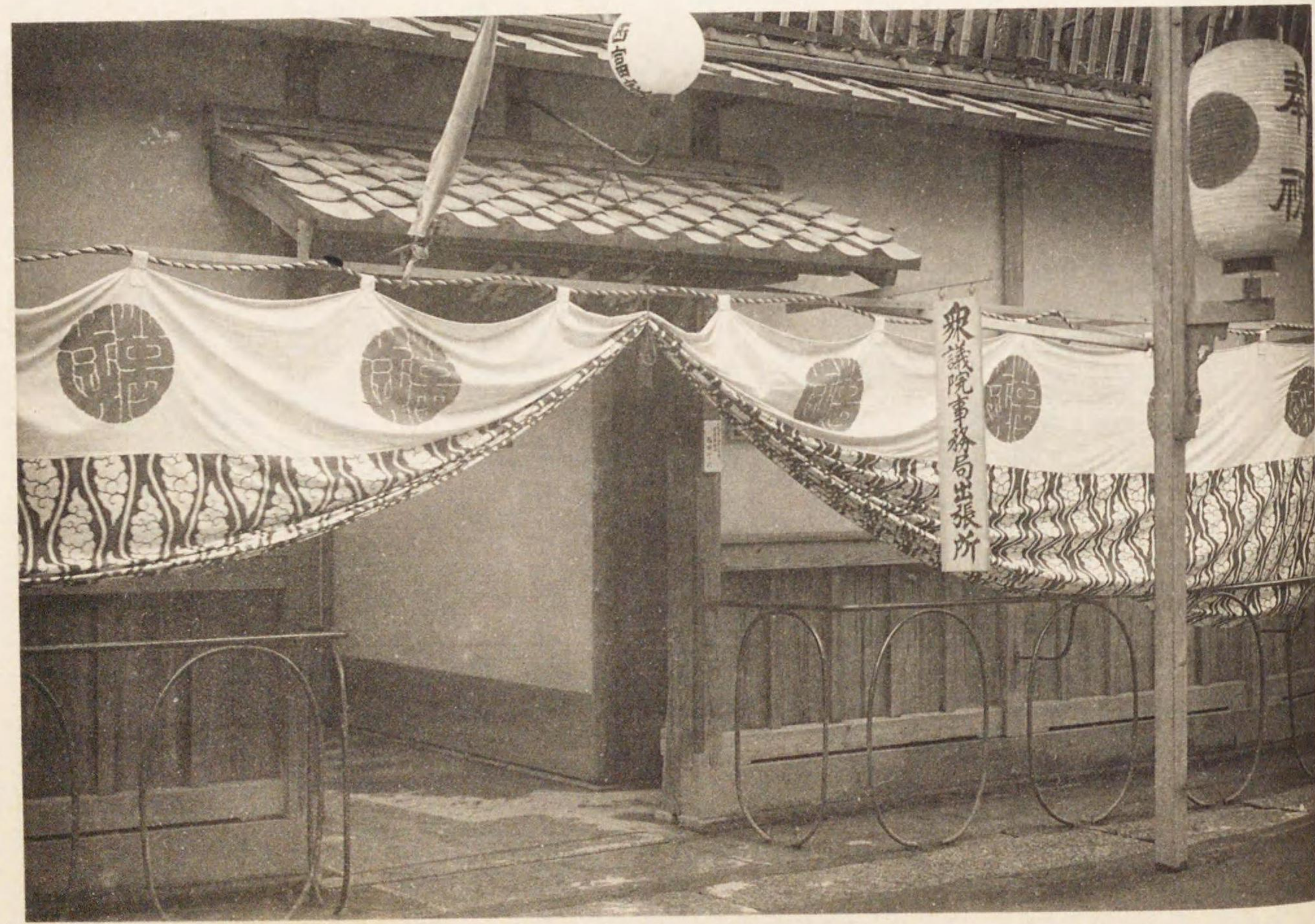


(局話電央中都京) 所張出時臨省信遞



所張出時臨省工商
(所議會工商都京)

所張出時臨省林農
(省林營都京)



(館旅富西) 所張出局務事院議衆

三、市外収容力の調査

尙萬一を考慮し奈良、伏見、深草、大津、膳所、其他隣接市町村當局者旅館組合等と交渉連絡をこり遺憾なきを期したり、同方面に於ける収容概算數左記の如し。

旅館數 二〇〇
 收容人員 二、五〇〇

二、入洛勸誘狀發送

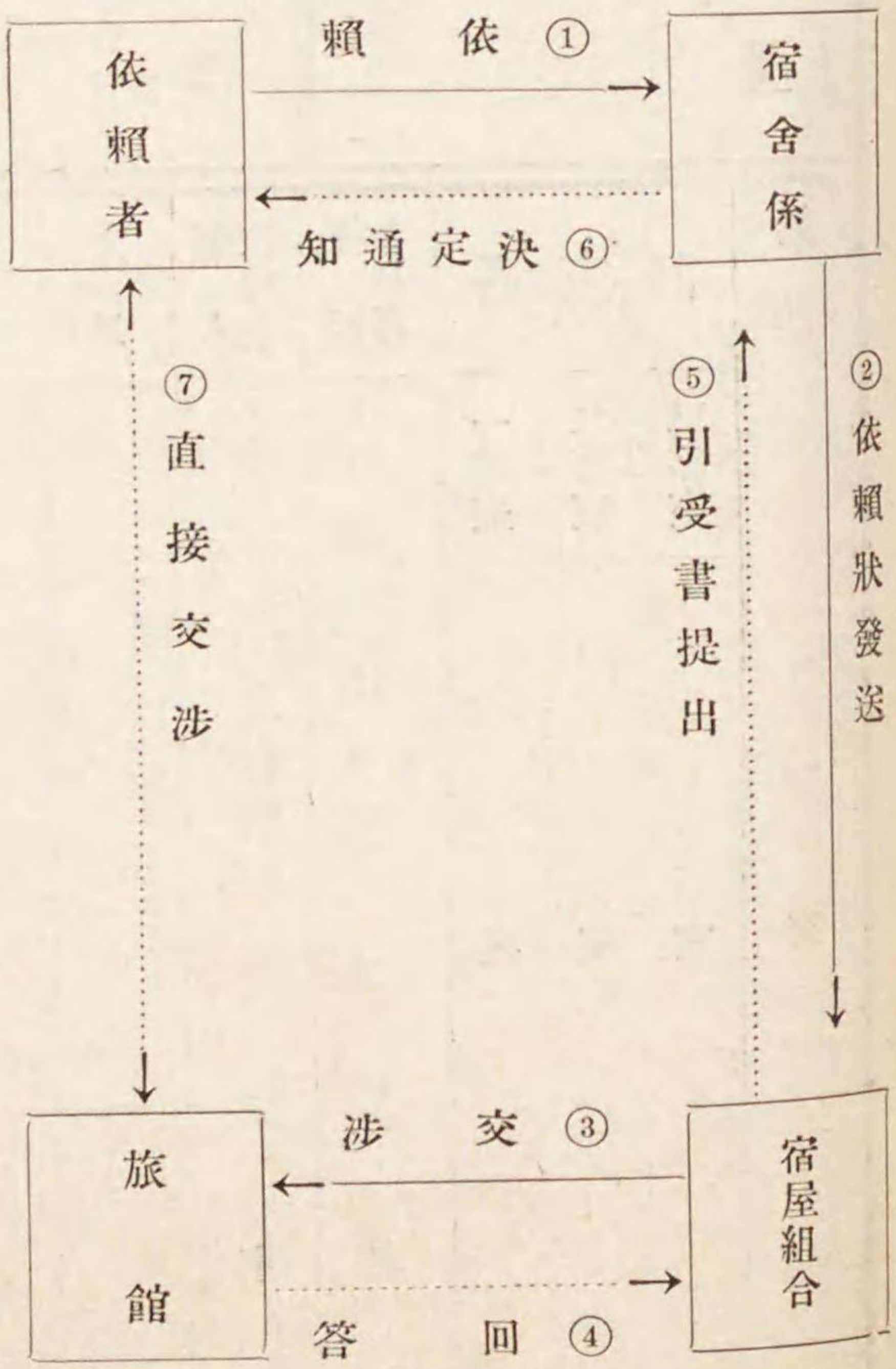
一方東京名古屋大阪門司仙臺の各鐵道當局と連絡をこり、市内に於ける収容力を時々通報するに共、最大輸送能力の發揮を依頼し、他は御大典時に際し市内の旅館拂底して宿泊困難なりとの聲一般に流布せられ入洛希望者をして之が躊躇をなす者ありしを以て、全國市町村長中等學校長に對し収容力に多大の餘裕あること、並に入洛者に宿舍の斡旋を爲すべき旨を記載したる勸誘狀二萬通を發送し以て勸誘に努めたり。

引續き十二月上旬御大禮御式場跡拜觀勸誘狀發送に際しても「御大禮御跡拜觀と大禮博見物」並に「宿舍斡旋」の葉を添付し之亦全國市町村長、中等學校長、青年團、在郷軍人會、婦人會、處女會長宛に發送したり。

三、宿舍斡旋方法

宿舍斡旋の申込ありたる時は左記順序により宿屋組合聯合事務所に通知し、組合をして適宜各旅館に配當をなさしめたり。

但し料金の標準及待遇の方法等に關しては同組合と詳細なる打合をなし一般入洛者の便に供したり。



尙旅館の決定をなさずして入洛するものあるを慮り、京都驛前案内所に本市宿舍係並に宿屋組合より特に事務員を出張せしめ特別の便宜を計ること、したり。

以上の結果として昭和四年一月末日までに當係に於て宿舍の斡旋をなしたる團體數及び人員左記の如し。

團體數 二二五
 人員 二〇、八七三

調査用紙(裏面)

備考	備
創業	年 月
宿泊料	一等 圓 拾錢 二等 圓 拾錢 三等 圓 拾錢

部		第		階		等		級		等		號		商		主		業		營	
階	三	階	二	階	下	客	一	客	二	客	三	客	三	客	室	客	室	客	室	客	室
室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室	室
壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘	壘
通計	計	室	各	收	團	收	個	井	消	設	防	便	洗	浴	應	電	所	業	營	所	業
	三	二	一	容	體	容	人	戸	火	火	火	所	所	場	接	話					
	等	等	等	數	數	數	數					大									
	室	室	室									小									
	室	室	室																		
	壘	壘	壘																		
	壘	壘	壘																		

○注意 洋室ノアル場合ハ洋ノ字記入ノ事

第八節 日本新聞協會々員招待晚餐會

日本新聞協會々員招待會は、府知事、市長、商工會議所會頭合同主催の下に、十九日午後七時より市公會堂に於て開催せり。
來賓としては清浦伯を始め、二百十一名の出席あり、先づ大海原知事の發聲にて萬歳を齊唱し、次いで土岐市長は主催側を代表して挨拶をなし、清浦伯亦之に答へて謝辭を述べ、主客共に歡を盡して八時三十分散會せり。

招待狀
拜啓益々御清穆奉賀候陳ハ今回御入洛ヲ機トシ粗餐差上度存ジ候ニ就テハ御用繁中御迷惑ナガラ來ル十九日午後六時岡崎公會堂へ御光來被成下度此段御案内申上候 敬具
年 月 日

出席者名簿 (次第不同)

社名	氏名	社名	氏名	社名	氏名
因伯時報社	木村 清一	豐州新報社	長野 潔	岡山新聞社	赤澤 寛一
内外通信社	瀨木 博尚	鳥取新報社	眞島 信茂	大牟田毎日新聞社	平山 喜録
函館新聞社	長谷川 淑夫	徳島日日新聞社	市原 狸之	和歌山日日新聞社	山崎 傳之助
日本電報通信社	光 永 星 郎	東奥日報社	橋田 早苗	河北新報社	一力 次郎
同	上田 碩三	中外商業新報社	山田 金次郎	樺太時日新聞社	栗岡 已八
同	曾我 祐邦	同	梁田 欽次郎	高田新聞社	伊藤 泰藏
新瀉毎日新聞社	小柳 調平	中國日報社	村上 幸平	大正日日新聞社	米田 誠夫
北海タイムス社	柏岡 清勝	朝鮮日報社	柿原 政一	宗谷新報社	岡田 義胤
北羽新報社	島田 豐三郎	中國日日新聞社	牧山 耕藏	名古屋通信社	後藤 忠弘
做 蟻 社	金子 音次郎	大阪毎日新聞社	申 錫 雨	南信新聞社	林 雅 次
北越新報社	廣 井 一	大阪電報通信社	内田 義男	南信毎日新聞社	野 溝 準 治
防長新聞社	吉富 寅太	大分新聞社	本 山 彦 一	室蘭毎日新聞社	鈴木 要 吉
		小樽商業新報社	能 島 進	吳日日新聞社	奥 平 稔
			大津 征夫	山形自由新聞社	服部 敬 吉
			小山 健藏	山形民報社	齋藤 庄之助

第八節 日本新聞協會會員招待晚餐會

第二編 第八章 接待

新發田新聞社	柳澤篁治	東京朝日新聞社	小早川彦一	大阪時事新報社	堀勘一
門司新聞社	下村豐吉	樺太時事新聞社	長井準太郎	大阪朝日新聞社	村上長舉
北門日報社	梅月貞	名古屋新聞社	杉村乙次郎	伊豫新報社	大木貞太郎
大阪朝報社	山内信彌	同	大宮伍三郎	日本電報通信社	河崎義男
鹿兒島朝日新聞社	岡島松次郎	神戸又新日報社	神原章	主催者側	
海南新報社	藤安辰次郎	江差新聞社	西谷嘉三郎	商工會議所	
名古屋新聞社	香川熊太郎	酒田新聞社	佐藤良次	會頭	副會頭
長崎新聞社	森一兵	新愛知新聞社	岡田伊三郎	京都府	京都府
神戸又新日報社	橋本辰次郎	同	勝田重太郎	知事	知事
同	田中龍眉	國民新聞社	須田宜	學務部長	學務部長
酒田新聞社	北尾清	萬朝報社	大竹又次郎	京都市	京都市
新愛知新聞社	池田藤彌	大阪朝日新聞社	上野精一	市長	市長
勢州毎日新聞社	大島慶治郎	神戸日日新聞社	岡田定信	外	外
北門日報社	森永判四郎	德島毎日新聞社	多田爲太郎	箕浦多一	兩助役
	物部巖	報知新聞社			收入役

第九節 其他の接待準備

一 乗車券發行

大禮期間中左記の通り臨時乗車券發行せり。

- 一、有效期間 自十月一日(寫真一) 至十二月末日 二八
- 一、大禮使造營部 七五〇
- 一、府警察部 八〇
- 一、憲兵隊

二、有效期間 十二月中(寫真二)

- 一、大禮使造營部 二五
- 一、京都府 一六一
- 一、日本放送局 二二
- 一、内務省 五九
- 一、在軍人會京都聯合分會 四〇〇

- 一、新聞者其他市關係者 計 三四九
- 一二三七

大時事新報社	堀勘一
大阪朝日新聞社	村上長舉
伊豫新報社	大木貞太郎
日本電報通信社	河崎義男
主催者側	
商工會議所	副會頭
會頭	外
京都府	内務部長
知事	警察部長
學務部長	外
京都市	兩助役
市長	收入役



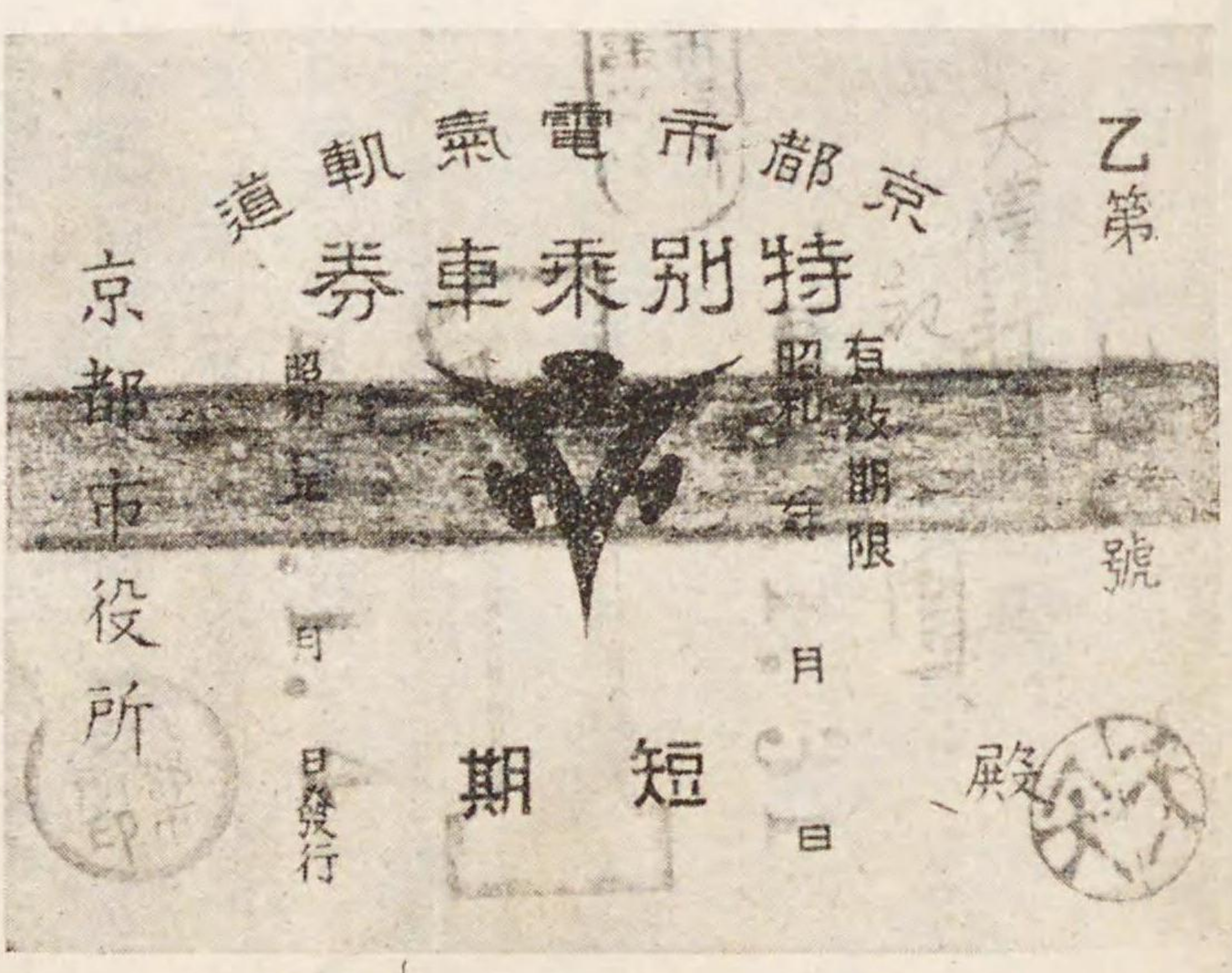
(裏面)

- 一本券御紛失相成候トモ再發不致候
- 一 有效期間經過ノ節ハ御返戻被下度候



(裏面)

同上



(裏面)

同上

- 一、京都市聯合青年團 四〇〇
- 一、新聞社及市關係者 一七六

計 一、二四三

三、全國ヨリ入洛ノ大禮新聞雜誌記者並ニ謹寫團員ニ限り特ニ前記電車乗車券(寫眞三)ヲ以テ市乗合自動車乗車兼用ヲ發行奉祝事務局新聞部ヨリ交付セリ。(枚數六五三)

二 電話 架 設

一、本市晚餐會

十一月十八日日本市公會堂に於ける晚餐會は、本市奉祝諸事業中最も重要なものにして、當日は、皇族各殿下を始め奉り外國使臣並に高官の來場あるべきにつき、會場設備其の他は細大洩らさず一段の苦心を要したる所にして、隨つて通信連絡にも亦勢い繁雜を免れず、よりて電話架設も一時に五個を遞信局に申請せしが僅かに、二個の増設を許されたり、されば一個を東館控室の門外警察官詰所に、他を本館裏天幕張内に取付け、既設の事務室に架設せる二個は、専ら事務用及び新聞記者用として之に當てたり。

二、本市園遊會

十一月十八日京都植物園に於て大禮參列員招待大園遊會を開催するに當り、會場との連絡上既設電話一個のみには不便尠ならず、加ふるに當日は外國使節の來場あり、又新聞通信員の通信連絡、電話使用上に一段の繁雜を極むるは當然なり、因て拾個の一時架設を遞信省に申請し、内五個の承認を得たるにより、之を園内適當の所に配置し

十一月二十二日 市民祝賀會 (植物園) 大阪市音樂隊
禮内第二四號

昭和三年十月二日

京都市長 土岐嘉平

陸軍次官 阿部信行殿

來ル十一月十八日午前十一時ヨリ大禮參列ノ諸員約三千名ヲ招待シ奉祝園遊會相催シ候ニ就テハ貴校軍樂隊ノ演奏方御取計相蒙リ度此段奉願候也
禮祕第一號

昭和三年十月八日

京都市長 土岐嘉平

宮内省式部職長官 伊藤博邦殿

來ル十一月十八日午後六時ヨリ大禮奉祝ノ爲本市公會堂ニ於テ皇族殿下ノ台臨ヲ仰キ外國特派大使、使節並親任官以上ノ參列ヲ乞ヒ晚餐會相催シ候、就テハ貴職樂部ノ演奏方御高配相蒙リ度此段奉願候也
式部第一二九一號

昭和三年十月十五日

式部長官 公爵 伊藤博邦

京都市長 土岐嘉平殿

本月八日付禮祕第一號ヲ以テ來ル十一月十八日貴市公會堂ニ於テ晚餐會御催シノ節音樂ノ演奏方ニ付御照會相成候處當日ハ大禮ニ關ス

第九節 其の他の接待準備

たり、尙十一月二十二日は本市大禮事務の大半終了に伴ひ、市公職者市職員等約五千名を招待する園遊會を開催すべきにより、右電話は同日まで延期の許可を得たり。

三、新聞記者招待會

十一月九日平安神宮神苑に於て、全國ヨリ入洛の大禮新聞雜誌記者及謹寫團員等の招待園遊會開催につき、會場と連絡を圖るべく電話機二個(自十一月八日至十一月十日)を申込み、内一個の架設承認ありたるにより、之を神苑内貴賓室に設置して用務を辨じたり。

四、其 他

大禮事務の圓滑を圖り京都驛前に設置したる府市聯合大禮事務局出張所は、十一月一日事務の開始と同時に電話一個を架設したり、之は大禮事務終了と共に京都驛前案内所に移して繼續することせり。

尙大禮御式場並に大饗宴場御跡拜觀を一般に差許さるゝや、本市は更に一般拜觀者の便宜を圖り、御苑内案内所係詰所に一個を架設し種々の連絡事務に便したり。

三 樂 隊

各種催しに關する樂隊に就ては、本市内に適當なるものなき爲、別紙の如く宮内省陸海軍省大阪市等に交渉し、左記の通りみなせり。

十二月九日 大禮記者團招待園遊會(平安神宮)

大阪市音樂隊

同 十八日 參列員招待園遊會(植物園) 陸軍戶山學校軍樂隊
同 十八日 晚餐會(公會堂) 海軍々々樂隊

ル用務ノ爲支障有之乍遺憾貴意ニ副ヒ難キニ付不惡御通知相成度此段及回答候
禮祕第四二〇號

陸軍戶山學校軍樂隊派遣方ノ件回答

昭和三年十一月十一日

陸軍次官 阿部信行

京都市長 土岐嘉平殿

十一月六日付禮内第二四號ヲ以テ園遊會へ陸軍戶山學校軍樂隊派遣方ノ件了承右ハ御申越ノ通十八日午前十一時三十分ヨリ派遣スル様取計ヒ置キシニ付承知セラレ度
禮祕第十號

昭和三年十月十八日

京都市長 土岐嘉平

海軍次官 大角岑生殿

來ル十一月十八日午後六時ヨリ大禮奉祝ノ爲本市公會堂ニ於テ皇族殿下ノ台臨ヲ仰ギ外國特派大使使節並ニ親任官以上ノ參列ヲ乞ヒ晚餐會相催シ候ニ就テハ貴省總部ノ演奏方御高配相蒙リ度此段奉願候也
官房第三四三〇號

昭和三年十月二十六日

海軍省副官 小横和輔

京都市長 土岐嘉平殿

海軍々々樂隊派遣ノ件

本件ニ關シ禮祕第十號ヲ以テ海軍次官宛御依頼ノ趣了承御來意ノ通

五六五

派遣可致候

右回答ス

祕禮第四號

昭和三年十月十三日

京都市祕書課長 天 矢 景 光

大阪市音楽隊樂長 林 巨 殿

來ル十一月大禮奉祝ノ爲左記ノ通園遊會相催シ候間貴音楽隊ノ演奏相願度此段御依頼致シ候

追テ御承諾下サラハ折返シ御回答願上候

記

十一月八日 午後一時 平安神宮神苑

十一月二十二日 午後一時 京都植物園

昭和三年十月二十二日

大阪市音楽隊樂長 林 巨

京都市祕書課長 天 矢 景 光 殿

十月十三日附祕禮第四號ヲ以テ音楽演奏ノ件ニ付御申込相成候處右ノ中十一月八日ハ當方ニ支障有之乍遺憾御要求難應候へ共十一月十二日ハ貴意ノ通實施致スヘク候間御諒相成度此段回答申上候
追テ十一月八日モ都會ニヨリテハ御要求ニ副ヒ得ラレ候ヤトモ存ジ候へ共只今ニテハ確タル御返事致兼候間申添候也

四 自動車準備

自十月一日至十一月末日使用者左ノ如シ

但し内記係に於て使用のもの

ピアサロ 箱 七人乗 一 市長専用
バツカード 箱 五人乗 二 兩助役専用
ハドソン 箱 七人乗 一
同 幌 七人乗 一
リツケンバツガー 幌 七人乗 一

以上經常當市役所費によるもの

メルチデスベント 箱 七人乗 一 市會議長専用
ビツク 箱 七人乗 一
同 幌 七人乗 一
スケユードベーカー 幌 五人乗 一
ナツシユ 幌 五人乗 一
リツケンバツカー 幌 五人乗 一

以上大禮奉祝費より購入せるもの

デュラント 幌 五人乗 一
クライスラープリムズ箱 五人乗 三
同 幌 五人乗 一
シボレー 幌 五人乗 一

以上大禮奉祝費より借り上げのもの (自十一月一日至十一月三十日)

以上ノ車輛ヲ適當ニ按配シ大體不足ナク貨物自動車ハ臨時借入レテナシタルモ常備ノ必要ナカリキ

昭和三年九月六日

内記係長 天 矢 景 光

各 部 長 宛

御大禮期間及其前後ニ於テ貴部ノ使用セラル可キ自動車ノ見込ミ左記要領ニヨリ來ル九月十二日迄ニ御回報相成度此段及照會候也

乗客人員 臺數 型別 所要 期日 使 途

五人乗 一 箱 十一月十四日午前

三人乗 三 幌 十一月五日午後

自動車借入レニ關シテハ次ノ條項ニヨリ契約ヲナセリ。

借入期間	型 別	臺 數	借 入 先
自十一月一日至同三十一日	デュラント	五人乗幌型 二	京都スター自動車商會 榎 藤 吉 三
同	クライスラー プリムス	五人乗箱型 四	合資會社金剛商會 池 澤 勝 也
同	シボレー	五人乗幌型 二	株式會社大澤商會 大 澤 善 夫

同

【例】 自動車貸借契約書

京都市長土岐嘉平ヲ甲トシ京都スター自動車商會主榎藤吉三ヲ乙トシ自動車貸借ニ關スル契約ヲナスコト左ノ如シ

- 一、貸借期間ハ昭和三年十一月一日ヨリ十一月末日ニ至ル三十日間トス
- 一、乙ハ甲ニ對シ米國製千九百二十八年式デュラント新車六五型、幌型五人乗一臺ヲ貸付シ甲ハ任意ニ使用スルモノトス
- 一、前項ノ自動車ニハ乙ニ於テ各運轉助手ヲ附隨セシムルコト
- 一、自動車使用時間ハ一日ヲ午前七時ヨリ午後十一時ニ至ル十六時間ト定メ貸借料金ハ一臺ニ對シ一日金貳拾七圓トス
- 一、前項時間外ト雖モ甲ニ於テ必要アルトキハ乙ハ直チニ之ヲ供用スルモノト

借入期間	型 別	臺 數	借 入 先
自十一月一日至同三十一日	デュラント	五人乗幌型 二	京都スター自動車商會 榎 藤 吉 三
同	クライスラー プリムス	五人乗箱型 四	合資會社金剛商會 池 澤 勝 也
同	シボレー	五人乗幌型 二	株式會社大澤商會 大 澤 善 夫

ス此場合ノ貸借料金ハ一時間ニ付金麥圓也ト定ム
但シ三十分未満ハ之ヲ切捨ツ

一、料金支拂ハ期間滿了後二十日以内トス但シ乙ニ於テ必要アルトキハ期間中

ト雖モ甲同意ヲ得テ使用済料金ニ對シ請求スルコトヲ得

一、運轉手助手ニ對スル給料諸給與及自動車燃料修繕其他ニ關スル一切ノ費用
ハ乙ノ負擔トス

一、運轉手助手ハ技術熟練品行方正身體強健ニシテ京都市内及近郊ノ地理ニ精
通セルモノヲ選ビ甲ノ同意ヲ得ルコト、尙甲ヨリ運轉手助手ノ交替ヲ要求
シタルトキハ少クトモ三日以内ニ於テ適當ナルモノヲ選定シ甲ノ同意ヲ得
ルコト

一、運轉手助手ノ服裝ハ常ニ清潔端正ナラシムルコト

一、前記自動車ガ事故ニヨリ中途使用ニ堪ヘザルニ至リタルトキハ乙ニ於テ直
チニ甲ノ同意ヲ得タル代車ヲ供用スルコト

一、交通事故ヲ惹起シタルトキハ乙ニ於テ埒明ケ甲ニ迷惑ヲ掛ケザルコト

一、甲乙何レカ一方ニ於テ前記一切ノ一項タリトモ違背シタルトキハ相手方ニ
對シ其日ヨリ契約未了期間一日ニ付金麥拾圓ノ割ヲ以テ違約金ヲ支拂フコ
ト

一、甲乙何レカ一方ニ於テ本契約ヲ破棄セントスルトキハ相手方ノ同意ヲ要ス
若シ同意ナクシテ之ヲ破棄シタルトキハ違約金トシテ金八百拾圓ヲ相手方
ニ支拂フコト

一、乙ガ本契約ノ履行ヲナサザルトキハ保證人ニ於テ本契約履行ニ關スル一切
ノ責任ヲ負フコト

一、本契約書ハ二通之ヲ作製シ各一通ヲ保持ス

一、本契約ハ署名捺印ノ日ヨリ有效トス

第三編

第一章 贈位 敍位 敍勳

茲に大禮を擧げさせ給ふに當り、畏くも古今邦家の爲に盡せし功勞
者を録させ給ひ、十日それノ贈位、敍位、敍勳の御沙汰を下し給へ
り、聖恩枯骨に及ぶこやいはん、いみじき 御聖旨のほご如何でか
感激せざるべけん、今本市に關係深き人々のみを擧ぐれば、

正二位 藤原 光親(承久の變功臣) 同 源 有雅(同上)

贈從一位

正三位 藤原 宗行(同右) 從三位 藤原 行房(建武の功臣)

贈從二位

從三位 藤原 範茂(承久の變功臣) 從三位 藤原 信能(同上)

從四位 横井平四郎

贈正三位

從四位 高橋 宗直(大嘗祭再興者)

贈正四位

正七位 村山 松根(維新勤王家) 正七位 森 寛齋(勤王畫家)

同 若林 新七(儒者) 同 若江 薰子(侍女)

同 葛城 彦一(儒者) 同 富士谷専右衛門(儒者)

贈正五位

野村 敷良(京都瀧口官人) 山本 縫殿(京都勤王家)

以 上
昭和三年十月 日

借主 京都市長 土岐 嘉平
壬生御所ノ内町
貸主 榎 藤 吉三
壬生朱雀町二三
保證人 榎 藤 留三郎

贈從五位

按察使 故從二位 藤原 光親

承久三年 後鳥羽上皇北條義時追討の院宣を下さんごし給ふや、
光親其の不可なるを察し數十の諫狀を上りて之を諫止したるも、納れ

させ給はず、乃ち院旨を奉じて其の院宣を書したり、然るに謀先つ泄
れて、北條時房、泰時等西上し皇軍利あらず、六月東軍闕を犯し、光
親追討の首謀者を以て目せらる、や、上皇に代りて責を負ひ從容し
て六波羅に拘せらる、尋で光親は、武田信光に伴はれて甲斐に護送せ
られ、途上駿河國加古坂に至りて七月信光の爲めに斬らる、享年四十
有六、昭和三年十一月十日從一位を贈らる。

參議 故正二位 源 有雅

承久三年 後鳥羽上皇、特に北條義時を追討せんごしたまひし時
有雅其の樞機に參畫せしが、既にして北條時房、泰時等西上し京師に
迫る、有雅藤原範茂等と共に、二萬餘騎を督して泰時ニ宇治に戦ひ、
利あらずして退き、尋で六波羅に拘せられ、東送せられて甲斐國小瀬
に抵り七月小笠原長清の爲に斬らる、享年四十有六、昭和三年十一月

十日従一位を贈らる。

權中納言 故正三位 藤原宗行

承久三年 後鳥羽上皇討幕の議に參與したりしが、六月東軍闕を犯すや、宗行亦首謀者として六波羅に拘せられ、東送せらるゝの途上駿河國藍澤の原に抵り、七月小山朝長の爲に斬らる、享年四十有七、昭和三年十一月十日従三位を贈らる。

藏人頭左近衛中將 故從三位 藤原行房

後醍醐天皇の御潛幸に扈從して、笠置に赴きしが後城陥り北條氏の爲に捕へらる、尋で隱岐の遷幸に供奉して鞠躬奉仕す、延元元年足利尊氏、西走して車駕京都に遷幸の際には、戎装せずして扈從するこゝを許さる、尋で皇太子恒良親王北國に行啓あるや、從ひて越前に赴き、金澤城陥るの時、難に殉ぜり、昭和三年十一月十日従二位を贈らる。

參議 故從三位 藤原範茂

承久三年源有雅等と共に、北條泰時ミ宇治に戦ひて利あらず、尋で六波羅に拘せられ、北條朝時に伴はれて東送せらる、途中、七月相模國關本に抵り、溪流を堰き止めて淵を作らしめ七月入水して溺没す、享年二十有七、昭和三年十一月十日正三位を贈らる。

參議 故從三位 藤原信能

承久三年北條時房、泰時等西上して京師に迫るや、一千餘騎を率ゐて東軍ミ芋洗に戦ひ、利あらずして退き、尋で六波羅に拘せられ、東送中八月美濃國岩村に於て、遠山景朝の爲に斬らる、享年三十有二、昭和三年十一月十日正三位を贈らる。

舊肥後熊本藩士 故從四位下 横井平四郎

長門の人其の畫く所氣品高きを以て稱せらる、夙に勤王の志を懐き山縣有明、品川彌二郎等に從遊し、元治元年禁門の變後藩主の爲に盡力する所あり、明治の代に入りし後帝室技藝員に擧げらる、二十七年歿す享年八十、昭和三年十一月十日正五位を贈らる。

京都望楠軒塾主 故 若林新七

強齋ミ號す、淺見齋を師とし、其の歿後家塾望楠軒を京都に起して子弟を教授し、楠公景慕の學風を以て尊王の大義を誦吹し、後年其の門流より幾多の勤王の志士を輩出せしむ、享保十七年歿す、享年七十有七、昭和三年十一月十日正五位を贈らる。

昭憲皇太后御入内侍讀 故 若林薰子

明治天皇の女御選定に際して推薦の内儀に與る、尊王の念深く近衛家老女村岡等と共に、志士の間を奔走して幕吏に捕へらる、事再三なりしも屈せず、明治十四年十月九日歿す、享年四十有七、昭和三年十一月十日正五位を贈らる。

故 葛城彦一

前村山松根等と共に島津齋彬の襲封に與り、後半野國臣に通し力を僧月照の入薩に致したる爲孤島に幽せらる、歸藩後關白近衛忠勳に仕へ、薩長連合の爲に重要な任務を遂げたり、明治十三年一月歿す、享年六十、昭和三年十一月十日正五位を贈らる。

京都國學者 故 富士谷專右衛門

京都の人齡九歳の時來聘の韓人ミ筆談し、機警韓人を驚愕せしめたり、經史皇學、國史和歌を究め皇學の諸研究に寄與する所大なり、業を受くる者四方に遍ねし、歿するの時、享年四十有三、昭和三年十一

小楠ミ號す、明治政府開國の大謨翼成者として參與の要職に在り、太政官中の老先生を以て敬重せらる、初め舊福井藩主松平慶永に聘せられて開國の大謨を定め、後公武一和の計を立て勤王討幕の論紛糾するの時に處し、卓然開國進取の大策を以て終始し、明治二年京都寺町丸太町下ル所に兇刃の爲に斃る、享年四十有二、昭和三年十一月十日正三位を贈らる。

朝廷御厨子所頭故從四位下 高橋宗直

元祿四年を以て從四位下に叙し、若狹守たり、制度に精通し、殊に大嘗會の舊典に明かなり、著作の之に關するもの亦多し、朝廷久しく其の儀を行はせられざりしを以て古制明かならず、櫻町天皇の時關白藤原兼香の命を受け、之に關する式典の事を記し朝廷に上り、是に於て 東山天皇貞享四年十一月以來五十一年間中絶したる大嘗會は天文三年十一月を以て行はれ、爾來即位の禮と共に大嘗祭亦行はる、に至りたり、天明五年正月歿す享年八十有三、昭和三年十一月十日正四位を贈らる。

中川宮家臣 故正七位 村山松根

藩主島津齋彬の襲封を速かならしむるの畫策に與かりしこゝあり、後半野國臣、僧月照等の入薩に力を致し、姫島に幽せられしが、歸藩を許さる、や去つて京師に上り、中川宮朝彦親王に仕へ公武全體の爲に盡力したり、後時勢一變し少壯勤王の藩士ミ容れざるを以て、郷里に退く明治十五年一月歿す、享年六十、昭和三年十一月十日正五位を贈らる。

幕末勤王畫家 故正七位 森寛齋

月十日正五位を贈らる。

故 野村敷良

瀧口の官人を以て近宮に仕ふ、嘉永七年偶々當番詰たりし時、猛炎皇居を犯すや、賢所の御羽車を下鴨に奉遷し、尋で 孝明天皇の行宮を聖護院に奉遷したり、神道の冠婚葬祭を許され、神前結婚式神葬式の源を開きたり、明治二十六年七月歿す、享年七十、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

富小路卿家士格 故 山本縫殿

廷臣富小路政直の家士格を以て勤王討幕の密議に參し、安政五年疑獄起るや、同十八十有餘名と共に獄に投ぜられ、二月病篤きを以て家に歸り討幕を叫びつゝ、病歿せり、享年六十有七、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

元京都興正寺門主近侍 故 馬杉絮

土佐藩の爲に採集せし多量の硝石を用ひ、彈藥を製して大和天誅組に交付し、幕偵に疑はれ捕へられて錮せらる、後宥されて三器略傳を著はして三種の神器を説明し、城州山陵實檢抄を著はして皇陵踏査の記述を傳へ、明治天皇即位禮の際紫宸殿の南庭に列拜せり、明治三十一年六月歿す、享年六十有六、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

京都心學家 故 柴田鳩翁

京都の人なり、心學道話の泰斗として鳩翁道話の書と共に其の名世に知らる、徳望高くして仁和寺宮を始め二、三の藩主は、親しく其道話を傾聽するに至る、天保の初め京都明倫舎に講話し、更らに修正舎を再興す、七、八年の大飢饉には、米錢を施與して窮民を賑恤せり

十年歿す、享年五十有七、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

山陰道鎮撫總督麾下 故 人見龍之助

丹波馬路卿は、西園寺鎮撫總督山陰道に入るの第一歩に當る、龍之助乃ち人見姓郷士總代を以て中川姓總代中川武平太共々に全郷士を率ひ、總督を迎へて其の麾下に直屬し、丹波弓箭隊長を以て錦旗を奉じ、山陰道諸藩を歸順せしむるに與かる、鳥羽、伏見の戰未だ訖らざるの時、皇軍若し利あらずんば鳳輦龜山城に遷幸せらるゝ計畫なりしを以て、總督の任務極めて重且大なるものあり、龍之助の率先其の麾下に參じたるは、鎮撫の使命に至大の關係ありしものとす、明治三十一年一月歿す、享年六十有九、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。尚本市在住者にして叙勳、恩賜竝に表彰の恩命に接したる者次の如し。

從五位勳四等 濱岡光哲

敘勳三等授瑞寶章

各通

横田永之助
海老名彈正
島津源藏

敘勳五等授瑞寶章

勳八等 藤井音次郎

敘勳六等授瑞寶章

(以上十一月十日附)

各通

淨土宗智恩院派管長 山下現有
臨濟宗建仁寺派管長 竹田默雷

金杯一個ヲ賜フ

日蓮宗本圀寺派管長 本田日生

銀杯一組ヲ賜フ

貴族院議員

大谷尊由
田中一馬

同

風間八左衛門

同

衆議院議員正四位勳二等

同

片岡直温

同

從七位勳二等 森田茂

同

田崎信藏

同

水谷長三郎

同

鈴木吉之助

同

金杯一個ヲ賜フ (以上十一月十日附)

各通

敘勳二等授瑞寶章

京都府知事從四位勳三等 大海原重義
京都市長從三位勳三等 土岐嘉平

敘勳五等授雙光旭日章

京都府内務部長從五位勳六等 石田馨
京都府警察部長從五位勳六等 池田清

授雙光旭日章

京都府衛生課長正五位勳五等 加藤雄吉

各通

敘勳六等授單光旭日章

警視(特別高等課長)從六位 上田誠一
同(警務課長) 從六位 清水重夫

敘勳五等授瑞寶章

警視(中立賣署長)正七位勳六等 高落利市
警視(保安課長)從六位 土肥米之

警視(西陣署長)從六位勳六等功七級 岡田佐藏

同(五條署長)正八位 山田富次郎

銀杯一個ヲ賜フ (以上十二月二十八日附)

下京區五條通柳馬場西入鹽竈町 湯淺七左衛門

夙ニ我邦蓄電池工業ノ不振ヲ慨シ苦心研究之ガ製造ヲ創メ幾多ノ犠牲ヲ拂ヒ遂ニ優良品ヲ製出シ軍事上及工業上ニ使用セラレテ名聲ヲ博シ斯業ノ發展ニ寄與スル所鮮カラズ洵ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セララル

下京區河原町通三條下ル三丁目奈良屋町 白井松次郎

夙ニ演劇ノ頽廢ヲ慨シ弟大谷竹次郎ト共ニ率先松竹合名會社ヲ興シ刻苦精勵各地ニ劇場ヲ經營シテ斯業ノ向上ヲ圖リ又活動寫真映畫ノ製作ニ志シ苦心研究遂ニ優良ナル映畫ヲ製作シテ之ガ改良發展ニ努ムル等洵ニ實業ニ精勵シ衆民模範タルモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セララル

下京區河原町通三條下ル大黒町 大谷竹次郎

夙ニ演劇ノ頽廢ヲ慨シ兄白井松次郎ト共ニ率先松竹合名會社ヲ興シ刻苦精勵各地ニ劇場ヲ經營シテ斯業ノ向上ヲ圖リ又活動寫真映畫ノ製作ニ志シ苦心研究遂ニ優良ナル映畫ヲ製作シテ之ガ改良發展ニ努ムル等洵ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セララル (以上十月二十九日附)

十年歿す、享年五十有七、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。

山陰道鎮撫總督麾下 故 人見龍之助

丹波馬路卿は、西園寺鎮撫總督山陰道に入るの第一歩に當る、龍之助乃ち人見姓郷士總代を以て中川姓總代中川武平太共々に全郷士を率ひ、總督を迎へて其の麾下に直屬し、丹波弓箭隊長を以て錦旗を奉じ、山陰道諸藩を歸順せしむるに與かる、鳥羽、伏見の戰未だ訖らざるの時、皇軍若し利あらずんば鳳輦龜山城に遷幸せらるゝ計畫なりしを以て、總督の任務極めて重且大なるものあり、龍之助の率先其の麾下に參じたるは、鎮撫の使命に至大の關係ありしものとす、明治三十一年一月歿す、享年六十有九、昭和三年十一月十日從五位を贈らる。尚本市在住者にして叙勳、恩賜竝に表彰の恩命に接したる者次の如し。

從五位勳四等 濱岡光哲

敘勳三等授瑞寶章

各通

横田永之助
海老名彈正
島津源藏

敘勳五等授瑞寶章

勳八等 藤井音次郎

敘勳六等授瑞寶章

(以上十一月十日附)

各通

淨土宗智恩院派管長 山下現有
臨濟宗建仁寺派管長 竹田默雷

金杯一個ヲ賜フ

日蓮宗本圀寺派管長 本田日生

銀杯一組ヲ賜フ

貴族院議員

大谷尊由
田中一馬

同

風間八左衛門

同

衆議院議員正四位勳二等

同

片岡直温

同

從七位勳二等 森田茂

同

田崎信藏

同

水谷長三郎

同

鈴木吉之助

同

金杯一個ヲ賜フ (以上十一月十日附)

各通

敘勳二等授瑞寶章

京都府知事從四位勳三等 大海原重義
京都市長從三位勳三等 土岐嘉平

敘勳五等授雙光旭日章

京都府内務部長從五位勳六等 石田馨
京都府警察部長從五位勳六等 池田清

授雙光旭日章

京都府衛生課長正五位勳五等 加藤雄吉

各通

敘勳六等授單光旭日章

警視(特別高等課長)從六位 上田誠一
同(警務課長) 從六位 清水重夫

敘勳五等授瑞寶章

警視(中立賣署長)正七位勳六等 高落利市
警視(保安課長)從六位 土肥米之

警視(西陣署長)從六位勳六等功七級 岡田佐藏

同(五條署長)正八位 山田富次郎

銀杯一個ヲ賜フ (以上十二月二十八日附)

下京區五條通柳馬場西入鹽竈町 湯淺七左衛門

夙ニ我邦蓄電池工業ノ不振ヲ慨シ苦心研究之ガ製造ヲ創メ幾多ノ犠牲ヲ拂ヒ遂ニ優良品ヲ製出シ軍事上及工業上ニ使用セラレテ名聲ヲ博シ斯業ノ發展ニ寄與スル所鮮カラズ洵ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セララル

下京區河原町通三條下ル三丁目奈良屋町 白井松次郎

夙ニ演劇ノ頽廢ヲ慨シ弟大谷竹次郎ト共ニ率先松竹合名會社ヲ興シ刻苦精勵各地ニ劇場ヲ經營シテ斯業ノ向上ヲ圖リ又活動寫真映畫ノ製作ニ志シ苦心研究遂ニ優良ナル映畫ヲ製作シテ之ガ改良發展ニ努ムル等洵ニ實業ニ精勵シ衆民模範タルモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セララル

下京區河原町通三條下ル大黒町 大谷竹次郎

夙ニ演劇ノ頽廢ヲ慨シ兄白井松次郎ト共ニ率先松竹合名會社ヲ興シ刻苦精勵各地ニ劇場ヲ經營シテ斯業ノ向上ヲ圖リ又活動寫真映畫ノ製作ニ志シ苦心研究遂ニ優良ナル映畫ヲ製作シテ之ガ改良發展ニ努ムル等洵ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セララル (以上十月二十九日附)

下京區五條橋東五丁目 清水 六兵衛

夙ニ陶磁器業ニ従事シ率先圖案ノ改良科學力ノ應用ニ意ヲ注ギ或ハマジヨリカ製法ヲ完成スル等一新機軸ヲ出シ以テ斯業ノ向上發展ニ竭力スル功績尠カラズ洵ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セラ

上京區小川通今出川上ル中小川町 池田 有藏

夙ニ織物業ノ振興ニ意ヲ致シ刻苦精勵製織器具ヲ考案シ或ハ動力使用ノ範ヲ示シテ西陣織ノ改善ヲ促シ更ニ苦心研究實織外數種ヲ考案シ其ノ他西陣織物同業組合副組長及組長ニ推サレテ銳意職務ニ盡瘁スル等斯業ノ發展ニ寄與セル功績尠カラズ洵ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルモノトス依ツテ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セラ

上京區竹屋町通猪熊東入仲之町 稻垣 恒吉

資性温厚夙ニ稻垣合名會社ヲ組織シ推サレテ社長トナリ銳意事業ノ發達ニ努メ又苦心研究屑繭利用ノ縮緬製織法ヲ案出シテ斯業ニ貢獻シ其ノ他各種ノ會社ヲ經營シ或ハ公職ニ盡ス等洵ニ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナリトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ藍綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セラ(以上十一月二十三日附)

下京區醒ヶ井通松原上ル住吉町 福井 繁太郎

夙ニ友仙染業ノ改善ヲ圖リ率先外國染料ヲ研究シ或ハ圖案研究ノ必要ヲ唱ヘ友仙染ノ進歩改良ヲ促シ其ノ他レース模様染付ノ方法ヲ案出シ斯業ノ振興ニ寄與スル等洵ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルモノト

ハ遂ニ死去スルニ至レリ

右ノ行爲ハ崇高ナル犠牲的精神ノ發露ニシテ責任觀念旺盛ナルモノト認ム依テ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和三年十二月五日

帝國在郷軍人會京都支部長陸軍歩兵大佐

從五位
功五等級 土屋 孝之助

表彰狀

帝國在郷軍人會皆山分會

後備役陸軍歩兵上等兵 中村 留一郎

右者昭和三年十一月大禮期間ニ於ケル警衛警備ニ際シ實父重病ニテ臥床中ナルニ不拘警備隊員トシテ日夜出場シ警衛ニ服シツ、アリシガ十一月二十三日夜間警備ニ服務中實父ノ病革マリテ危篤ノ旨急報ニ接シ辛フジテ其ノ臨終ニ會スルヲ得タリ而シテ送葬ノ翌朝ヨリ又復警備員トシテ出場シ最終ニ至ルマデ熱心ニ服務セリ此ノ間家庭ノ状態ヲ口外セズ而モ他人ノ出場ヲ督勵セリ之ニ依リ會員ヲ感化セシコト尠ナカラズ眞ニ軍人精神ノ發露ト認メ表彰ス

昭和三年十二月五日

帝國在郷軍人會京都支部長陸軍歩兵大佐

從五位
功五等級 土屋 孝之助

トス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行ヲ表彰セラ

(十一月二十五日附)

下京區中堂寺橋筒町 菅野 松次郎

夙ニ染業ノ改善ニ意ヲ致シ幾多ノ發明ヲ完成シ斯業ノ發達ニ貢獻スル所多シ爾來更ニ苦心研鑽金巾友仙及著尺物ノ捺染加工ヲ創始シ克ク市場ニ聲價ヲ博シ斯業ノ爲ニ竭力セル勞致尠カラズ仍チ褒章條例ニ依リ銀杯一組ヲ賜ヒ以テ之ヲ表彰セラ

(十二月五日附)

帝國在郷軍人會々員左記二名ハ大禮期間警衛警備ニ關シ同會京都支部長ヨリ表彰セラ

下京區東九條札ノ辻町二百四十二番地

齋田 淺次郎

明治三十三年八月二十三日生

下京區下根設馬場通新寺町東入紺屋町四百四番地

中村 留一郎

明治三十三年十一月十八日生

表彰狀

帝國在郷軍人會陶化分會

後備役陸軍工兵一等卒 齋田 淺次郎

右者昭和三年十一月大禮期間ニ於ケル警衛警備ニ服務中豫テ臥床中ナリシ祖父ノ病狀悪化シ他ニ看護スルモノナキニ不拘自己ノ責務重大ナリトシ専心警備ニ任シ其ノ職責ヲ全フシタルモ不幸ニシテ祖父

第二章 養老賑恤恩賜金

第一節 恩賜

昭和三年十一月十日大禮當日畏くも養老竝に賑恤の儀に付左の通内閣總理大臣に對し優渥なる御沙汰あらせられ、養老の爲木杯竝に酒肴料、賑恤の爲特に御内帑百五十萬圓を各地へ下し賜はりたり。

御沙汰

老ヲ養フハ歷朝ノ玉孝ヲ天下ニ勸ムル所以ニシテ窮ヲ賑ハスハ列聖ノ博愛ヲ兆民ニ獎ムル所以ナリ 朕即位ノ禮ヲ行フニ臨ミ祖宗ノ遺訓ニ遵由シ養老賑恤ノ典ヲ舉ケシム其レ有司ニ命シテ敬ミテ 朕カ意ヲ宣ヘシメヨ

右至仁の聖旨を奉じ内閣告示を以て左の如く發表あり。
今般養老の儀に付御下賜あらせられたる木杯竝に酒肴料頒賜左の如し。

三組木杯 一組

酒肴料 金壹圓五拾錢

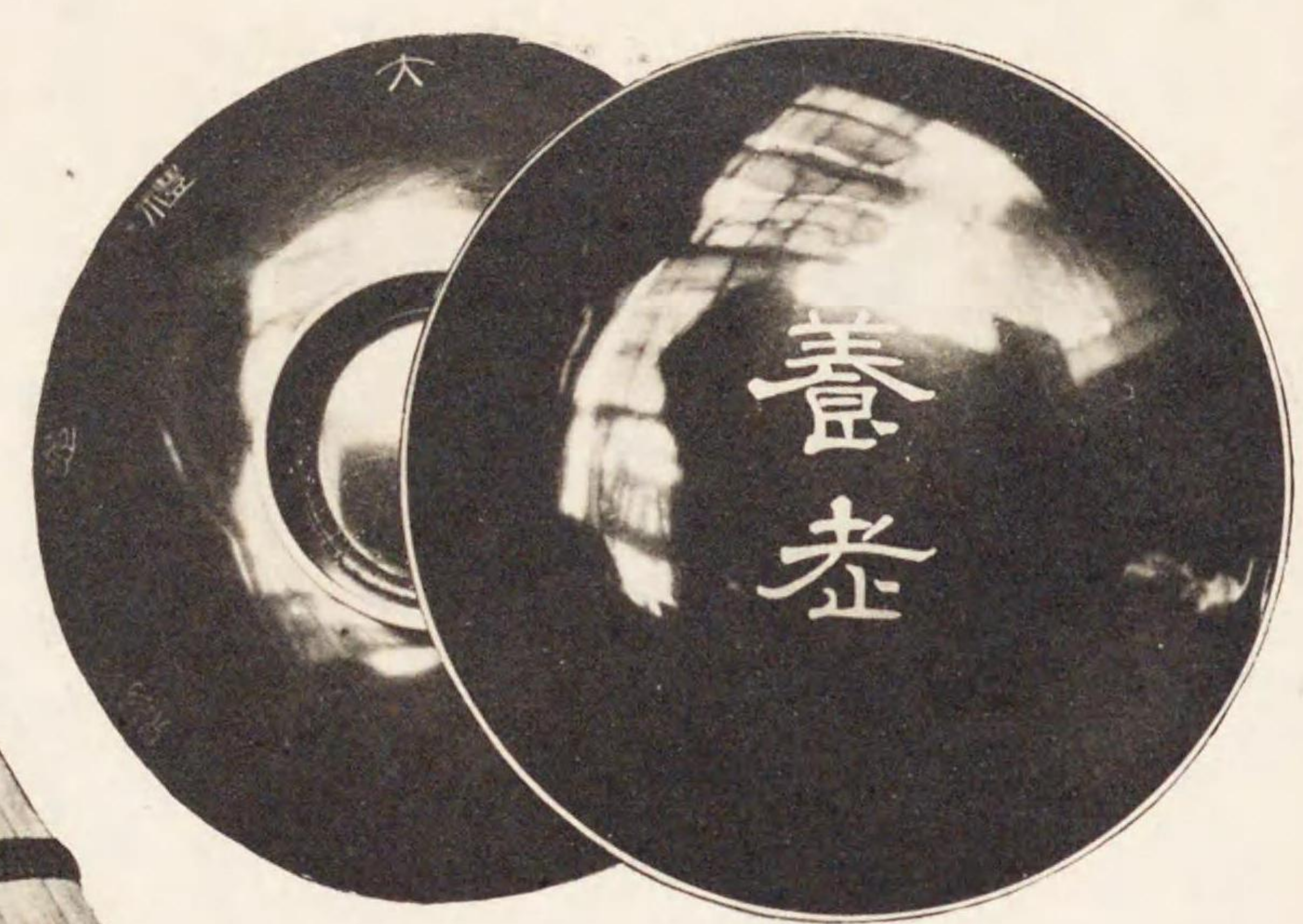
右百歳以上ノモノ

木杯 一個

酒肴料 金壹圓

右九十歳以上ノモノ

木杯 一個



天 盃



酒肴料 金五拾錢

右八十歳以上ノ者

昭和三年十一月十日

内閣總理大臣男爵

田中義一

京都府訓令第三一一號

市町村長

今上陛下御即位ノ大禮ヲ舉ケサセラル、當日

畏クモ養老ノ典ヲ舉ケサセ結ヒ優渥ナル御沙汰ノ次第有之ヤニ拜察スルハ詢ニ恐懼感激ニ堪ヘサル所ナリ當日貴市町村ニ於ケル右御下賜物ノ奉授式ニ關シテハ最莊重ニ之ヲ執リ行ヒ

陛下カ至仁至慈御治世ノ劈頭ニ於テ列聖ノ遺範ヲ紹カセラレ老耄ヲ

勞リ孝養ヲ教ヘ給フノ大御心ヲ奉體シ地方風俗ノ敦厚ヲ促進スルニ

勗メ以テ御趣旨ノ貫徹ヲ期セラルベシ

右訓令ス

昭和三年十一月五日

京都府知事

大海原重義

第二節 本市傳達式

養老の儀に就ては、昭和三年十一月十日午前零時現在の本市に於ける八十歳以上の高齢者二千五百四十九人に對し之を上下兩區に分ちて聖旨を奉じ各傳達式を舉ぐ。大要次の如し。



(校學小賢待市都京) 場式授奉盃天

上京區

日時 昭和三年十一月十日午前十時より

名稱式	場	奉授者及代理者	高齡者數	計	區	域
第一 待賢小學校	太田區長	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一〇、一、二、三、四、五)の各學區
第二 龍池小學校	小倉主事	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區
第三 嘉樂小學校	伊藤主事	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區
第四 室町小學校	淺田主事	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區
第五 錦林小學校	伊藤主事	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區

下京區

日時 昭和三年十一月十日午前十時より

名稱式	場	奉授者及代理者	高齡者數	計	區	域
第一 堀川女學校	五島區長	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區
第二 平安中學校	松岡書記	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區
第三 彌榮小學校	貫主事	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區
第四 皆山小學校	野村主事	伊藤主事	九十歳以上	一、一八六	一、三三三	(一、二、三、四、五)の各學區

第二節 本市傳達式

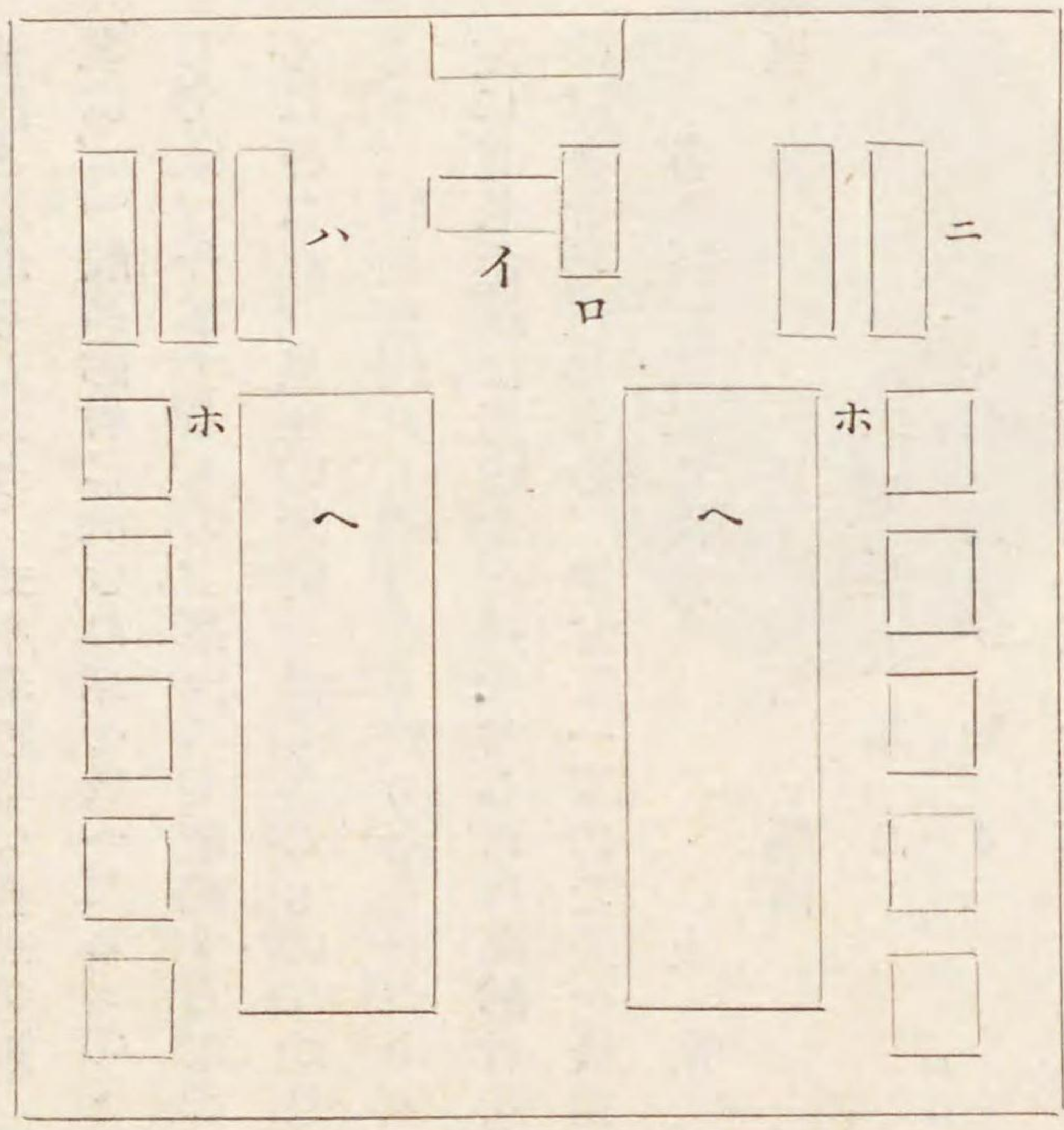
通知狀

御即位ノ大禮ヲ舉ケサセラル、ニ際シ當日歴朝ノ嘉例ニ依リ養老ノ典ヲ行ハセラル高齡者ニ對シ木杯竝ニ酒肴料ヲ御下賜相成候就テハ左記場所ニ於テ右奉授式舉行可致候條御出頭相成度此段及通知候也

日時 昭和三年十一月十日午前十時

場所 何何 區長名

式場設備



- イ、奉授者
- ロ、賜物机
- ハ、來賓
- ニ、兒童
- ホ、頒賜机
- ハ、高齡者

各式場は、講堂又は雨天體操場を之に充て概ね次の設備を爲したり。

- 一 高齡者竝ニ附添人着席

- 一 小學校兒童入場
- 一 來賓 着席
- 一 舉式ノ旨ヲ告グ
- 一 唱歌 君ガ代
- 一 同最敬禮
- 一 奉授者ヨリ聖旨ノ傳達
- 一 御下賜物奉授
- 一 來賓 祝辭
- 一 高齡者總代御禮言上
- 一 小學校兒童ノ奉祝歌
- 一 一同最敬禮
- 一 儀式終了ノ旨ヲ告グ
- 一 終式後直ニ記念撮影ヲナス

當日は、特に官公職員並に地方名望家の參列を求めて、舉式を爲すべしとの其の筋の達示ありしを以て茲に其の地域に關係せる左記人々を來賓として案内狀を發送したり。

來賓 上京區三五二名 下京三八〇名

内譯

貴衆兩院議員、府市會議員、各學區公同衛生正副幹事

市及學區學務委員、小學校長、學區會議長

市有功者、篤志者、在郷軍人聯合分會長

式場關係當該學校長、所轄警察署長

當日は早くより準備を終へて、祝福さる、各高齡者の參着を俟ち受

21	種木定一	22	大森定八
23	黒崎甚七	24	中尾卯助
25	松本文三郎	26	池田信次郎
27	鷺山直心	28	小森政吉
29	河波かめ	30	平尾治兵衛
31	藤竹信治	32	高橋ヒデ
33	高橋五兵衛	34	村井喜代治
35	及川廣愛		
1	水谷武次郎	2	福井太兵衛
3	澤孫右衛門	4	千田長左衛門
5	井ノ口萬助	6	古川吉兵衛
7	矢野彌三郎	8	木村定七
9	中村三之助	10	岡田忠八
11	大西萬治郎	12	東枝吉兵衛
13	中林喜三郎	14	森川彌右衛門
15	辻村多助	16	松浦善助
17	久保田やゑ	18	齋藤佐兵衛
19	紀藤兵衛	20	柴田莊治郎
21	山川清平	22	木下勝治郎
23	高橋重兵衛	24	大森治良兵衛
25	時村榮助	26	種田マス
27	上田鍋次郎	28	中村榮助

同

下京區ノ部

第二節 本市傳達式

けたりしが、八時頃早くも老の身の今日の光榮に得堪へぬ面持ちにて、入場する者の各式場を通じて多かりしには、係員をして驚かしたり、尙日本赤十字社京都支部は特に各式場に救護班を派遣して萬一の用意に當てられたるもうれしく、來賓者の多きも何ものかを物語る心地ぞしたり、式中奉授者の傳達の辭、愛らしき兒童の奉祝歌は、一般高齡者に深き感銘を與へたるもの、如く、天盃拜受に際しては、合掌するもの、感極つて歎歎するなき、洵に天恩の宏大なるに打たれ、皇運の無窮を禱らざるものなかりき、閉式後茶菓を饗し十二時前後何れも滞りなく終りを告げたり。

左に養老盃並に恩賜金を拜受せし市内高齡者氏名を録し、長く皇恩の辱きを感體せしめ、併せて一家の光榮を後世子孫に傳へしむ。

各學區別高齡者代表

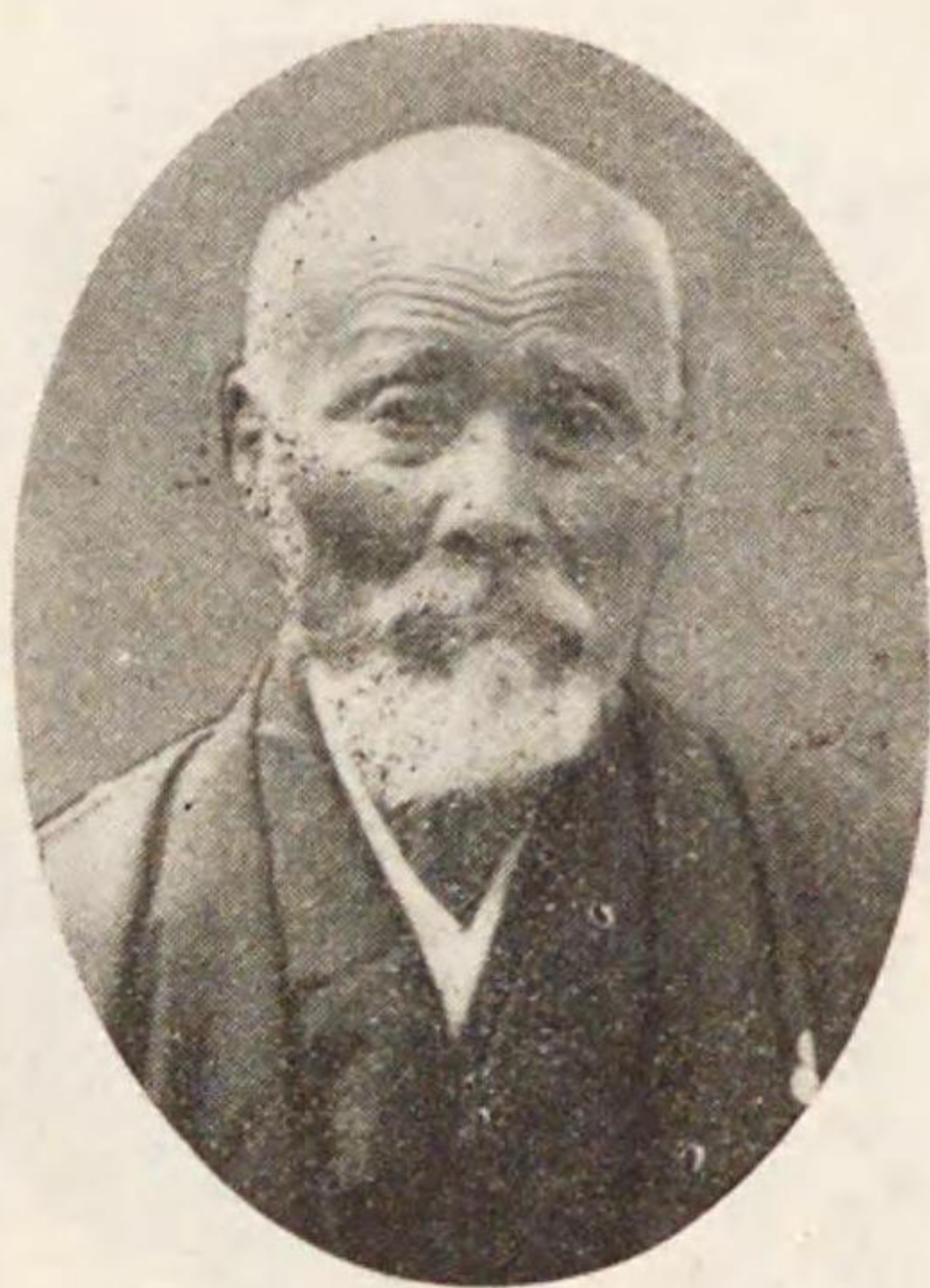
上京區ノ部

1	大阪長次郎	2	佐々木 藤兵衛
3	高橋伊助	4	羽野平七
5	杉浦久七	6	高田萬藏
7	五十嵐 庄兵衛	8	吉田伊兵衛
9	井上宇兵衛	10	小藪常吉
11	山本彌四郎	12	迫田徳太郎
13	川島彌兵衛	14	淺井七左衛門
15	竹中清兵衛	16	田積治平
17	高橋長七	18	田村徳藏
19	西村定七	20	藤本丑之助

29	吉川與右衛門	30	竹内知信
31	藤井利右衛門	32	鈴木勇太郎
33	福野久次郎	34	近藤菊次郎
35	宇野佐兵衛	36	櫻井重治郎
37	田中武次郎	38	松本金助

高齡者中の最高齡者

本市高齡者中其最高齡者に就き日常生活の一斑を特記せば次の如し



近藤常助

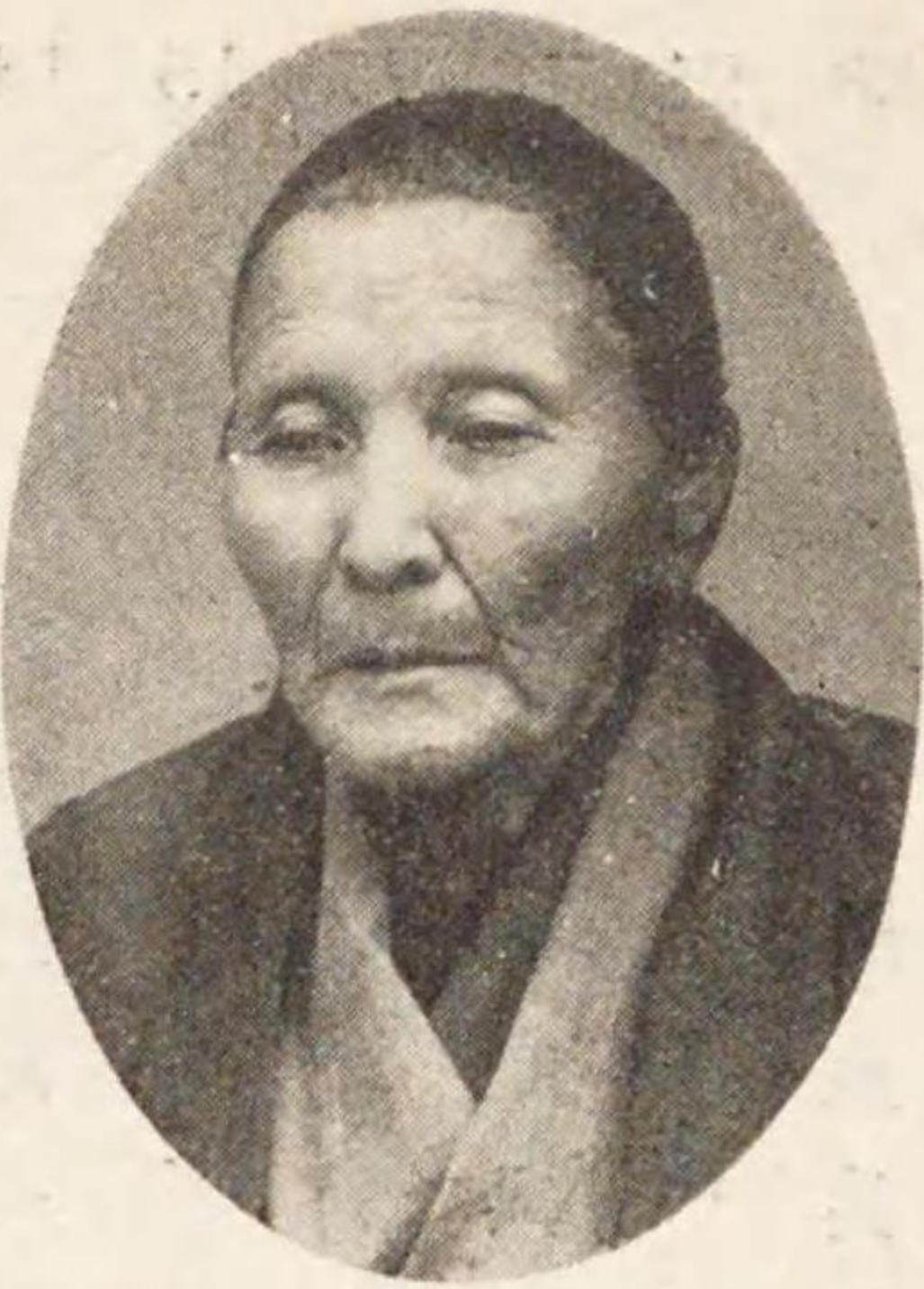
文政五年八月六日生(百七歳)

下京區本町五丁目一七三番地

同人は、京都府下高齡者中の最長年者にして、岐阜縣下海津郡吉里村の生なり。現在の戸主長男富次郎は、郷國にあり。二男金治郎は京都に來りて常助と同居し、菓子製造業を營む。貸家十六軒を有し相當なる居室を構へ裕福なる生活をなし今尙時折郷國に行くを樂せり、本人は二十五歳にて結婚し子供六人孫十九人曾孫十九人あり、明治四十五年妻に死別し一家の大祖父として専ら尊敬を拂はる。

少時寺子屋に入り、文字を解し得たり。食物は普通にして嗜好の第一は酒なり。壯年に入りてより毎日晩酌三合を呑み、百歳に至りても尙一合位は缺かしたるこみなし云ふ、今日まで病氣を知らず、言語歩行共に自由にして、鏗鏘として老後を樂めり、奉授式當日の如きも第

四式場(皆山校)に出席せしが享有の健康體なる上に物事を苦にせず、常に樂天的なりしが斯く稀有の長壽者たる所以ならんか。



下京區八條和氣町一三番地ノ一

藤井 さきこ

文政八年六月二十日生(百四歳)

現戸主は養子宗治郎にして、大正九年大津より轉じて前記の所に吳服商を営み、家族六名貸家をも有する相當の資産家なり。

二十二歳にて結婚し五十年前夫に死別せり、實子なく養子を迎へ孫四人曾孫三人あり、寺子屋に學び少しは文字を解したり、食物は、普通なれ共副食物を多く攝り、腹八分目を嚴守して過食せず、歩行談話は自由なるも視力いたく衰へ、爲めに餘り外出を好まず、奉授式にも出席せざりき。



上京區聖護院西町二番地

清水 やゑ

天保三年四月二日生(九十七歳)

市内淨土寺西田町二十三番地清水佐吉(一男上京消防署消防手)方に同棲し現戸主たり。家族は、二男夫婦の外に孫を加へ四人暮しなり。

り、少食の方なるが菜食主義なり。果物類を好み、酒、煙草、菓子類を好まず。長唄に興味を有し演藝を樂みこせり。

耳は稍遠くなりしが、身體には他に故障なく、歩行も自由に醫藥を用ひたるこみなし、現在に於ても己が身の廻りの裁縫より臺所の手傳もなし極めて規律的なる生活をなす。

若年より早起き早寝を旨とし、清淨を好み入浴を怠らず。是等は自然長壽を保つの原因ならんか。

木杯及酒肴料頒賜高齢者氏名

上京區

毛利シナ	九八歳	清水やゑ	九七	三村しげ	九五
吉崎ナカ	九四	藤井信治	同	井上スエ	同
宮腰この	同	佐々木イソ	同	關目みつ	九三
尾上越藏	同	林こさ	同	金原エン	同
湯淺さく	九二	廣瀬ユキ	同	山本元輔	同
家里蓉洲	同	小林ムメ	同	齋	九一
岸田キヨ	同	吉澤コト	同	山田いし	同
武田チウ	同	古田うた	同	田村いて	同
無苦樓心惠	九〇	佐々木むめ	同	福田くに	同
藤原しげ	同	清水みし	同	大野シゲ	同
安谷アサ	同	木村いさ	尾	和田イト	同
井上トミ	同	池田さく	同	山岸サト	同
前川フミ	同	飯田甚藏	八九	山田千代	同
桂たけ	同	高倉壽子	同	寺島テル	同

本人は、二十六歳にて結婚し六十歳にして夫に死別す。子供は男三人女一人ありしが現存者は、男二名女一名なり。孫四人あり。壯年の頃は田舎にて農業の傍産婆を営み、五十歳の時上京せり。

若き頃より菜食主義にして酒を嗜み、現在百近くなりて尙一日二三合を缺かさず、能く労働に堪へて病氣醫藥を知らざりしが九十歳の頃より喘息を患い、現在は眼疾を病みて殆ん失明に近くなれり。されど元氣よく、時には附添さへあれば餘程の道にても歩行し得るさいふ固き眞宗信者にして本願寺詣を樂みこし父系はすべて長壽者にて弟妹四名現存し、次妹は八十四歳の高齢にして本市に現住す。



上京區大將軍鷹司町三六番地ノ二、六士族

三村 しげ

天保五年九月十日生(九十五歳)

現戸主三村信(京都市嘉樂尋常高等小學校長)の祖母に當り孫、曾孫等八人暮し、中流以上の生活をなす。本人は二十三歳にして結婚し四十二歳にして夫に死別せり。女兒四人ありしが何れも早逝し現存者一名のみ。孫五人曾孫十五人ありて家門繁榮せり。縁者に知名の人多く故式部長官男爵三宮義胤氏は甥に當り、故侍醫桂秀馬氏は姪の夫君たり又歌人女官として明治婦人の典型と云はれし故税所篤子刀自は従妹に當れり。

日常消息文、和歌等を讀み書きし、年老いたれど美しく氣品に富め

川端ヨリ	同	小林源兵衛	同	古川ヲカ	同
木村しげ	同	梅香家リウ	同	平尾治兵衛	同
比賀江まさ	同	山末嘉藏	同	竹鼻ヨネ	同
小島チエ	同	宮田ユカ	同	篠本さこ	同
岡本まさ	同	畑利助	同	齋藤イト	同
三宅みさ	同	松井加代	八八	藤木丑之助	同
住江ぬい	同	歳谷小右衛門	同	永田ウノ	同
山田キク	同	栗本トヨ	同	松尾ユキ	同
伊藤しな	同	杉本伊助	同	矢野フジ	同
青木のふ	同	矢森キク	同	和田サキ	同
後藤たみ	同	林まち	同	大阪長次郎	同
津久田熊吉	同	岡本融運	同	河村ユキ	同
佐々木藤兵衛	同	久保リエ	同	山本ふつ	同
小澤八重	同	榎並スミ	同	松尾トメ	同
井出なか	同	及川廣愛	同	山崎藤次郎	同
澤田たけ	同	三宅うた	同	黒川ユト	同
堀こゆみ	同	志波長之	同	内田りゑ	同
橋本長三郎	同	高屋いま	同	豊田ナカ	同
山内イサ	同	中島キミ	八七	高橋五兵衛	同
木村ヒサ	同	大宮さわ	同	石橋つる	同
本多チエ	同	西村トラ	同	河村泰基	同
竹内すゑ	同	東村喜助	同	芦谷キシ	同
小森しん	同	北尾ふみ	同	高瀬ちか	同
今西タケ	同	樋口その	同	西村彌兵衛	同

永田久兵衛八四	山田つた同	山中祥曹同	森政吉同	北村せき同	高島常七同
井上宇兵衛同	吉田ユミ同	松田たけ同	戸田テル同	橋本鹿之助同	山本新次郎同
竹内ぎん同	長谷川コマ同	鹽見ツタ同	藤村ステ同	田中くに同	野口ハヤ同
廣野みよ同	小倉たか同	牧見ツタ同	菊池幸吉同	渡邊良榮同	草野ツキ同
山木ヤエ同	越後きさ同	石黒きく同	小籾常吉同	佐々木さき同	五島宜暢同
中川イク同	萩野みつ同	小西熊治郎同	西村フキ同	奥村源七同	山田いの同
藤本七左衛門同	吉竹うの同	江尾ひろ同	藤本さみ同	津田こさ同	小西せい同
杉山うた八三	中村トメ同	尾上すけ同	村岡吉次郎同	沼田キミ同	宮本豊吉同
吉田きん同	松井ステ同	川崎いく同	栗津イト同	本田ヒサ同	山本彌四郎同
八木源之助同	村山シナ同	川口伊三郎同	小倉ちよ同	吉川キタ同	山田モト同
川口ハナ同	高橋伊助同	北村すゑ同	岡本ヤチ同	中江種造同	林田ミネ同
加藤セイ同	小林政七同	上阪トメ同	橋本モヨ同	新島八重同	船越フテ同
奥村小三郎同	井上ちう同	齋藤タキ同	森澤セイ同	仁科ヤエ同	岡本ヒロ同
中村徳之助同	上田たく同	平井まさ同	八田千代同	西島きく同	堀寅三郎同
竹園リン同	小倉忠尋同	和田せい同	奥村叔郎同	西村興三吉同	村山安次郎同
古川ハツ同	片平藤四郎同	浅井くじ同	小野文次郎同	井上いく同	堀原ついで同
堀のほ同	辻村直七同	長谷川ふじ同	菊池きく同	西村孫右衛門同	梶原みや同
奥田あい同	山崎すみ同	藤原嘉兵衛同	西村くに八二	植村キヌ同	川端たつ同
西エイト同	二本ふさ同	小西ミト同	西垣すう同	富岡ハル同	川添つさ同
松村コノ同	市村マサ同	辻本勝治同	梶原きさ同	佐々木トミ同	井上たけ同
中村よしゑ同	西山フサ同	中村治三郎同	木村すわ同	北川みつ同	太田さき同
多久幸同	今井平七同	人見コマ同	西村きぬ同	澤田はる同	小林カメ同
岡島初造同	藤井ささ同	宮西うた同	中島いさ同	林タネ同	住岡チヨ同
池田信太郎同	田中クラ同	木村シズ同			長山さを同

千壽スミ八二	岡本かぢ同	高田當太郎同	後藤さだ同	赤尾サト同	同富島峰
端井サト同	大久保文尾同	宮田米三郎同	西村つる同	可直つね同	寺尾トシ同
長瀬常吉同	桂さく同	奥村しな同	宮谷つや同	古坂ヒテ同	馬淵淇山同
水谷こま同	大石ヨシ同	安藤ウタ同	居川久次郎同	深見敦美同	今西キヌ同
安藤ゆ幾同	新島正武同	伊藤せき同	石橋タネ同	河瀬朝尾同	田積治平同
森田いよ同	浅野クニ同	出口平次郎同	瑜伽教如同	原澤トミ同	伊藤くに同
三木清三郎同	松永タイ同	松井ナカ同	山田かつ同	元川さく同	若草治右衛門同
福富安次郎同	中小路トミ同	浅野みさ同	藤川サカ同	岩本ナカ同	澤邊みね同
松下シカ同	中島市良同	八百谷甚平同	山内タケ同	梅原マサ同	田邊てつ同
鳥居伊兵衛同	牧みね同	西池壽榮同	田中三郎興門同	長谷川サト同	松村松之助同
石田さく同	倉橋五郎衛同	中川まつ同	磯谷いし同	徳田つき同	谷口コマ同
三木太七同	伊藤しか同	永田ミツ同	寺崎ゑ舞同	森もさ同	木村コサヨ同
西井之祐同	松田松太郎同	中井茂登同	高間イマ同	松室重明同	竹中嘉七同
白井直七同	島田けい同	井上まつ同	渡邊フサ同	奥村ヒテ同	岡田ツネ同
細井あさ同	千代田ツセ同	大住ミヨ同	本庄ユキ同	松村嘉七同	大橋宗助同
上西つま同	角田ハル同	池田ミキ同	黒田さく同	太田タカ同	竹内ミチ同
本郷カツ同	川崎ツネ同	小田よし同	大西すみ同	橋本フツ同	杉江コマ同
今井正太郎同	若井シヨ同	谷岡あく同	宮本リウ同	桐山庄次郎同	中井ハル同
久保モト同	林まさ同	高松みね同	西村かめ同	山口榮次郎同	川勝新助同
河井みよ同	一谷うの同	山本喜兵衛同	池田ツネ同	白井幸助同	荒木ハル同
若林カメ同	竹中ハル同	岡田小なみ同	田中興吉同	古谷コマ同	南てる同
田中サキ同	田邊龜次郎同	古川はる同	清閑寺久榮同	山中みつ同	宮田ムメ同
松村ささ同	岸本うた同	上田ヌイ同	中西くま同	加藤こん同	角野テウ同
見子爲藏同	野木定七同	高田セイ同	村井喜代松同	鳥山トヨ同	糸井いさ同

高橋兵七	八二	有田カヨ	同	井上うた	同	北川きみ	同	大井幸次	同	入江ナヲ	同	柳マサ	同	富敦榮	同	川原いろ	同	菊岡セイ	同	恒川ヨネ	同	河合きみ	同	加藤つる	同	小瀬マツ	同	光久まつ	同	濱部喜代	同	加藤道榮	同	長屋八郎	同	國友ヒロ	同	三宅かす	同	池田八之助	同	石田ナヲ	同	平井タツ	同	中川素允	同	山本タケ	同	伊藤のぶ	同
高橋ハル	同	村山マキ	同	北川きみ	同	大井幸次	同	入江ナヲ	同	柳マサ	同	富敦榮	同	川原いろ	同	菊岡セイ	同	恒川ヨネ	同	河合きみ	同	加藤つる	同	小瀬マツ	同	光久まつ	同	濱部喜代	同	加藤道榮	同	長屋八郎	同	國友ヒロ	同	三宅かす	同	池田八之助	同	石田ナヲ	同	平井タツ	同	中川素允	同	山本タケ	同	伊藤のぶ	同		
高橋ハル	同	村山マキ	同	北川きみ	同	大井幸次	同	入江ナヲ	同	柳マサ	同	富敦榮	同	川原いろ	同	菊岡セイ	同	恒川ヨネ	同	河合きみ	同	加藤つる	同	小瀬マツ	同	光久まつ	同	濱部喜代	同	加藤道榮	同	長屋八郎	同	國友ヒロ	同	三宅かす	同	池田八之助	同	石田ナヲ	同	平井タツ	同	中川素允	同	山本タケ	同	伊藤のぶ	同		

山田みつ	同	小杉クニ	同	越田與作	同	上田藤江	同	人見榮吉	同	竹下イサ	同	金田まさ	同	松田まち	同	河原ます	同	宇野藤左衛門	同	盛下チウ	同	池田フツ	同	杉谷ちう	同	武田まさ	同	佐々木フミ	同	衛湖原らく	同	松岡ふん	同	清水りき	同	安田テル	同	近藤ソテ	同	大橋たね	同	山下順造	同	舌ふじ	同	灘三右衛門	同	森川庄七	同	岡田マサ	同	中村シナ	同	松井アイ	同
山田みつ	同	小杉クニ	同	越田與作	同	上田藤江	同	人見榮吉	同	竹下イサ	同	金田まさ	同	松田まち	同	河原ます	同	宇野藤左衛門	同	盛下チウ	同	池田フツ	同	杉谷ちう	同	武田まさ	同	佐々木フミ	同	衛湖原らく	同	松岡ふん	同	清水りき	同	安田テル	同	近藤ソテ	同	大橋たね	同	山下順造	同	舌ふじ	同	灘三右衛門	同	森川庄七	同	岡田マサ	同	中村シナ	同	松井アイ	同
山田みつ	同	小杉クニ	同	越田與作	同	上田藤江	同	人見榮吉	同	竹下イサ	同	金田まさ	同	松田まち	同	河原ます	同	宇野藤左衛門	同	盛下チウ	同	池田フツ	同	杉谷ちう	同	武田まさ	同	佐々木フミ	同	衛湖原らく	同	松岡ふん	同	清水りき	同	安田テル	同	近藤ソテ	同	大橋たね	同	山下順造	同	舌ふじ	同	灘三右衛門	同	森川庄七	同	岡田マサ	同	中村シナ	同	松井アイ	同

北村いし	八一	林徳次	同	田中てい	同	服部うた	同	荒川サク	同	河野壽	同	安田マツ	同	吉岡フミ	同	戸間正徳	同	安田はる	同	武者満歌	同	光島キヌ	同	高坂セキ	同	大西フシ	同	吉田駒吉	同	角田常七	同	井上多三	同	岡本ユキ	同	川並コト	同	川越タキ	同	内山よし	同	飯村トキ	同	松井伊三右衛門	同	小林忠一	同	久田エン	同	村山忠七	同
北村いし	八一	林徳次	同	田中てい	同	服部うた	同	荒川サク	同	河野壽	同	安田マツ	同	吉岡フミ	同	戸間正徳	同	安田はる	同	武者満歌	同	光島キヌ	同	高坂セキ	同	大西フシ	同	吉田駒吉	同	角田常七	同	井上多三	同	岡本ユキ	同	川並コト	同	川越タキ	同	内山よし	同	飯村トキ	同	松井伊三右衛門	同	小林忠一	同	久田エン	同	村山忠七	同
北村いし	八一	林徳次	同	田中てい	同	服部うた	同	荒川サク	同	河野壽	同	安田マツ	同	吉岡フミ	同	戸間正徳	同	安田はる	同	武者満歌	同	光島キヌ	同	高坂セキ	同	大西フシ	同	吉田駒吉	同	角田常七	同	井上多三	同	岡本ユキ	同	川並コト	同	川越タキ	同	内山よし	同	飯村トキ	同	松井伊三右衛門	同	小林忠一	同	久田エン	同	村山忠七	同

増田いさ	同	山本みよ	同	關戸その	同	倉口セイ	同	中野キク	同	小谷ふじ	同	石井トモ	同	川崎その	同	山崎彦五郎	同	藤井キヌ	同	長谷川爲治	同	大森ます	同	和田庄兵衛	同	井上なか	同	吉村みつ	同	越前谷つや	同	新井イソ	同	下川浪江	同	中村リエ	同	西村壽美	同	井上つゑ	同	川畑きく	同	東ノイ	同	森仙次郎	同	山田てい	同	服部さく	同
増田いさ	同	山本みよ	同	關戸その	同	倉口セイ	同	中野キク	同	小谷ふじ	同	石井トモ	同	川崎その	同	山崎彦五郎	同	藤井キヌ	同	長谷川爲治	同	大森ます	同	和田庄兵衛	同	井上なか	同	吉村みつ	同	越前谷つや	同	新井イソ	同	下川浪江	同	中村リエ	同	西村壽美	同	井上つゑ	同	川畑きく	同	東ノイ	同	森仙次郎	同	山田てい	同	服部さく	同
増田いさ	同	山本みよ	同	關戸その	同	倉口セイ	同	中野キク	同	小谷ふじ	同	石井トモ	同	川崎その	同	山崎彦五郎	同	藤井キヌ	同	長谷川爲治	同	大森ます	同	和田庄兵衛	同	井上なか	同	吉村みつ	同	越前谷つや	同	新井イソ	同	下川浪江	同	中村リエ	同	西村壽美	同	井上つゑ	同	川畑きく	同	東ノイ	同	森仙次郎	同	山田てい	同	服部さく	同

澤	細井	藤原	淺田	上西	山口	加納	藤井	西村	岡田	太田	佐藤	櫻井	橋本	井上	岩井	小泉	宮崎	鹽野	池田	竹内	田中	横井	辻
彌右衛門	龜吉	定助	庄八	清藏	治三郎	沙三郎	ミツ	チク	ナミ	ナミ	テツ	トミ	かの	八重	多	タ	マ	トヨ	ハナ	エイ	ツイ	よ	トモ
八四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
濱田	岡本	藤井	岸	吳田	狩野	和氣	福田	西村	大西	恩田	佐藤	澤田	西田	井口	小西	小川	箕田	白井	後藤	竹内	高橋	三好	辻
治左衛門	本季	長吉	其正	保藏	野キ	マス	コウ	きぬ	みき	のぶ	小き	スミ	さく	ふさ	みつ	み	ネ	つね	まさ	キク	熊	かめ	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
西村	大森	藤井	内田	山岸	柏原	大八木	佐々木	時村	大野	平林	齋藤	春木	石井	井ノ口	小西	早月	島木	新宮	谷邊	武山	高田	並川	中村
伊三郎	治郎兵衛	幸助	源次郎	常次郎	トヲ	ハル	マサ	たけ	ヒサ	能へ	コト	ミキ	キク	イマ	ヨネ	トク	セツ	ミネ	タケ	つる	イク	しか	まち
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
中村	坪倉	武内	山形	中堂	長美	岸田	村上	内田	北川	森	木村	高須	梅原	鳥居	五十嵐	拜藤	笠原	横山	中川	能勢	松浦	小原	三田
みね	ぬい	ひさ	みし	こさ	ユキ	りう	つね	さめ	さみ	サト	きぬ	ふじ	モト	キシ	治平	萬藏	作造	與三	三藏	藤兵衛	善助	伊平	源七
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
植村	妻形	野々口	熊野	内海	木村	内田	杉本	野口	有光	木田	山崎	竹中	上田	佐藤	市村	西村	河島	田邊	中村	渡邊	藤井	小泉	三宅
さよ	ハナ	ラク	かん	つね	ヨネ	ナミ	ヒサ	ツタ	マン	リク	みつ	キク	ふじ	ひさ	勇助	清次	吉之助	三之助	三郎	三郎	幾松	作次	新七
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
種田	辻村	山岸	久保	前田	木下	村上	杉浦	福井	毛利	木浦	藤森	森	吉江	石田	林	西谷	川尻	田中	中島	松井	古山	櫻井	森下
マス	エン	きく	い	ミト	チウ	てる	エン	八尾	ひで	八重	ら	音吉	善右衛門	庄吉	菊次郎	源三郎	桂次郎	竹次郎	清右衛門	政治	常造	重次郎	光二郎
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

西村	中村	竹口	谷口	高木	吉見	白川	石田	小松	小森	澤田	櫻井	馬場	西田	大西	堂前	脇坂	河合	門地	北川	鈴木	村松	黒田	山本
うた	シモ	かよ	いさ	うの	トミ	フシ	コマ	しゆう	コウ	りさ	貞	みね	はる	サク	きさ	たけ	ヨシ	よね	マキ	まさ	たけ	藤枝	こゑ
八三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
井上	中川	竹内	谷	御	三宅	市田	井上	小原	小森	平井	平岡	長谷川	西田	太田	堀	川勝	梶谷	森	明石	守野	梅村	安田	菅井
さみ	イン	ツル	リキ	ささ	スミ	ヘン	しも	玉	きの	いま	ちよ	サト	マツ	シゲ	テル	ゑつ	やす	ツウ	まつ	サキ	すへ	シチ	比手
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
中原	竹塚	谷口	田中	吉村	式村	池田	小寺	小林	小谷	東出	平田	服部	西村	布村	大澤	鷺尾	片山	森	森	上野	山	山口	
さき	ハル	せい	きく	マツ	イク	ユト	かね	ささ	しげ	津類	うた	マサ	サキ	マツ	りき	はつ	セツ	ムメ	きく	イク	マツ	ちい	ミネ
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
山口	杉山	三玉	丸谷	永田	中村	槌田	田中	田中	高橋	田村	吉田	三野	鹿野	飯村	稻垣	柴田	井上	越智	小野	小野	齋藤	佐藤	平井
フヨ	サク	キ	ふで	津留	テル	カツ	ハル	ハル	美屋	タケ	アイ	カ	うた	この	まさ	カ	キシ	はる	リウ	リウ	ウツ	はる	イロ
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
細谷	酒井	波多野	夏原	長尾	中川	谷口	田中	田中	高田	米澤	水上	三上	今西	市川	飯田	今井	岩本	小澤	小野	小野	小林	齋藤	平山
治平	四郎兵衛	繁吾	まつ	小み	りよ	いよ	コト	コト	美津江	アサ	コト	かし	ト	カ	スエ	つね	の	リウ	はる	はる	トヨ	モト	ヨネ
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
原	西川	繁友	内藤	中野	堤	谷内	田中	高尾	田原	吉雄	三栗	清水	乾	稻村	長宗	井上	井加	小野	小野	笹岡	齋藤	佐敷	平子
田隆	さめ	もさ	ツウ	左和	みね	きよ	春榮	チカ	シカ	ヨシ	シゲ	サト	ヨソ	スエ	よし	キミ	ツル	かつ	かつ	りさ	アサ	い	ちやう
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

畑 すが八二	橋田サト	八里ヒサ	山本イシ	益田モト	前田スミ
原田ふで	林 さと	長谷川ふさ	前川ハル	松本シン	松本たね
新田まつ	西脇タカ	西村こきの	松下くら	永田増太郎	中森初三郎
徳永しげ	豊澤いく	土岐いく	中村徳次郎	辻村多助	外村信喜
富永ゆり	戸崎ムロ	銅山カメ	竹島榮吉	高田新助	米山駒次郎
千坂テイ	岡田はる	岡田みつ	吉川與右衛門	吉田常七	重藤八藏
奥田コウ	奥井キク	大谷のぶ	柴田莊治郎	伊藤芳三郎	石母田瀧三郎
大田よね	大槻スエ	大塚シナ	越野伊三郎	坂本嘉助	人見作治
川那部ヨ	川村まさ	片尾久次郎	早川庄八	西村久左衛門	堀 專助
片山ハマ	神田てる	勝見マツ	堀内清次郎	本田九重松	大西萬治郎
古川みよ	船井ミキ	布瀬いの	川島小三郎	河本喜兵衛	片山定七
藤田ナツ	福住マサ	福島さの	加舎又左衛門	神山正道	柏木役藏
福島みか	福田キヌ	福山せい	藤井利右衛門	紀藤兵衛	木下勝次郎
寺澤ハル	浅井つよ	安食まさ	木野邑 吉兵衛	上田茂三郎	八木忠七
雨林セキ	相川きわ	赤松フツ	矢野 新	山口與吉	前田利助
北村きぬ	岸 ウタ	岸本ついで	岩佐テイ	山口セイ	小笹松之助
木下まさ	木村アサ	森本ハツ	寺口新兵衛	今村福彌	中島タメ
森田キク	森 さく	元持まさ	太田きの	中村せん	福田マス
元生フシ	守屋ミツ	杉山サキ	榊原さみ	西村ヤス	福田ウタ
上田きん	上田玉代	上田マサ	井尻美津	玉井みつ	絹清忠兵衛
野村クニ	野村さみ	久納こさ	小林 壽	伊藤さみ	小林ムメ
國松さか	久保ハナ	山林ユキ	青山つね	坂本長七	岩井甚作
山谷さくら	山根すゑ	山中つた	今井甚兵衛	射庭勇治郎	井上政之助
山本いそ	山本ふい	有岡クマ	井上久藏	井上音二郎	井上吉兵衛

井上藤兵衛八一	小泉秀次郎	小森又七	岩井たき	岩井トク	岩佐よね
小林藤七	駒井太兵衛	佐々木和三郎	井上ハナ	井上エイ	井谷もさ
中井金助	中林喜三郎	中村忠七	石田サヲ	兒島コウ	小山シマ
中村直行	津田卯助	田中久左衛門	小財タキ	小川なか	小森千代
田伏音吉	高橋正太郎	水谷武次郎	小島ラム	小島ふみし	小野テン
水谷富次郎	箕浦和市	峯 半七	小林トク	小島たね	小林あや
三好安次郎	三浦多重郎	嶋田仁三郎	小林ヘン	小島眞教	櫻井ふい
林 宗治	西 佐之吉	西山磯右衛門	佐竹あさ	廣田りき	廣瀬しづ
堀田重助	本城惣兵衛	東枝吉兵衛	平井イワ	永田ウノ	永島チヨ
千田長右衛門	千葉政次郎	岡本小金治	長瀬す江	長野つよ	中田アイ
岡本久兵衛	落合久七	大野半四郎	中島サト	中島エイ	中村ステ
片桐爲七	桂 明	深川常七	中村ふさ	津田ナチ	塚本しか
不破忠兵衛	藤岡卯之助	藤原・勇助	竹内せい	竹内りか	谷口ふさ
福住周存	寺田龜吉	北野参治郎	田中ルイ	田畑カツ	田畑古登免
仙波助重郎	杉山辰次郎	村上藤二郎	高木テイ	吉村チヨ	吉田かや
向 佐兵衛	雲林院 熊之助	内田利平	宮野チウ	三宅禮意	三井きの
上杉彦八	野々垣和助	矢野又三郎	白瀬チカ	鹿田千代	下田つる
安川藤三郎	山本龜吉	山本庄兵衛	嶋本チウ	早崎リサ	清水ユキ
山下松太郎	山田勇太郎	山田芳造	花園ナチ	橋本ウメ	早野美津
山田常吉	政 重太郎	松本桂之助	原田はな	林 トメ	原田さつ
松本徳次郎	松山一峰	山田作藏	林田らく	林 トメ	林 ぶじ
一浦タカ	糸岡りさ	磯島さく	長谷川てい	西明ゆき	服部せい
今井まさ	今宿よね	池田カツ	西村しか	堀池イト	西村ムメ
伊藤婦志	伊藤ヤエ	伊藤ユト	堀池イト	堀田コマ	堀田コマ

前川	タネ八〇	松見	シナ同	松村	ヨミ同
松本	ヤナ同	松田	さも同	山本	ツキ同
山内	キク同	山口	すゑ同	山田	よね同
牧野	はつ同	政	コウ同	澤島	うの同
佐藤	なを同	佐々木	たが同	佐々木	つる同
樋口	しも同	平井	ハル同	平田	ツナ同
堀部	ふじ同	相和島	イシ同	田中	しげ同
矢崎	ウタ同	安見	ふさ同	安西	ふい同
安田	コシナ同	安田	こま同	安場	つね同
山本	雪同	山本	きよ同	島田	きさ同
飯田	ナカ同	五十嵐	スミ同	猪田	たき同
池樹	ユカ同	伊東	タミ同	岩月	ハル同
井元	りき同	井上	ささ同	石井	ラク同
交野	うの同	近藤	まさ同	小倉	きせ同
小川	イト同	小野	コト同	小林	ユキ同
酒井	いさ同	阪野	たつ同	谷口	アイ同
谷口	てい同	谷澤	チカ同	竹内	たけ同
竹岡	さみ同	田中	ヤス同	田中	コマ同
田村	チウ同	田島	小マツ同	田邊	シモ同
高田	ヤエ同	高瀬	ふさ同	吉竹	ナカ同
吉川	カヘ同	吉川	きみ同	吉田	ふで同
井狩	幸七同	横田	ムメ同	岩田	利右衛門同
林	うた同	久保村	サト同	倉本	トモ同
大八木	コウ同	北林	きく同	西村	マサ同

第三章 天覽竝に御買上品

天皇 皇后兩陛下には、京都皇宮に御駐蹕中地方の物産に 天覽を給ふの御沙汰あり、大禮使及び京都府に於ては數回に互れる打合會を開き、京都市の物産を中心として次の方針を立てたり。

天覽に供すべき物品の調査方針

一、主として御土産御選定ごなるべき品物

二、産業獎勵上 天覽に供したき品物

天覽品陳列場所は、前例により御所内第二朝集所の四室を充當さるゝ方針なりしが、今回は郡部並に奈良縣よりも同様物産の 天覽を願出でしにより、九月に至り第一朝集所に變更されたり。

出品者の人選及出品物の決定

一、組合にあるものは、成べく該組合をして人選せしむ

二、組合なきもの及個人會社等は、直接係員に於て定む

天覽品の準備は、十一月二十日陳列係員の手によりて飾付けられたり。

兩陛下におかせられては、同二十二日伊勢神宮御親謁より御還幸後御少憩の上臨御あらせられ、京都府知事及係長よりの説明を御聽取遊ばされて親しく御覽あり、猶二十五日までは三回に互り、 天覽竝に 台覽を給はりしに拜承す。

右陳列所へ出品の命を受けたる本市住民は、井上七右衛門、川島甚兵衛、飯田新七等二百十三名にして(出品總人員三) 其の内 御買上の

黒川	ヤスエ同	柿畑	はる同	栗林	うの同
米田	和三郎同	柴田	ヤエ同	額	庫二同
西村	音吉同	樋口	リウ同	柏原	こま同
山田	ひで同	孝治	みね同	松木	金助同
横井	キク同	伴	いし同	鈴木	ミチ同
山根	こさ同	久保田	こま同	杉山	ヨネ同

光榮に浴したるものは四十五名(總人員六)の多數に上れり。

御買上を受けたる本市物産は、長紐、帶飾、刺繍品、陶磁器、玩具類、振袖、紙、短冊、畫帖、扇子、團扇、菓子、香、果物、人形、箆筒、有職蒔繪、ピユアレスト、置物等にして、御買上の光榮に浴したる者の氏名左の如し。

井上	七右衛門	熊谷	直之	田中	彌兵衛
飯田	新七	小野	正之助	川上	治助
鐘淵	紡績株式會社	本領	順三郎	岡村	興三吉
野橋	作兵衛	近藤	庄七	諏訪	さら
稻垣	庄三郎	谷川	幸助	伊東	幸右衛門
藤井	善兵衛	山口	忠兵衛	清水	六兵衛
龜井	辰次郎	福井	勝秀	大丸	谷理吉
細田	永輔	寺村	八郎	宮崎	平七
山田	直三郎	島津	源藏	中島	菊之助
水谷	重三郎	川島	甚兵衛	高瀬	好山
藤田	貞治郎	田中	利七	原田	平八郎
辻	延太郎	渡邊	傳吉	三宅	清次郎
伊藤	庄五郎	矢代	仁兵衛	大木	平藏
平井	仁兵衛	横井	安兵衛	時岡	利七
森田	新太郎	黒田	宗傳	三上	治三郎

第四章 御下賜金に關する事項

一、御下賜金

大禮も御滞なく訖らせ給ひ、御還幸も程近くなりぬる十一月二十五日、畏きあたりにては、土岐京都市長を召させ給ひ、一木宮内大臣より左記の通御下賜の御沙汰ありたり。

- 一、金拾五萬圓 京都市へ
- 一、銀製花瓶壹對 土岐京都市長へ
- 一、銀盃壹組 安川京都市助役へ
- 一、銀盃壹組 岡田京都市助役へ
- 一、金參千圓 京都市關係吏員へ

右大禮行幸ニ付以思召下賜

即ち土岐市長は、二十五日午後七時半宮内省の招電により、宮内省臨時出張所に出頭せしに、一木宮相は、聖旨を傳へて市竝に關係市職員へ金品御下賜の傳達をなしたり、市長は、恐懼感激措く能はず、拜戴を終るや直ちに京都御所に伺候して御禮を言上したり。

二、謝表奉呈

土岐市長は、正式に市會に報告の上、謝表奉呈をなすべく立案し、翌々二十七日の京都市會を待つて次の如く報告したり。

京都市會議事録一片

難く諸君に御報告申し上げる次第でございます、茲に 陛下より御下賜に相成りました御目錄を諸君に御覽に入れます。(一同起立して敬意を表す)

議長(淺山富之助君) 諸君にお諮り致しますが、日程を變更致しまして、御下賜金に對します謝表案が市長より提出になつてをります、此の場合付議したいと思ひますが御異議ありませぬか。

(異議なし)

議長(淺山富之助君) 左様ならば直ちに上程することに致します、諸君の御起立を願ひます。

△謝表案

(市長土岐嘉平君登壇)

市長(土岐嘉平君) 謝表案を朗讀致します。

(一同起立)

謝表

京都市長臣土岐嘉平等誠恐誠惶稽首

頓首上言ス臣市恭シク

萬乘幸臨兩旬戻止茲ニ曠古ノ

盛典ヲ舉ケサセララルニ遇ヒ七十萬民

萬方無比ノ

殊榮ヲ荷ヘルニ今又

大禮ノ圓成ニ際シテ莫大ノ

恩帑ヲ發賜シタマフヲ辱クシ臣等戴

仁ノ愈重キヲ覺エテ圖報ノ益難キヲ知り

感悻欽悚措ク所ヲ知ラス區區ノ蟻忱

第四章 御下賜金に關する事項

昭和三年十一月二十七日午後三時開議

出席議員 三十八名

市長(土岐嘉平君) 私より御大禮に關します御報告を申上げます御大禮に關する市の各般の施設竝に諸催し等總て何等の支障なく所期の通施行致しました、市に致しまして出來得るだけの奉公の微衷を捧げ得ましたことは、諸君と共に御同慶の至りに存じます次第であります、御大禮中私は市長に致しまして、賢所大前の儀、御即位の禮、御神樂の儀、大饗第一日の儀及び大饗第二日夜宴の儀の五度び御召に預りましたことは、私の最も光榮とする所でございます、殊に 天皇陛下御還幸の前日特に私を御所に召されまして、御内帑の資十五萬圓を本市に下賜せられまして、宮内大臣より親しく拜戴致しました、聖恩優渥、感激の至りに禁へませぬ、尙私始め兩助役には金品の御下賜がございましたし、又御大禮關係の市吏員一同へも御下賜金の御沙汰がありました、茲に謹んで 聖恩を拜謝するに同時に、諸君に對しまして深甚の敬意謝意を表して御披露申上ぐる次第であります、尙又御奉送、御奉送に關しましては、私は市の代表者として特に大勳位以下勳一等以上と同列にお加へに相成り、ブラットホームに於きまして陛下に咫尺して御奉迎、御奉送申上げ得ましたことは、當に私一身の光榮であるのみならず本市の面目に致しましたも此の上ない次第でありまして、感激致してをる次第であります、茲に是亦有

唯全市臣民協同寅畏誓ヒテ涓埃ノ微效ヲ期シタテマツルコト有ルノミ瞻

天仰

聖激切屏營ノ至ニ任ヘス爰ニ市會ノ決議

ニ依リ市民ニ代リ謹ミ表ヲ奉リテ

謝ヲ稱シ以テ

聞ス

昭和三年十一月二十七日

京都市長 臣土岐嘉平 上進

議長(淺山富之助君) 二三讀會省略し確定議にして御異議ありませんか。(異議なし)

右は満場一致を以て可決確定し市長に於て不日伺候の上奉呈すること、なれり。

當時の新聞記事

有意義に使ひたい

土岐市長謹話

京都市へ拾五萬圓御下賜の恩命に接した土岐市長は二十五日午後七時半京都皇宮に參入一木宮内大臣から聖上陛下の有難き聖旨を傳達され恩賜金を拜受併せて大禮關係市吏員一同に對し金一封および市長兩助役に對し御下賜品を賜つた、土岐市長は御禮の言上方を依頼し市役所に歸所したが恩賜金を前にして恭しく語る。天恩の厚きに感激のほかはありません。京都市民の光榮これに過ぎるものなく聖旨を奉戴してこの恩賜金を有意義に使用したいと考へておます。二十七日には市會が開會されますのでその際市會にはかつて用途を定めたいと思ひますが慈善基金のやうな財團でも作つてその利子を社會事業費にあてたならば天恩に報い奉るのではなからうか存じてをります。

第五章 功勞者表彰式

本市は、全國に卒先して學校を設け、尙他に類例なき公同、衛生組合の組織ありて本市自治政の根柢となり、機關となりて現在の東京都を築成せる美譽あり、從て明治當初より現今に至る之等の事業に貢獻して表彰を受けたる者亦決して尠しきせず。

本市は、前例に鑑み、今次の大禮記念として更に功勞者表彰の議を盡し、庶務係へ本市の前例及び他都市の實狀を調査し左記表彰規程を設けたり。

京都市告示第四百六十七號

昭和大禮記念功勞者表彰規程左ノ通定ム

昭和三年十一月一日 京都市長 土岐嘉平

昭和大禮記念功勞者表彰規程

第一條 本市ハ昭和大禮ヲ記念シ滿十五年以上同一若ハ交互ニ本市學區學務委員、學區會議員、公同幹事、公同副幹事、衛生幹事、衛生副幹事ノ職ニアリタル者ニ對シ其ノ功勞ヲ表彰ス
第二條 前條ノ功勞者ニ對シテハ表彰狀及記念品ヲ贈與ス
第三條 第一條ノ在職年數ハ昭和三年十一月一日現在ニ依ル尙此機會ニ於テ奉祝費トシテ本市ニ金壹萬圓以上ヲ寄附シタル篤志者ニ對シ併セテ表彰スヘク定メタリ。

表彰式は大要次の順序に依れり。

- 一、日時 十一月二十一日 午前十時
- 一、場所 市公會堂本館
- 一、被表彰者 三百十五名

勤続年數	内 譯	
	上京區	下京區
滿十五年	二九	三七
同十六年	八	八
同十七年	一六	一六
同十八年	二一	一三
同十九年	一一	一〇
同二十年	六	八
同二十一年	一〇	二〇
同二十二年	二	一〇
同二十三年	八	一〇
同二十四年	四	一五
同二十五年	七	三
同二十六年	二	二
同二十七年	六	五
同二十八年	一	一
同二十九年	六	一
同三十年	一	一
同三十一年	一	一
同三十二年	二	一
同三十三年	一	一
合計	六六	六六

表彰狀及徽章 記念品授與
市長 式 辭 (別紙)
被表彰者總代答辭

閉 式

即ち土岐市長の式辭に次ぎて、來賓大海原知事、稻垣商工會議所會頭、淺山市會議長の祝辭あり、被表彰者篤志者總代日本銀行京都支店長阿部泰二、功勞者總代小川平右衛門氏の答辭あり、式後來會者一同には菓子箱を贈呈したり。

式 辭



瑞賀奉祝ノ慶ヒ滿チ渡リマスコノ昭和ノ大典ニ際シマシテ茲ニ本市篤志者竝ニ自治功勞者三百十九名ノ方々ノ表彰式ヲ舉行致シマス

ルコトハ私ノ最モ欣榮トスル所デアリマス

自治制布カレテヨリ茲ニ三十餘年駸々トシテ進ミ來リマシタ自治團體ノ發展ハ之ヲ本市ニ就テ觀マシテモ眞ニ隔世ノ感ガアルノデアリマシテ大都市トシテノ膨脹ニハ彌々自治機能ノ完備ヲ必要トシ諸般ノ施設ヲ要望致シテ居ルノデアリマス而シテ此ノ機能ノ發揮ト施設ノ運用トハ直接市政ニ參與スル當路者ト常ニ市民ノ先頭ニ立テ自治ノ率先者ト指導者タル人々ニ存スルモノト信スルノデアリマス

本日表彰ノ榮ヲ荷ハレマシタ篤志者ノ方々ハ愛市ノ念厚ク公共ノ爲ニ率先シテ多額ノ金品ヲ寄與セラレ大禮奉祝事業其他市民福利ノ増進

- 同三十六年 一
- 同三十七年 一
- 同三十八年 一
- 同四十一年以上 一
- 備考 十五年以上二十年未満一七〇名、二十年以上三十年未満一二五名、三十年以上九名

一、來 賓

- 市會議員、奉祝會有功會員
- 市、局、部、課、及各局長
- 市立中等學校長
- 府知事、内務部長、警察部長、學務部長及土木部長
- 京都商工會議所會頭、副會頭
- 市學務委員及學區學務委員
- 市政記者
- 罹災填補委員
- 市公同、衛生正副幹事
- 市學區會正副議長

當日の狀況

當日は午前十時より舉行せしが、開式三十分前には全部集合十時の振鈴を合圖に一同入場被表彰者は、中央前列より順に席に着き來賓は兩側の前方に席を占む。

式 次 第

振鈴 開 式

第五章 功勞者表彰式

ヲ圖ルベキ各種施設ノ上ニ貢獻セラレ又功勞者三百餘名ノ方々ハ自治ノ實行者トシテ市民福祉ノタメ學區進展ノ爲メ或ハ市民保護ノタメ教育振興ノ爲ニ或時ハ市當路者ニ代リ或時ハ市民ノ指導者トシテ短キモ十五年長キハ三十餘年ノ間其衝ニ當リ克ク其任ヲ竭サレタノデアリマシテ永年間絶大ノ御奮闘ト奉仕トニ對シマシテハ洵ニ感謝ノ念ヲ禁シ得ナイノデアリマス曠古ノ盛儀ヲ舉ケサセラル、千載一遇ノ好機ニ際シ光榮アル大禮ノ都タル本市ガ此ノ榮譽アル各位ノ表彰ヲ行ヒマスルコトハ其意義眞ニ深ク永ク記念サル、トコロニ各位ノ名譽モ亦久シキコトヲ想フノデアリマス茲ニ各位ノ功ヲ廣ク稱ヘマスト共ニ此ノ度ノ聖典ヲ一劃期トシテ愈々多事多端ニ向フベキ本市ノ將來ニ向ツテ各位ノ更ニ一段ノ御盡瘁ト御奮闘トヲ熱望シテ止マナイデアリマス一言ヲ叙ヘマシテ式辭ト致シマス

昭和三年十一月二十一日

京都市長 土岐嘉平

臨場依頼狀

來ル十一月二十一日午前十時 市公會堂ニ於テ市功勞者表彰式舉行可致候條御臨場ノ上御祝辭賜度此段及御依頼候也

昭和三年十一月 日

京都市長 土岐嘉平

京都府知事 大海原重義

京都商工會議所會頭 稻垣恒吉殿

京都市會議長 淺山富之助

被表彰者、篤志者、氏名

日本銀行京都支店 稻畑勝太郎
染谷寬治 白波瀨季次郎
原邦造 住友合資會社
佐々木久彌 廣田長三郎
川崎八右衛門 杉浦治良右衛門
中林仁一郎 細川護立
田附政次郎 以上奉祝會寄附者
柴田正三郎 以上社會事業寄附者 山田こも

尙篤志者の表彰は一人宛に表彰狀及徽章を授與し功勞者への記念品贈呈は在職年數十五年—二十年、二十年—三十年、三十年以上に分ち年數の最多き者を總代として授與せり。
記念品は各人共金貳拾圓とし記念品料とし贈呈せり。

表彰狀

氏名

貴下ハ本市公共事業ニ關與セラル、コト 年其ノ間拮据勵精克ク其任務ヲ完ウシ本市自治發展ノ爲ニ貢獻セラレタル所尠カラス其ノ功勞洵ニ顯著ナリトス茲ニ昭和大典ニ際シ記念品ヲ贈呈シ以テ其功勞ヲ表彰ス

昭和三年十一月二十一日

京都市長 從三位勳三等 土岐嘉平

功勞者左の如し

四十一年以上四十二年未滿勤績者 小川 平右衛門

第五章 功勞者表彰式

案内狀

謹啓來ル十一月二十一日午前十時本市公會堂ニ於テ市功勞者表彰式舉行可致候間御光來被成下度此段御案内申上候

追テ御手数數御來否御一報相煩度候

京都市長 土岐嘉平

殿

通知狀

謹啓來ル十一月二十一日午前十時本市公會堂ニ於テ貴下ニ對シ功勞者表彰式舉行可致候間同時刻三十分前迄ニ御出席相成度此段及御通知候

追テ御差支ノ場合ハ代人御差向相成度尙公會堂本館ヨリ御入場相成度候

殿

京都市長 土岐嘉平

十一月二十一日功勞者表彰式

出席

被表彰者姓名

三十八年以上三十九年未滿勤績者 杉本乙吉
三十七年以上三十八年未滿勤績者 阿原安太郎
三十六年以上三十七年未滿勤績者 本田喜兵衛
三十三年以上三十四年未滿勤績者 川口珍邦
三十二年以上三十三年未滿勤績者 田畑房次郎
三十一一年以上三十二年未滿勤績者 片岡龜次郎
三十年以上三十一年未滿勤績者 福田德三郎
二十九年以上三十年未滿勤績者 伊達虎一
二十九年以上三十年未滿勤績者 石田秀次郎
二十九年以上三十年未滿勤績者 清水文之助
二十九年以上三十年未滿勤績者 高島幸助 松田好民
二十八年以上二十九年未滿勤績者 奥村吉之助 清水權三郎
二十七年以上二十八年未滿勤績者 岩井時次郎 奥田久五郎
二十七年以上二十八年未滿勤績者 戸井田平吉 岡田興吉
二十六年以上二十七年未滿勤績者 百木伊之助 瀧本乙五郎
二十六年以上二十七年未滿勤績者 近藤作次郎 大森義一
二十六年以上二十七年未滿勤績者 大原条吉 竹林久次郎
二十五年以上二十六年未滿勤績者 篠部松次郎 八木喜助
二十五年以上二十六年未滿勤績者 坂田源次郎 湯川信敬
二十五年以上二十六年未滿勤績者 小川榮次郎 中西久吉

二十四年以上二十五年未滿勤績者

大塚建一郎	時岡利七
中岡吉兵衛	小西治郎右衛門
宮川彌三郎	北村岩太郎
下村利三郎	立入定弘
長瀬半次郎	福知梅次郎
小西嘉一郎	山田半兵衛
藤井音次郎	鷗飼又八
寺村助右衛門	菊岡定治郎
三好龜太郎	大島龜次郎
穗北孝次	荒木虎之助
石正辰次郎	林常二郎
奥田常次郎	田中善八
田中喜左衛門	近田新太郎
高田辨太郎	山下槌之助
山下彌兵衛	川那邊嘉三郎
藤原清兵衛	田淵孝三郎
藤田三郎兵衛	野橋作兵衛
國松仙吉	中島伊兵衛
岡本安兵衛	津田常七
北中源治郎	兒玉伊右衛門
木村久兵衛	楠井貫心
川道佐一郎	國井藤兵衛

二十三年以上二十四年未滿勤績者

宇野定七
神嘉三郎
林喜三良
伊勢戸儀三郎
澤田辰之助
坪内善助
杉山庄次郎
吉田六兵衛
井辻治作
中村善三郎
岸田九兵衛
谷澤嘉兵衛
小島彌七
長谷川愛吉
中林喜三郎
大西定治郎
龜田利三郎
藤井利右衛門
元川喜之助
本田茂一郎
財木彌兵衛
和田卯兵衛

二十一年以上二十二年未滿勤績者

岸田榮三郎
佐々木菊太郎
德永彦兵衛
箕田萬龜太郎
德田源次郎
和田文六
嵐野英之助
上田勘兵衛
鈴木常次良
津田繁之助
寺井源兵衛
大西長兵衛
麻田半兵衛
河合安次郎

十八年以上十九年未滿勤績者

元川喜之助
本田茂一郎
財木彌兵衛
和田卯兵衛

二十二年以上二十三年未滿勤績者

福田重助	伊藤平三
田中元七	山中治三郎
加藤喜三郎	長岡五兵衛
吉村辨次郎	中川徳右衛門
今西善次郎	大森治郎兵衛
入江道仙	野村權右衛門
太田久七	岸川幸次郎
永井平兵衛	藤原利三郎
林岩次郎	友田金三郎
井澤英之助	長谷川米治郎
木村松三郎	栗津竹治郎
白山茂兵衛	谷田清久
大井音次郎	若山昇三
川本元三郎	山本清太郎
寺島幸助	淺井伊兵衛
金子直次郎	鳥井清造
酒見外次	佐藤彌太郎
伊藤伊兵衛	岸田次三郎
中村覺之助	若山庄造
橋本永太郎	中村治兵衛
竹内市太郎	田中米三郎
四手井源次郎	

二十一年以上二十二年未滿勤績者

安井芳太郎	榎山甚吉
竹内萬右衛門	尾崎民次郎
川端道喜	久保米吉
近藤由太郎	朝尾春直
山田幸次	高橋不二三郎
平松彌三郎	秦藏六
小林源兵衛	石澤龜次郎
中田興兵衛	小野藤二郎
梅原長兵衛	辻辰之助
下村萬次郎	勝山市郎兵衛
木村捨次郎	井上忠兵衛
淺田吉左衛門	中野忠八
堤久三郎	青山萬助
山田利兵衛	櫻井常三郎
野村藤助	中島市良
烏谷重次郎	若山芳之助
久住利右衛門	小野政次郎
葛川助次郎	大串梅藏
上野太助	小谷孫兵衛
大和田市太郎	岡田榮次郎
北村金次郎	寺石佐兵衛
大島藤吉	杉本徳次郎
鈴木平兵衛	小山米太郎

十七年以上十八年未滿勤績者

市會議員	橋本利七	大禮奉祝會幹事	平井仁兵衛
市會議員	藤井音次郎	市會議員	藤本武治
市會議員	松下平三郎	京都高等工藝學校長	村上宇一
京都市助役	村田武	市會議員	八木伊三郎
京都市助役	安川和三郎	市會議員	安村長造
大禮奉祝會幹事	六鹿清治	社會教育課長	西田利八
幹事	井手久馬彦	恩賜京都博物館長	和田不二男
營繕課長	三橋國太郎	社會教育課	高垣嘉夫
書記	久藤尙雄	教育課	
營繕課	能島光義		

二 會長挨拶

「御大禮トシテ本市ハ茲ニ美術館ヲ建設スルコト、ナリ寄附金中百萬圓ヲ以テ其ノ經費ニ充テ其ノ内七萬圓ヲ以テ設計監督費ニ九拾參萬圓ヲ以テ建築スヘク豫定セリ美術館ノ建設ハ京都市多年ノ宿望ニシテ本市トシテハ恥シカラザルモノヲ建設セザルベカラズサレバ各地ノ美術館ノ長所ヲ採リ以テ本市ニ適ハシキモノヲ作りタク委員ノ方モ當地ノ人ニ限ラズ東京大阪方面ノ各大家ヲ囑託シタリ本日ハ御多忙中態々御出席ヲ忝フシタルハ感謝ニ堪ヘズ本日第一ノ問題トスベキハ建設ノ位置ナリ理事者トシテハ何等定見ナキモ一案ハ博物館他案ハ岡崎公園トセリ本問題ハ性質上最後ノ決定ハ市會ノ決議ニ俟ツベキモ各位ノ御意見ハ必ラズ市會ノ重要視スル處ナルベク本日晝食後以上二ヶ所ニツキ御視察ヲ乞ヒ御判定ヲ得タシ

付スルコトヲ得

第三條 本積立金ハ篤志者ヨリノ寄附金ノ收入ニ依ルモノトス但シ其ノ金額前條本文ノ金額ニ達セザルトキハ其ノ不足額ニ限り歳入出豫算ヲ以テ定メタル編入金ヲ以テ之ヲ補充ス

第四條 本積立金ヨリ生ズル收入ハ之ヲ元本ニ編入ス但シ其ノ金額ハ第二條本文ノ金額ニ之ヲ算入セズ

附 則

本規程ハ昭和三年度ヨリ之ヲ施行ス

謹 啓 愈々御清稷奉賀候

陳者豫而得貴意候大禮記念京都美術館建設委員會第一回會議は去る二十六日午前十時京都市正廳に於て開催仕候處出席委員三十五名種々御高説を拜聽するを得幸無此上候然る處根本問題たる建設の位置に就ては委員中の伊東博士、佐野博士、澤村、石本、太田、鹿子木、菊地、清水、田中博、六鹿、大澤各委員は岡崎公園を適當なりとし上野委員は恩賜博物館敷地を可合せられ其の他意見を述べられざる方も有之一回の審議を以て決定致兼ね候に付猶各自調査の上来る十一月十日迄に以書面候補地岡崎公園及博物館敷地の内孰れが可なる哉御意見拜承致し小委員會に於ける調査決定の資料ニ致すこと、相成候間御多繁中乍恐縮別紙圖面御参照の上御高見御披瀝被下度願上候

尙委員會決議概要は左記の通りに御座候に付御了承被下度候右御依頼旁々得貴意度如斯御座候

第二節 各學區並學校記念事業

敬 具

位置ノ決定ガ館ノ設計ニ影響ヲ爲スベキヨリ大體ノ位置ヲ決定シタル後設計ニ移ル豫定ナリ
設計ハ懸賞トシテ全國ヨリ募集シタキ希望ナリ併シ其ノ方法ハ如何ニスベキカ
設計ガ蒐リタル後特別委員會ヲ開キテ審査ヲ願フベク最後ニ總會ヲ開キテ萬般ヲ決定スベキ希望ナリ。

尋で黑板博士よりの書翰を朗讀し意見の交換に入れり、先づ理想的美術館の建設に就ての意見續々あり、午餐後兩候補地につき親しく實地見聞を遂げ、午後四時より中村樓に會して再び會議に入り各委員より實地見聞の意見あり、この場合決定するは早計ニなし、各委員は來月十日迄に書面を以て回答するに決し、更に會長指名により小委員を設け進行を計るべく決したり。

石本恒平	伊東忠太	太田喜二郎
岡田信一郎	片岡安	菊池完爾
清水六兵衛	黑板勝美	澤村專太郎
武田伍一	田中全三郎	藤井六次郎
八木伊三郎	安川和三郎	六鹿清次

大禮記念美術館建設積立金規程

(昭和三年四月二十六日市告示第二二五號)

第一條 大禮記念美術館建設ノ費途ニ充ツルタメ本積立金ヲ設置ス

第二條 本積立金ハ其額百萬圓ニ達スル迄之ヲ積立ツルモノトス但シ大禮奉祝事業ニ必要アルトキハ拾萬圓ニ限り大禮奉祝會ニ交

昭和四年十一月一日

大禮記念京都美術館建設委員會長

土 岐 嘉 平

殿

記

委員會決議事項

一、使用目的 新美術陳列

一、位 置 土地買收費ナキニヨリ候補地岡崎公園及博物館敷地ノ二者中ヨリ選定スルコト、シ本日意見ヲ陳ベザリシ者ハ書面ヲ以テ委員會長宛送達スルコト

一、小委員會 委員總會ヲ時々開催スルハ困難ナルニ依リ小委員會ヲ設ケ萬般ノ調査審議ヲ附託スルコト、シソノ員數氏名ハ會長一任ノコト

追て右委員會は本稿締切までには開催されず。

第二節 各學區並學校記念事業

本市各學區並に各學校に於ては、曠古の大禮を記念し奉らん爲、夫々適當なる記念事業を企て以て御盛儀を永久に偲びまつらんことを期したり。而して大禮御舉行前既に大體の方案を樹て着々之が進捗を圖り或は完成しつゝあり、遠からず全市に亘りて實現するに至るべし。概要を示さば次の如し。

御大典記念事業調其ノ一

學區名	校名	事業ノ種類及ビ内容	事業ノ主體	事業經費ノ出所	事業ノ着手年月日	其ノ他
京上	成逸	兒童文庫ノ建設	學區教育會	學區教育會ヨリ五〇〇〇圓維持擴張費年々二五〇〇圓	昭和三年度ヨリ	
二	室町	優良兒童表彰規定ノ制定	教育會	教育會	昭和三年度ヨリ	外二案
三	乾隆	該當事項ナシ	校	學校教育後援會ヨリ	昭和三年四月八日	外八案
四	西陣	奉安庫ノ建設	學區有志者	有志者ノ三、三〇〇圓出在郷軍人會ヨリ一、五〇〇圓學區財產ヨリ五〇〇圓	昭和三年八月二十三日	外一案
五	翔鸞	同	學區	一般寄附ニヨル	昭和三年十月十五日	外五案
六	嘉樂	同	同	二、二〇〇圓	昭和四年三月一日	外一案
七	桃蘭	御眞影奉揚場ノ改造及ビ附屬器具ノ新調	同	學區經常費ヨリ二五〇圓	昭和三年八月	外二案
八	小川	大國旗揚揚柱ノ建設	教育會	教育會ヨリ	昭和三年十月三十日	外三案
九	京極	幼稚園舎ノ改築	區	同上ノ寄附	昭和三年十一月七日	外一案
十	仁和	電氣報時機ノ設置	在郷軍人會	同上ノ寄附	昭和三年十一月七日	外一案
十一	正親	奉安庫ノ建設	區	寄附二、〇〇〇圓	昭和四年九月二十日	外二案
十二	聚樂	映畫教育ニ關スル設備	校	寄附一、〇〇〇圓	昭和三年十一月五日	外二案
十三	中立	校舍増改築ニ伴フ奉安庫ノ建設	區	起債及ビ寄附	昭和三年三月十五日	外二案
十四	出水	同	同	附二、五〇〇圓	昭和三年九月二十八日	外二案
十五	待賢	教室増築及ビ設備ノ充實	學區教育會	學區費及ビ寄附	昭和三年七月一日	外二案
十六	滋野	大國旗揚揚柱ノ建設	同	同窓會ヨリ寄附五二七圓	昭和三年十一月二日	外二案

十七	春日	兒童文庫ノ設置	學區	區内有志者ヨリ寄附	昭和四年四月末一日	外一案
十八	梅屋	奉安庫ノ建設	校	在郷軍人會ヨリ寄附	昭和三年十一月一日	外二案
十九	竹間	淑女會ノ設立	區	及ビ會員酬金	昭和三年七月十六日	外二案
二十	富有	奉安殿建設	學區	寄附金一、八八〇圓	昭和三年五月二十四日	外二案
廿一	教業	同	校	寄附特志者ヨリ	昭和三年六月二十五日	外二案
廿二	城巽	同	區	寄附二、〇〇〇圓	昭和四年二月十日	外三案
廿三	龍池	同	同	寄附金二、〇〇〇圓	昭和三年五月十六日	外一案
廿四	初音	兒童圖書室ノ設置	同	同上ヨリ	昭和三年九月八日	外一案
廿五	柳池	奉安殿建設	學區	同上ヨリ	昭和三年十一月一日	外一案
廿六	銅駝	運動場整理擴張	校	學區臨時費ヨリ	昭和三年十二月二十日	外一案
廿七	錦林	奉安庫建設	區	寄附	昭和三年十二月十五日	外四案
廿七	第二錦林	同	同	同	昭和三年十二月一日	外三案
廿七	第三錦林	同	同	同	昭和三年十一月一日	外三案
廿八	新洞	兒童文庫ノ設置	學區	學區費ヨリ四、〇〇〇圓	昭和三年八月二十日	外四案
廿九	北白川	奉安殿ノ建設	同	保護者會ヨリ二〇〇〇圓	昭和三年九月三十日	外四案
三十	養正	兒童文庫ノ設置	同	學區費	昭和三年三月末一日	外三案
卅一	下鴨	奉安殿建設	學區有志者	學區有志者	昭和三年十一月四日	外一案
卅二	出雲路	校地擴張校舍増改築	學區	起債四五、〇〇〇圓	昭和四年七月二十六日	外二案
卅三	待風	記念植樹七十本	同	學區費三〇〇圓	昭和三年七月五日	外七案
卅三	第二待風	校旗(制定)調製	區内篤志者	寄附二二〇圓	昭和三年十一月三日入魂式	外四案

第二節 各學區並學校記念事業

卅四	樂只	記念寄附(銅製大花瓶)	篤志者(一名)	同上ヨリ(價格六五圓)	昭和三年十月二十六日	外	二	案
卅五	衣笠	兒童文庫ノ擴充	教育會	教育會及寄附金	昭和三年八月二十八日	外	一	案
下	京	奉安殿ノ建設	在郷軍人會	同上ヨリ寄附金	昭和三年十一月十日	外	六	案
二	本能	兒童文庫ノ設置	教育會	同上ヨリ五〇〇圓	昭和三年十一月末日	外	二	案
三	明倫	校舍全部ノ改築	區	同上ヨリ五八〇、〇〇〇圓	昭和四年六月十日	外	二	案
四	日彰	奉安殿建設	同	學區費及在郷軍人會ヨリ	昭和三年七月二十五日	外	三	案
五	生祥	校舍改築積立金ノ造成	同	同上	昭和三年十月三十一日	外	二	案
六	立誠	兒童文庫ノ設置	校	學區ヨリ一、〇〇〇圓	昭和三年九月	外	四	案
七	有濟	奉安殿ノ改築	區	寄附金及其他ヨリ	昭和三年七月四日	外	二	案
八	粟田	屋外運動場ノ改修	同窓會其他	同上ヨリ二、五〇〇圓	昭和三年三月二十日	外	四	案
九	郁文	兒童圖書室ノ内容充實	學區有志者	同上ノ寄附	昭和三年四月末日	外	一	案
十	格致	兒童文庫ノ擴充	教育會、保護者會	同上ヨリ支出	昭和三年十二月五日	外	一	案
十一	成德	既設文庫ノ内容充實	教育會	同上ヨリ	昭和三年十二月五日	外	一	案
十二	豐園	時報器ノ設置	在郷軍人會	同上會員ヨリ釀出	昭和三年十二月一日	外	二	案
十三	開智	學級文庫ノ設置	區	篤志者ヨリ一、四〇〇圓	昭和三年三月末日	外	一	案
十四	永松	講堂建設	同	積立金及寄附金ニヨリ	決議セシノミニテ未定	外	二	案
十五	彌榮	屋外運動場ノ改修	同	學區費ヨリ	昭和三年八月十日	外	二	案
十六	淳風	校舍ノ改築	同	同上	昭和三年九月十日	外	二	案
十七	醒泉	奉安殿ノ建設	同	有志ノ寄附	昭和三年三月	外	二	案
十八	修德	校舍ノ改築	同	寄附金其他	昭和三年三月十四日	外	二	案
十九	有隣	奉安殿ノ建設	學區其他	同上ヨリ寄附	昭和三年五月三十一日	外	四	案

二十	新道	兒童文庫ノ完備	學校	同上ヨリ	昭和四年一月三十日	外	八	案
廿一	六原	記念兒童文集ノ發行	同	教育後援會ヨリ	昭和四年一月完成	外	八	案
廿二	安井	奉安庫建設	學區及諸團體	同上ヨリ	昭和三年七月十八日	外	一	案
廿三	植柳	兒童用木工臺設備	區	區內有志者ノ寄附	昭和三年十一月末日	外	八	案
廿四	尙德	兒童文庫設置	校	小學校費支出	昭和四年四月	外	四	案
廿五	稚松	奉安所ノ設置	軍人會	同上會員ノ寄附	昭和四年六月三十日	外	三	案
廿六	菊濱	奉安殿建設	同	同上	昭和三年九月三十日	外	二	案
廿七	貞教	増改築及内部設備	學區	學區債及寄附、積立金	昭和三年十一月三日	外	四	案
廿八	修道	奉安殿建設	在郷軍人會	區內有志者ノ寄附	昭和三年五月五日	外	二	案
廿九	安寧	兒童文庫ノ擴張	學校保護者會	保護者ノ寄附ニヨリ	昭和四年二月十日	外	二	案
三十	皆山	兒童文庫ノ設置	同	同上	昭和三年十一月一日	外	一	案
卅一	一橋	校舍ノ増築(一ヶ校増設)	區	起債四二〇、〇〇〇圓	昭和三年十二月三十一日	外	二	案
卅二	梅逕	兒童文庫ノ設置	校	學區教育會寄附	昭和三年十二月一日	外	二	案
卅三	九條	校舍ノ建設	同	卒業生、保護者	昭和三年七月	外	三	案
卅四	朱雀第一	奉安殿ノ建設	學區	學費	昭和三年五月十日	外	六	案
卅四	朱雀第二	奉安庫ノ建設	同	同上	昭和四年三月三十一日	外	三	案
卅四	朱雀第三	奉安殿ノ建設	同	寄附金ニヨル	昭和四年三月三十一日	外	六	案
卅五	大内第二	奉安庫ノ購入	區內有志者	同上	昭和三年八月十日	外	三	案
卅五	大内第三	兒童文庫ノ設置	校	寄附金	昭和三年十一月十一日	外	一	案

廿六	七條	鐵筋三階教室増築	學	區	同上	昭和三十九年三月三十日	外一案
廿七	陶化	兒童文庫ノ設置	學	校	同上	昭和三十九年六月	外四案
廿八	崇仁	該當事項ナシ					

御大典記念事業調 (其ノ二)

學校別	事業ノ種類及内容	事業ノ主體	事業經費ノ出所	事業ノ着手年月日	其他
繪畫專門	記念植樹 二千數百株	兩校	兩校ヨリ各一〇〇〇圓及ビ職員生徒ヨリ八四圓	昭和三十九年二月十日	(美術圖譜編纂) 校友會ノ寄附ニテ倉倉建設計畫ス
美術工業	記念工業圖書館設立	校友會	父兄會、同窓會ヨリ寄附(維持費校友會ヨリ)	昭和三十九年九月未達成	
第一工業	記念文庫ノ設置	同	同上會費ヨリ 一六〇圓	昭和三十九年三月	
第二商業	校歌ノ制定	學友會	同上會費ヨリ	昭和三十九年十一月二十日	
商業實修	擊劍道具ノ買入	校友會	同上會費ヨリ	昭和三十九年十一月二十日	
堀川高等女學校	同窓會館ノ建築	同窓會	職員生徒ノ寄附金	決議セシミニテ未着手(昭和三十九年七月完成)	
盲學	圖書閱覽室ノ擴張	學友會	職員生徒ノ奉祝記念金	昭和三十九年九月三十日	
商工專修	該當事項ナシ				
二條高等女學校	記念植樹	學友會	同窓會、校友會	昭和三十九年十一月十九日	
第一高等	兒童文庫ノ内容充實	學友會、保護者會、同窓會	其他ヨリ寄附	昭和三十九年十一月	
第三高等	兒童文庫ノ擴張	本校少年赤十字團	學友會費中ヨリ	昭和三十九年十一月	
第二工業	國旗掲揚設備	校友會	同上ノ團費ヲ以テ	昭和三十九年十一月三日	
	文庫ノ設置		職員生徒ノ奉祝記念金	昭和三十九年九月	

第三節 各種團體

一 本市小學校長會

本市小學校長會は、夙に大禮奉祝並に記念事業を協議して昭和の聖世に奉答すべく計畫せる所ありしが、大要次の如く決定し實行したり

一、奉祝旗行列

十一月十六日、同二十日の二回、市内各小學校五六年女子を以て行ふべく豫定したりしが、本市主催のものに参加したり。

二、奉祝大運動會

十一月二十五日、本市主催の市民運動會に参加したり。

三、教育基金の積立

本市校長會は、明治三十八年日露戰捷記念として教育基金の積立を計畫し、爾來大正大典、東宮御成婚記念、大婚二十五年奉祝等國家の慶事を迎ふる毎に累積して現在二萬三千餘圓に上り。今次の大禮に際しては更に寄附金の募集をなせしが、總額參千五百六拾六圓八拾八錢を得たるを以て、之を前基金と同一の目的の下に積立とし市に寄附する所ありたり。

四、大典記念京都市小學校教員研究發表大會

昭和教育的更新を圖るには、先づ教育者自身の研鑽修養に俟つもの多しとし、本市小學校長會は教育者不斷の研究を高むる意味に於て研究發表を記念繼續事業として開催することとなしたり、今

二 京都市教育會

回は第一回として十二月三、四兩日を期し、市内教員中より十六名の發表者を選抜し、三日室町校にて、四日立誠校にて開會、各小學校よりは職員の大數之に參會し大盛況を極めたり。尙翌年よりは、毎年大典に因る十一月を以て開催月と定め實行することとしたり。

國家至高の大典を記念する爲め、本市教育會に於ては數回に互れる役員會を開き、左記の事項を實行したり。

一、御大典記念出版

京都維新史蹟

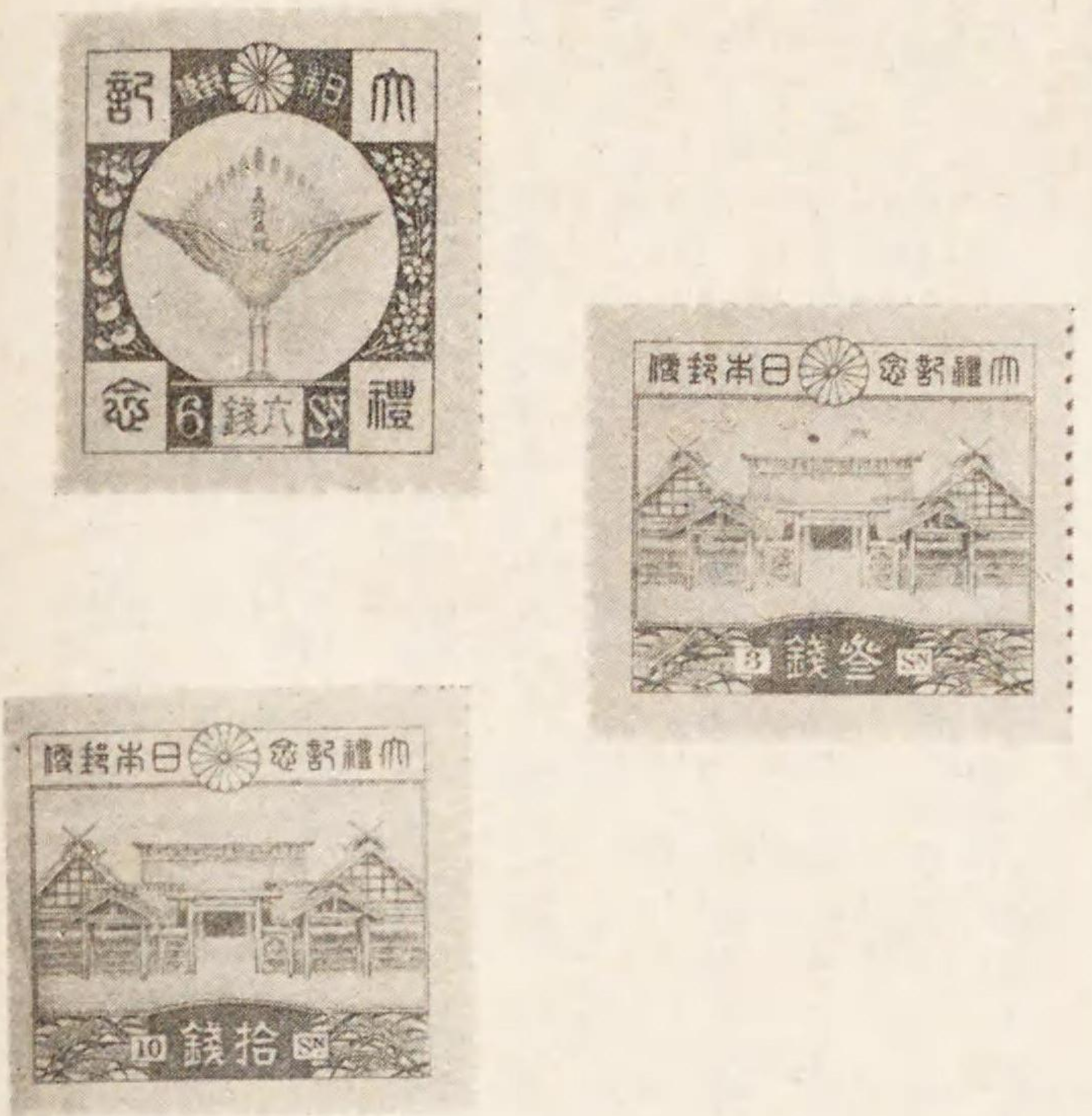
四六判四倍綴子表紙上製ホプリン紙入寫眞コロタイプ版
二百二十餘種解説及小傳百四十餘頁

本書は京都に於ける明治維新の史蹟を、之に關係ある當時の志士の肖像を輯録して之が解説及び小傳を附したるものなり、其の内容の一部を擧ぐれば 畏くも 孝明天皇、明治天皇、有栖川宮熾仁親王、仁和寺宮嘉彰親王を始め奉り、三條實萬、三條實美、岩倉具視、島津久光、山内容堂、毛利敬親、西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通、阪本龍馬、中岡慎太郎、吉田松蔭、平野國臣の如き勤王家、近藤勇、土方歳三等所謂新撰組の頭目、島田左近、村山かつえ、目明し文吉の如き反對側に立つ人々に至る迄其の遺蹟を以て現に當時のまゝに其の状態の保存せられて今日に

大禮記念賣出し

其の一

一、記念郵便切手
 遞信省にては大禮期間中次の如き記念切手の賣出しをなせり、
 參錢切手は菊の御紋章に大菅宮を象ざりたる繪を小豆色にて、
 六錢切手は菊の御紋章に鳳凰の圖案を赤朱色にて、拾錢切手は
 參錢切手と同様の圖案を藍色にて何れも黄色の原紙に表はし
 たり。



其の二

一、記念煙草
 專賣局にては大禮を奉祝する意味に於て名も因ませたる記念煙
 草の賣出しをなし口付紙巻「昭和」を二十本入貳拾錢にて、兩切
 紙巻も「グローリー」十本入七錢を賣出し、昭和は朱の地色に黄菊
 を描きグローリーは太陽に鶏の圖案にて瑞祥と平和を表徴したる
 ものなり。



残れるものを掲けたり。

されば京都に於ける維新の史蹟は歴々として紙上之を觀るを得べ
 く又之によりて實地目撃の手引たるを得べし。尙之に配せる忠士
 の肖像は多くは當時のものにして實に珍中の珍たるべきもの、中
 には志士の後裔たる現代顯榮諸公の家にも知られざりし貴重もの
 のあり、當時を追懷して感興頗る深きを感ず。加ふるに簡約なる
 小傳解説を附して事蹟の概要を述べ、其情景を髣髴せしめられ
 ば、本書によりて維新の史實を明瞭ならしめ殊に現今憂ふべき思
 想界の傾向に對し、尊王愛國心の結晶たる明治維新の教訓を會得
 せしむるに至るべし。

二、大禮記念研究獎勵費

本會は更に

今上陛下朝見の儀に賜りし勅語に「模擬ヲ戒メ創造ニ勗メ日進以
 テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ」ミ仰せ給ひし聖旨を
 畏み、廣く教育問題に關する研究を募集して、以て教育の向上進
 展に貢獻せんことを期したり。

(一)募集要項

應募者は研究せんミする問題の其の題目及び題目選定の意義、研
 究の範圍並に方法の梗概を添付して申込むべし。

1. 獎勵金額及び贈呈人員

一人五拾圓乃至貳百圓 若干名

2. 應募資格 學校職員

第三節 各種團體

- 3 期限 昭和三年七月末日限本會事務所に申込むこと
- 4 發表 應募の題目及研究者の事情を審査して入選者を
 定め、獎勵金額と共に昭和三年八月末日發表
- 5 其他 當選者は昭和四年三月末日迄に研究經過を本會
 に報告すること

以上

以上により發表せしが應募者數十名に上り、何れも獨自的研究に
 成れる相當權威を有するもの、みにして、本會は更に慎重なる審
 査をなし各等賞を定めて本會機關雜誌上に發表したり。

三 在郷軍人會

今期の大禮を機として、帝國在郷軍人會京都市聯合會に於ては、大
 禮に先だつこと半歳昭和三年五月より喇叭鼓隊を編成して、軍人會員
 並に一般青年の志氣を鼓舞し、以て大禮警備の重任を果たすべく警備
 手段に供へ、一は長く記念事業として一般訓練の基調とし、規律的、
 軍隊精神を偲ばすべき機關としたり、大要次の如し。

- 一、本市在郷軍人會員中志望者を以て組織す
- 一、場所當分本市圓山音樂堂
- 一、練習日毎月一回
- 一、教官は指導に堪能なる人を聘す
- 一、役員及委員

本市聯合會役員

會長 伊藤文詰
副會長 藤井源次郎
喇叭鼓隊委員 子安伊三郎

松野誠一
梅田定臣
岩倉武雄
遠藤五郎

四 本市聯合青年團

今回の大禮に際して本市青年團は本府警衛本部の補助機關となり、在郷軍人會等と協力して大禮中に於ける市内警備の大任に當り若くは各町自身番の衝に就き克く其任務を盡したるは前章既に述べたり。然るに御盛儀も滞なく訖らせ給ふや、之を機會に永く偲び奉るべく更に記念事業として京都市聯合青年團警備隊なるものを組織し以て本市並に市附近の治安及び保健の爲め貢獻せんことを申合せたり、其目的、方法次の如し。

京都市聯合青年團警備隊要務令

總則

- 一、京都市聯合青年團ハ市内並ニ市附近ノ治安及保健ノ爲各加盟青年團ニ於テ編成セル警備隊ヲ統轄ス
- 二、本要務令ニ依リ出動スル部隊ヲ京都市聯合青年團警備隊ト稱ス
- 三、警備隊ノ任務ハ各自管轄地域ニ於ケル自警自衛ヲナスヲ以テ目的トス

三名、通信係一名ヲ置ク

- 一、各青年團ハ身體強健、志操堅固ナル團員十五名團長之ヲ嚴選シ一箇小隊ヲ編成スルモノトス
- 各小隊ハ主タル團名ヲ冠稱ス
- 一、各青年團ニ於テ分隊ヲ組織スルコトヲ得
- 但シ分隊ノ組織ハ小隊ノ組織ト同一ナルコトヲ要ス
- 一、三、各青年團長ハ小隊及分隊ノ隊員ニ異動ヲ生シタル時ハ速ニ本部ニ出出ツヘシ
- 一、四、各中隊ハ喇叭隊ヲ編成シ自己ノ中隊ニ屬セシム
- 指揮系統並ニ任務
- 一、五、司令ハ本部及各警備隊ヲ統轄シ之レカ指揮ノ任ニ當ル
- 司令ハ本團副團長之ニ當ル
- 一、六、副司令ハ司令ヲ補佐シ司令事故アルトキハ其職務ヲ代理ス
- 副司令ハ本團理事長之ニ當ル
- 一、七、本團員ハ司令ニ直屬シ事務ヲ分擔掌理ス
- 本團員ハ大隊長ノ職ニアラサル本團役員及關係者中ヨリ之ヲ囑託ス
- 一、八、大隊長ハ司令ノ指揮ニ依リ大隊ヲ統轄ス
- 大隊長ハ當該管區ノ中隊長ノ推薦ニ依リ團長之ヲ囑託ス
- 一、九、中隊長ハ司令又ハ大隊長ノ指揮ニ依リ中隊ヲ統率ス中隊長ハ當該管區ノ團長及小隊長ノ推薦ニ依リ團長之ヲ囑託ス
- 二、〇、小隊長ハ司令、大隊長、又ハ中隊長ノ指揮ニ依リ小隊ヲ統率ス
- 小隊長ハ當該青年團長ノ推薦ニヨリ司令之ヲ囑託ス
- 二、一、分隊ヲ設ケタル小隊ニハ分隊長ヲ置ク
- 分隊長ノ指揮ノ下ニ行動ス

第三節 各種團體

但シ情況ニヨリ特殊ノ任務ニ就クコトアルヘシ

- 四、警備隊運用ノ研究上本團ニ於テハ諸種ノ情況想定ノ下ニ隨時豫行演習ヲ實施スルコトアルヘシ
- 五、警備隊ハ治安及保健ノ爲行政官廳其他同種ノ目的ヲ有スル諸團體ヨリ依頼ヲ受ケタル場合ハ其職務ヲ援助ス

但シ前項ノ場合ハ密接ナル連絡ヲ保持シ相提携シテ其事ニ當リ努メテ業務ノ重複ヲ避ケ他ノ權限ヲ侵害スルカ如キ所爲ナキコトヲ期スヘシ

編成

- 六、京都市聯合青年團警備隊ハ本部、大隊、中隊、小隊及分隊ヲ以テ編成ス
- 七、京都市聯合青年團警備隊ハ本部ヲ京都市役所本團事務所内ニ置ク
- 本部ニハ左ノ役員ヲ置ク
- 司令 副司令 本團員
- 八、大隊ハ三箇大隊トシ上京區學區青年團ヲ第一大隊、下京區學區青年團ヲ第二大隊、學區以外ノ青年團ヲ第三大隊トス
- 但シ學區以外ノ青年團ハ編成ノ必要ニヨリ第一又ハ第二大隊ニ編入スルコトアルヘシ
- 九、第一大隊ハ四箇中隊ヨリ編成シ西陣警察署管轄區内青年團ヲ第一中隊、中立賣警察署管轄區内青年團ヲ第二中隊、下鴨警察署管轄區内青年團ヲ第三中隊、川端警察署管轄區内青年團ヲ第四中隊トス
- 第二大隊ハ四箇中隊ヨリ編成シ五條警察署管轄區内青年團ヲ第五中隊、松原警察署管轄區内青年團ヲ第六中隊、堀川警察署管轄區内青年團ヲ第七中隊、七條警察署管轄區内青年團ヲ第八中隊トス
- 第三大隊ハ學區以外ノ青年團ヲ以テ組織シタル小隊ニ依リ編成ス
- 一〇、各小隊ニハ小隊長一名、保安係八名、經理係一名、衛生係一名、作業係一名、通信係一名、通信係二名ニ當ル

分隊長ハ當該團長ノ推薦ニ依リ司令之ヲ囑託ス

- 二、一、保安係ハ警備、交通整理、治安維持ニ關スル任務ニ當ル
- 二、二、經理係ハ物品ノ調算、供給、炊爨運輸其他經理ニ關スル任務ニ當ル
- 二、三、衛生係ハ一般衛生保健救護ニ關スル任務ニ當ル
- 二、四、衛生係ハ水火其他災害防止建築土木作業ニ關スル任務ニ當ル
- 二、五、作業係ハ通信傳令ニ關スル任務ニ當ル
- 二、六、通信係ハ通信傳令ニ關スル任務ニ當ル
- 小隊
- 二、七、小隊旗ハ本團ヨリ授與ス
- 二、八、警備隊出動ノ際ハ小隊旗ヲ携行スルモノトス
- 器具
- 二、九、一箇小隊又ハ一箇分隊ニ左ノ器具ヲ備フルモノトス
- 保安係 團杖四 警備繩四
- 衛生係 藥囊一
- 作業係 圓匙一 十字鉞一 斧一
- 通信係 信號手旗一組 自轉車一
- 三、〇、警備隊出動ノ際ハ各係ニ於テ器具ヲ携行スルモノトス
- 三、一、警備隊ニ出動スル際ハ本團制服ヲ着用シ左腕ニ別ニ定ムル腕章ヲ佩用スルモノトス
- 各宮殿下ノ御下賜金
- 京都市聯合青年團の警備隊は御入洛中の 各皇族殿下の御旅館を連日に互り御警戒申上げ晝夜を徹して御安泰を祈り奉る所ありしが二十日に至り左記 各宮殿下 に於かせられては其勞を多し思召され金一封を御下賜あらせられたり。

秩父宮殿下
高松宮殿下
閑院宮殿下
伏見宮殿下
賀陽宮殿下
久邇宮殿下
梨本宮殿下
朝香宮殿下
東久邇宮殿下

當時の新聞記事

警察の片腕となつて

青年團員の貴い活動

うづまく奉迎者から

感謝の涙で迎へらる

奉迎気分が上にも高潮し全市うれしいざわめきに酔ひ初めた六日夜京都市聯合青年團の警備隊ではめざましい活動を開始した。奉迎者でうづまくメイストリートはいふにおよばず附近の大路小路の交叉點には抜目なく人員が配置されて、曉氣につままれてけふる奉祝軒燈の光をうけて各警備員の面には悲壯なる緊張のみなかりがうかがはれた。七日の曉に近づくに奉拜者の來往は益々増加してさながら織るが如く交通整理に手のいること、猫の手でも借りたい程のその忙しさしかし若き警備員等は一睡もやらぬに元氣横溢警察當局の片腕となつて貴い活動をつづけた、何分警官隊の「オイユ

第四節 記念誌編纂

本市大禮奉祝事務局内に編纂係を設け一、京都名勝誌、二、英文京都及近郊其の他の編纂をなせしが尙本市大禮奉祝記事を刊行すべく次の編纂方針を立てたり。而して該資料は大禮當時より各部係に於て取纏めたるものを蒐集し昭和四年六月初より起稿し翌年二月脱稿を告げたり。

一 大禮奉祝記事編纂方針豫定

(一)顧問ノ囑託

記念誌編纂ニ當リテハ故實ニ精通セル顧問ヲ囑託シ監督ヲ受ケ萬遺漏ナキヲ期スルモノトス

(二)記述(事務的方面)

- 1、御大禮ニ關スル官報發布以來大禮官制制定ヨリ本市大禮奉祝事務局及大禮奉祝會設置ニ至ルマテノ經過施設方針ノ詳述
- 2、大禮奉祝事務トシテ本市ノ施設セル一切ノ事業ニ付毎月部、係ノ進捗狀況ノ通知ヲ受ケ之ヲ詳述シ又博覽會奉祝會トノ連絡ニ關シテモ之ヲ記述ス
- 3、御大禮終了後直ニ各係備付ノ日記ヲ編纂係ニ提出セシメ此ノ記録ニ基キ各係ノ奉祝ニ對スル狀況ノ記述
- 4、御即位當日及其ノ前後ノ模様ヲ詳細ニ記述

(三)寫眞挿入

兩陛下ノ御聖影

1、大禮使總裁宮殿下、大禮使長官其ノ他關係高位高官、市長及

李 王 殿下
李 瑠 公 殿下

右に就き本團に於ては恐懼措く能はず、土岐市長は青年團を代表して各宮殿下の御旅館を伺候し御禮を言上する所ありしが、本團に於ては永く記念せん爲、御下賜金貳百五拾圓中、參拾圓は聯合團の基金とし、他は本市加盟各團に分配したり、尙各團に於ては更に此の光榮を永く偲び奉るべく或は基金積立とし若くは適當なる記念事業を計畫する等何れも大禮記念として感激を深くしたり。

ラク」式ではなく言葉やはらかに案内するので奉拜者からの氣うけは頗るよくいたる所感激の眼をもつて迎へられた、かくて鹵簿御通過時間の切迫とともに交通遮斷線の警戒ます、かたく必死となつて大衆の殺到にあつたが通御後の群集の解散にはなほ一層手すり血眼となつて交通整理に従事した。又一方實業青年團で組織された一隊はかひなく白だすきを肩にして市電の交叉點までは郊外電車の乗降場に立ち土地不案内の入落者のため親切なガイドとなつて立働きの感謝の涙を以て迎へられた。

この日の警備隊編成は全市の聯合青年團を三大隊に分ち第一大隊を上京各學區青年團約一千名第二大隊は下京各學區青年團約八百名、第三大隊は學區外の各種青年團約四百名とし總指揮に竹上理事、大隊長には比賀江、西谷各理事があたり、これら各幹部はオーブンの自動車をさげして警戒線の視察をするなど各得意な場面を見せてゐた、なほ一部の警備隊員は皇族御宿舎の御警戒にあたり七日も不寝の番につとめたが何れも 兩陛下をわれらが都に迎へ奉つた歡びに感激の涙を見せてゐた。

市大禮事務局委員長、副委員長ノ各寫眞

- 1、紫宸殿、仙洞御所、二條、桂、修學院各離宮
- 2、兩陛下下幸啓、還幸啓、御滯洛中ノ御模様拜寫
- 3、高位高官ノ參入退出
- 4、饗宴場ノ光景
- 5、御大禮中ノ市内光景
- 6、御大禮奉祝ニ因メル催シ物寫眞
- 7、其の他大禮ニ關係アルモノハ細大洩サス撮影挿入セントス

(四)印刷

二六倍版ノ形式ヲ採用シ用紙ハ最モ高級ナルモノヲ使用セントス寫眞ハ全部高級印刷ト爲シ裝幀ハ絹本張表紙トシ帙入トス右意匠ハ専門家ニ依囑シ最モ莊重味アルモノトセントス

二 資料蒐集に關し各方面への照會

(一)各係長宛

大禮奉祝本市記事別紙目次ノ大要ニ依リ編纂致度候ニ付自今之ニ關シ資料(刷物、冊子等)出來候節ハ其の都度一部當係へ便宜御廻送相煩度右及照會候也

昭和三年八月 日 庶務部編纂係

(二)市内各學校長、學務委員、公同幹事、衛生幹事、在郷軍人會長、青年團長、處女會長宛

拜啓 益々御多祥奉賀候陳者今般本市ニ於テ今秋舉行アラセラルヘキ御大禮記念ノ爲大禮奉祝京都市記事編纂ノ上參列者ニ贈呈可

致豫定ニ就テハ右記事中へ挿入致度候間貴學區ニ於テ奉祝記念事業有之候ハ、詳細(刷物、冊子、寫眞、等添附)來ル十一月末日限リ當庶務部編纂係宛報告相煩度此段及照會候也
昭和四年一月二十日

京都市大禮奉祝事務局委員長
京都市助役 安川 和三郎

三 本市内御用命者へ照會

拜啓益御多祥奉賀候陳ハ今般本市ニ於テ御舉行アラセラルヘキ御大禮記念ノ爲大禮奉祝京都市記事編纂ノ上參列者へ贈呈可致豫定ニ就テハ右記事中へ挿入致度候間貴店ニ於テ御用命ヲ受ケラレタル御納品有之候ハ、左記御記入ノ上來ル十一月二十日迄ニ當庶務部編纂係宛御通告相煩度此段及御依頼候也
昭和三年十月三十日

京都市大禮奉祝事務局委員長
京都市助役 安川 和三郎

品目 要項 單位 數量 納期 調達者氏名 備考

追テ御謹製當時ノ寫眞及刷物等有之候ハ、御通告ノ際御添附願度候

四 各部、係へ照會

禮庶第一五號
大禮奉祝京都市記事編纂資料ニ關シテハ曩ニ再度照會致置候通右記

協議事項

一、起案説明

本書ハ本市大禮奉祝ニ關スル諸般ノ施設及狀況ヲ詳細ニ記述スヘク目次ヲ設ケ之ニ準ジテ資料ノ蒐集ニ當リタルモノニシテ目次ノ内容ハ三編數章數節ニ分チ以テ一般ノ準備事項ヨリ實施狀況ニ及ヒ更ニ奉祝記念ニ關スル事項竝ニ德音優典ニ至ル本市ニ於テ行ハセラレ又實施シタルモノヲ網羅スルモノニシテ、制本ハ紙數七百頁、挿入寫眞百七十枚、附圖三十枚外ニ凸版カットトシテ挿ムモノ三十七枚之ヲ大和綴ニ仕上クル豫定ナリ尙書名ハ便宜上大禮奉祝京都市記事トナセシモ更ニ適當ナル名稱ヲ附セラレタシ。

以上説明ニ次キテ左ノ修正意見アリ
(一)草案中、第一編前記第二編本記第三編後記ト分チタルハ記事ノ内容ト對照シテ齟齬スルトコロアリ單ニ第一、二、三編ト訂正スルヲ可トス

(二)本記事中ニハ本市長ヲ始メ本市大禮奉祝事務局員ガ人知レス赤誠ヲ捧クベク焦慮セシ具體的事項ヲ如實ニ表ハシタルモノ少ナク只一片ノ事務記録ニ過ギサルハ遺憾ナリ適當ニ記入シタシ
(三)衛生記事ヲ章トナセルニ對シ電氣施設ヲ節ニナシタルハ權衡ヲ失スタメニ章ニ改メタシ

(四)目次中ニ「其他」ト記セル項目多シ適當ニ省キタシ

(五)書名ハ京都市大禮奉祝誌ト改メタシ

(六)本協議事項ヲ僅カノ時間ニ涉獵シ了ラントスルハ困難ナリ更ニ委員ヲ設ケテ審査スベシ

事資料ハ來ル三月末大禮使へ報告ヲ要スル儀モ有之旁蒐集上遺漏ナキヲ期度候間御了承ノ上各部係ニ於テ御取纏ノ上來ル二月十五日限り當庶務部編纂係宛御回送相成候様致度此段及照會候也
昭和四年一月二十八日

京都市大禮奉祝事務局委員長
安川 和三郎

五 記事編纂に關する協議會

昭和四年十月初旬資料ノ蒐集を了したるにより大體目次の編制を前案として同月四日午前十時より本廳貴賓室に於て編纂に關する協議會を開催したり。當日出席者竝に協議事項次の如し。

出席者 (順序不同)

助 役	安川 和三郎	助 役	村 田 武
收入 役	北 崎 巽	祕書課長	天 野 景 光
副收入 役	小 泉 丞	土木課長	高 田 景
電氣局長	木 村 尙 一	技師長	山 田 耕
保健部長	市 川 達 次 郎	教育部長	續 有 節
學務課長	龜 田 啓 二	社會課長	西 田 利 八
營繕課長	三 橋 國 太 郎	文書課長	川 崎 榮 喜 田
祕書課	木 寺 基 一 郎	祕書課内	小 笹 三 十 郎
文書課	國 島 高 一	文書課	清 水 瑞 一 郎
同	小 畑 備 賀 九	同	井 上 種 男
同	安 達 技 早 吉		

斯くて正午第一回の協議會を打切り左記委員に一任せり。

安川助役 村田助役 北崎收入役 天矢祕書課長

小泉副收入役 川崎文書課長

十月十五日午前十時より委員會を開き協議の結果左記修正を加へ尙記事内容は便宜委員へ回覽するに決せり。

修正ヲ加フヘキ事項

- (一)第二章第五節ノ電氣施設ヲ第三章電氣施設ト改ム
- (二)第二編中ノ市長諭告ニ關スル事項ヲ第一編第七章トシ祈禱祭竝ニ市長諭告ニ關スル事項ト改ム
- (三)第二編第七章末尾ニ奉祝電車、奉祝踊ノ節ヲ設ク
- (四)第三編三、四章ヲ變更シテ第三章ヲ天覽竝ニ御買上品、第四章ヲ御下賜金ニ關スル事項ト改ム
- (五)第三編第七章ヲ變更シテ感謝祭竝ニ謝狀贈呈ノ章ヲ設ク

六 印刷製本

本記録は昭和四年十二月に至り漸く脱稿し頁數の見込も立ちたるを以て次の仕様書により印刷製本に附することに、したり、而して印刷は市内同業者中確實に認めたる左記數名を選定して指名入札し十二月十六日仕様書及請負者心得を示して入札を執行し内外出版印刷株式會社に落札したり。

中西印刷合名會社
株式會社 似玉堂
内外出版印刷株式會社

仕様書

- 一、名稱 京都市大禮奉祝誌
- 二、部数 壹千部
- 三、體裁
 - 1、大キサ 四六倍版
 - 2、表紙 大和綴
 - 色 焦茶色
 - 生地 紬、地帙は紬地又は麻地極上
 - 春 角布綴子
 - 裏 表紙に準ず
- 3、扉文字 隸書
- 4、綴方 日本綴帙入
- 一、寫眞 コロタイプ刷 七十枚 (説明刷込)
- 一、地圖 三十枚 (内一枚ハ四色刷其他ハ石版刷)
- 一、カット凸版 三十五枚
- 一、紙質
 - イ、本文 金菱(又ハ之ト類似ノモノ)七十五斤 六百五十頁
 - ロ、寫眞 白菱九十斤 七十枚 裏白
 - ハ、地圖 模造紙六十斤 三十枚
 - 一、活字 ホイント及六號活字
 - 一頁ヲ二段トシ仕切ハ波線ヲ用フ
 - 一、帙 表 藍色 生地麻ヲ用フ裏白
 - 一、其他 包紙一枚 見返二枚 扉題名一色刷一枚

第七章 諸會合

第一節 全國統計大會

今次の大禮を記念として一般統計觀念の啓發に資すべき目的の下に東京統計協會は内閣統計局、農林省、商工省、京都府、京都市、京都商工會議所等後援の下に、全國統計實務者並に關係者約六千名の参加を得て、意義深き我京都市に於て盛大なる記念大會を開催したり。概要次の如し。

會場 洛北植物園
 日時 十二月五、六日
 一 大會第一日(十二月五日)の概要
 朝來比叡を目近に賀茂川の潺湲たるほこり、初冬の碧空に際立てる大綠門を目標に、参加者は遠くは滿鮮、臺灣、樺太を始めとして殆んご各府縣を洩さず陸續詰掛け、定刻前大テント張りの會場は既に滿員の狀況を呈したり。

午前十時半開會、先づ阪谷會長はマイクrohンを通じて開會を告げ、國歌合唱に次ぎて中橋商工大臣の祝詞並に田中首相、内務、大藏、文部、農林の各大臣及内閣統計局長、京都府知事、京都市長、京都商工會議所會頭、京都帝大總長等の祝詞並に祝電の代讀あり、次に左記賀表捧呈の件を可決したる後、別項本會の決議文を議了し、石田京都府内務部長發聲の下に萬歳を三唱して式を閉ぢたり。

賀表

勅聖文武 天皇陛下今回即位ノ大典ヲ舉ゲサセ給フ本大會參會者一同誠歡誠喜慶祝ノ至ニ堪ヘズ、臣等即茲ニ本大會ヲ代表シ謹テ欣賀シ奉ル

昭和三年十二月五日

大禮記念全國統計大會代表者

正三位勳一等法學博士男爵

臣 阪谷芳郎

決議文

我邦人口増加、産業發達其ノ他諸般ノ情勢ニ照シ統計ノ刷新、改善及統計知識ノ普及ハ寔ニ緊急ナル時勢ナリト認ム、仍テ中央及地方ヲ通ジ當局ハ統計ニ關スル制度施設ノ一層充實整備ヲ圖リ、之ガ爲要スル相當ノ經費ヲ支出セラレシコトヲ希望ス。

右決議ス

於 京都

全國統計大會

續きて園遊會に移り十數餘の摸擬店を開きて遠來の來賓並に會員を搞ひ、餘興數番ありていこも盛會裡に散會したり。

當日は午後六時より市公會堂に於て懇親會を開催したり。先づ阪谷會長の挨拶に次ぎて中橋商工大臣より來賓一同を代表したる謝辭

あり、下條統計局長、其他二三のテールブルスピッチありてデザートコースに入り、外に餘興として能狂言あり、主客共に歡を盡して閉會を告げたりしは午後十時なりき。

尙會場より東館に至る廊下には、内閣統計局を始め、内務、商工、農林、文部各省の製作に係る各種の統計表を掲げて自由に觀覽せしめ、參會者の好資料たらしめたり。

二 大會第二日(十二月六日)

本會第二日は、午前九時より市公會堂に於て開催したり。阪谷會長の挨拶ありて後、斯界の權威として有名たる左記數氏の講演あり。

我國經濟の實相

三菱銀行取締役 山室 宗文

統計の改善普及に就て

法學博士 高野岩三郎

人口食糧問題の根本義

農學博士 新渡戸 稻造

以上は言々悉な統計學上の改善資料の把握上に偉大なるヒントを與へ滿堂の耳目を惹きたり。

曠古の御盛儀を記念すべき全國統計大會は、大盛況裡に茲に閉會を告ぐるに至り、阪谷會長はいさも感激に滿ちたる閉會の辭を述べ散會したりしが、尙會員は閉會前後を通じて御所拜觀竝に京都名所の探勝をなし、京都府、市よりは京都名所案内其他の土産品を袋入しして贈呈し本市調査課員は閉會中總動員にて本會の爲に盡す所ありたり。

第二節 全國教育大會

昭和の大禮を期して開催せんとする全國教育大會は、京都府、市兩

教育會主催の下に十一月二十五日より同二十九日に至る五日間、京都帝國大學講堂に於て第一日の總會を開きたるを始め、續きて第二日より左記各部會に分れて開催したり。本會は昭和の聖世に處して教育上考究すべき諸問題を討議するに共に、一は全國に互り多數の教育者をして二十六日東京還幸の際に於ける鹵簿奉拜の光榮に浴せしめ國民教育上の大資料たらしむるに、尙引續き式場跡拜觀の便あり茲に大會を催せるものにして、爲めに續々入會を申込みもの多く、各道府縣は云ふも更なり、遠くは朝鮮、臺灣、關東州等よりも多數の參加者あり、出席總數三千二百餘名に達し、大盛會を極めたり。

一 第一日(十一月二十五日)

午前十時より京大講堂に於て發會式を擧げたり、定刻前各道府縣及殖民地の代表者全部出席、竹井京都市教育部長は主催側を代表して開會を告げ、荒木京都府教育會長の勅語奉讀あり、續きて勝田文相、望月内相、大海原京都府知事、土岐京都市長等の祝詞あり、之にて式を閉ぢ少憩の後總會に入る、先づ本會議長として林博太郎伯を推舉し、議事に入れり。

劈頭賀表捧呈の件は滿場總起立の裡に可決し、續きて左記の本會宣言決議をなしたるが、二三意見ありたるも異議なく可決し、次は文部省諮問案に係る「國民思想振作に關し教育上特に留意すべき事項如何」を上程せしが、數名の委員附託となり正午散會したり。

各部會	場 所	人員
保 育 部 會	市内立誠小學校内	二五八
小學教育部會	市内都文小學校内	五五四



(園物植) 會大計統國全



(堂講大學大國帝都京) 會大育教國全

師範教育部會	京都府師範學校内	一三九
中學教育部會	市内第三高等學校内	一〇六
女子中等教育部會	市内二條高等女學校内	一八四
實業教育部會	京都府立第一高等女學校内	九〇四
體育衛生部會	京都舞臺學校内	二八四
特殊教育部會	市内格致小學校内	二四八
社會教育部會	市内本能小學校内	三〇〇

宣 言

昭和の聖代は 明治大帝の宏謀を繼紹して常に國運の隆昌文化の進展を期すべき秋なり、今や徽聖文武 天皇陛下畏くも神器を奉じて京都皇宮に移御し曠古の盛儀を備へて即位の大禮を行ひ遍く臣民に大詔を賜ひて治道の要諦文化の神髓を明示し給ふ、聖旨優渥洵に感激の至りに堪へず、我等全國の教育に従事する者茲に大會を開き謹みて聖旨を奉體し協力一致誓つて左記綱領の實行を期す

- 一、國體觀念の涵養に努め益々國民精神を作興すること
- 二、立憲思想の養成に力め特に政治道德の向上を期すること
- 三、社會教化の普及を圖り一層民風を醇厚ならしむること
- 四、自主獨創の精神を啓培し進取雄大の氣風を振興すること
- 五、學制々度を革新し國勢民情に適合せしむること

尙二十六日以後は左記の日程により議事若くは見學等を行ひたり
 第二日(十一月二十六日) 御還幸函簿を御苑内に於て奉拜したり
 第三日(十一月二十七日) 各部會を開きたり。
 第四日(十一月二十八日) 同 右

第五日(十一月二十九日) 午前中は市公會堂に於て委員附託の諮問案を始め議事總會を開き、午後は東西兩本願寺其他の觀覽をなせり。
 本會開催に當り補助金として本市よりは金參千五百圓を交付したり

第三節 全國青年大會

大日本聯合青年團第四回大會は、今次の御大禮を奉祝しまつるべく特に會場を京都市に定め、京都府、市聯合青年團幹旋の下に十一月十七日より向三日間市立二條高等女學校内に開催したり、來會者は全國各地の青年團代表者一千餘名にして、第一日は畏くも 秩父宮殿下の台臨を仰ぐの光榮を有し、來會者も定刻前には全部參集し一入の緊張味を帯びて盛なる開會式を擧げたり、來賓竝に大會の狀況次の如し。

來 賓

- 文部、内務兩大臣代理
- 京都府知事代理
- 京都市長代理
- 京都府、市名譽職
- 關係各學校長等
- 大會出席者
- 一、正團員 郡、市、島、支廳(北海道、樺太)各一名
- 但東京、大阪二市にありては區の數と同數とし京都、名古屋、神戸、横濱の四市にありては各五名とす。

二、青年團關係者 一加盟團に付二名以内
但六大都市を含む府縣の加盟團にありては其倍數

三、加盟團外青年團
イ、正團員 朝鮮十三名、臺灣七名、關東州七名
ロ、青年團關係者 朝鮮、臺灣、關東州を通じ各二名以内
總計八百四十三名

日 程

第一日(十一月十七日)

開 會 式 午前九時—十時
會 議 同 十時—正午
講 演 會 午後零時半—三時
マステージム及青訓分列式參觀
提燈行列

第二日(十一月十八日)

青年意見發表會 午前九時—正午
御大禮講話 午後一時—二時
郷土藝術の會參觀 午後二時—五時
第三日(十一月十九日)
兩陛下奉送 午前十時
桃山御陵參拜 午前十一時京都驛發
市内自由見學 午 後

第一日は十七日午前九時半開會、先づ本會池園理事開會の主旨を述べ、一同起立の下に國歌を奏唱したる後井上本會理事長の令旨の捧讀

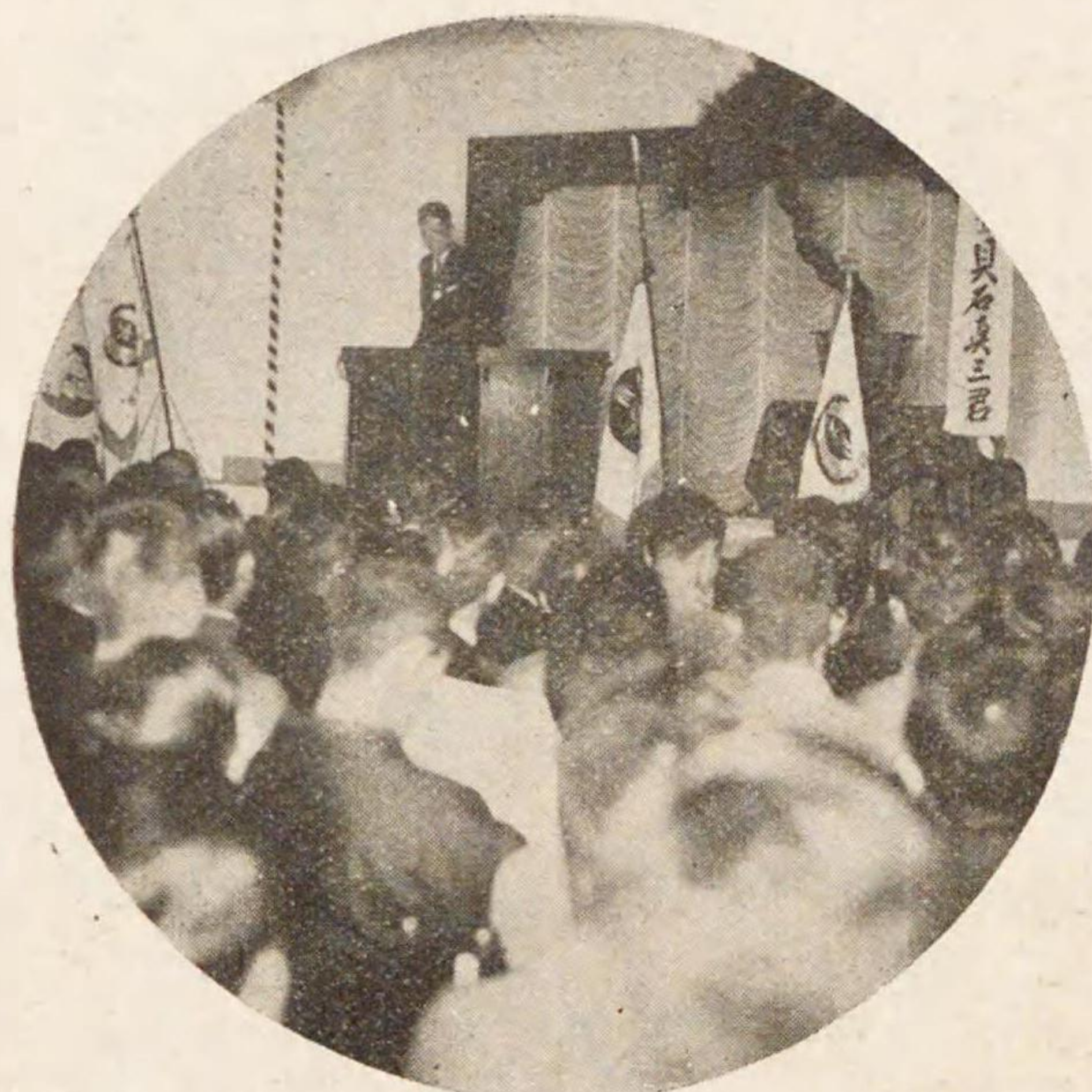


(校學女等高條二) 會大團年青國全



上 同

あり、次で本日の來賓たる文部、内務兩大臣を始め、大海原京都府知事、土岐京都市長、竹上京都府聯合青年團理事等の、熱誠を罩めて此の曠古の大禮を機とし一層青年團員の奮起を想はしむる激勵の辭



會大年青國全

あり、之れにて閉會を告げ議事に入りて次の奉祝文捧呈の件を決議し、午後は徳富健次郎氏の青年修養に關する講演あり、終つて京都府聯合青年團のマステージム及青訓分列式參觀をなし、午後七時よりは提燈行列を催して建禮門前に集り萬歳を三

唱したり。

奉 祝 文

今上天皇陛下大禮ノ御儀ヲ舉ケサセラル、誠に感激恐懼ニ堪ヘズ、大日本聯合青年團ハ平安ノ都ニ於テ奉祝大會ヲ開キ謹ミテ曠古ノ盛典ヲ祝シ奉ル、我等團員ハ深遠ナル聖旨ヲ體シ日本青年タルノ使命ヲ覺リ國運進展ノ基礎ヲ固ムルニ一層奮勵努力センコトヲ期ス
茲ニ謹ミ畏ミテ寶祚ノ無窮ト聖壽ノ萬歲ヲ祈リ奉ル

昭和三年十一月十七日

大日本聯合青年團奉祝大會議長

正四位勳三等 井上準之助

本會は時々地々の利を得て全國多數の出席者を見たるに、畏くも宮殿下の台臨を忝ふしたることは、本會の一大記念として永久に偲ぶもの多かりき。尙將來の中堅として立つべき青年團員の會合だけに何處までも潑刺たる氣分を見せ、第二の意見發表會の如きは確かに昭和聖世の初頭に對ふる所あらしめ大盛會裡に終了したり。

第四節 全國女子青年大會

今次の大禮を奉祝し記念しまつるべく開催せる全國女子青年團第二回大會は、昭和三年十一月二十一日より三日間市内二條高等女學校講堂に於て開きたり、今回は鹵簿奉拜の光榮に浴せしむべく特に京都市に於て開催せしこゝ、て全國各地よりの代表約五百名に上り京都市、市聯合處女會は開催地として専ら斡旋の衝に當り頗る盛況を極めたり大要次の如し。

第一日(十一月二十一日)午前十時開催
一、開會式次第

一同着席	海江田本會主事
開會の辭	
國歌合唱	
教育勅語奉讀	山脇本會理事長
挨拶	理事 長
祝詞	文部大臣
	内務大臣

第四節 全國女子青年大會

京都府知事

京都市長

京都府聯合處女會長

京都市聯合處女會長

中村菊枝女史

出席者總代挨拶

御大禮奉祝歌合唱

天皇 皇后 兩陛下萬歲三唱

閉會の辭

二、會議(同十一時ヨリ)

會務報告(武部議長)

宣言決議

國歌合唱

閉會の辭

休憩(晝食)

三、講演(同午後一時ヨリ)

講師及び演題

今上天皇 皇后陛下の御盛徳に就て

伯爵 本團參與 二 荒 芳 德

四、餘興

京都に於ける郷土藝術其他

當日ノ宣言及決議事項

宣 言

大日本聯合女子青年團ハ茲ニ第二回大會ヲ開キ謹ミテ即位ノ大禮ヲ

奉祝シ寶祚ノ窮マリナク聖壽ノ疆リナカラシムコトヲ祈リ奉ルト共ニ
 全國女子青年團體ノ健全ナル發達ヲ冀フモノデアリマス、今ヤ國ヲ
 舉ゲテ壽ギ奉ルコノ大禮ヲ機トシ總テノ國民ガ正シキ生命ニ甦ラン
 トスルノハ邦家ノタメ眞ニ慶バシキ次第デアリマス、コノ國民更正
 ノ紀元ニアタリヨリ光アリヨリ望アル生活ヲ營マントスルハ尊ク生
 キントスル昭和ノ婦人ニトリテ最モ輝カシキ目標デアリコレニ到達
 スルコトハ私共ニ與ヘラレタル一大使命デアルコトヲ疑ヒマセン私
 共ハコノ使命ヲ果サンガタメ睿智ヲ磨キ愛ト誠ヲ養ヒテ益々人格ノ
 完成ニ努メ更ニ家庭ノ改善團體ノ發達ニ力ヲ盡シ進んで善良ナル社

會ノ建設ニ奉仕致シタイト思ヒマス
 右宣言致シマス

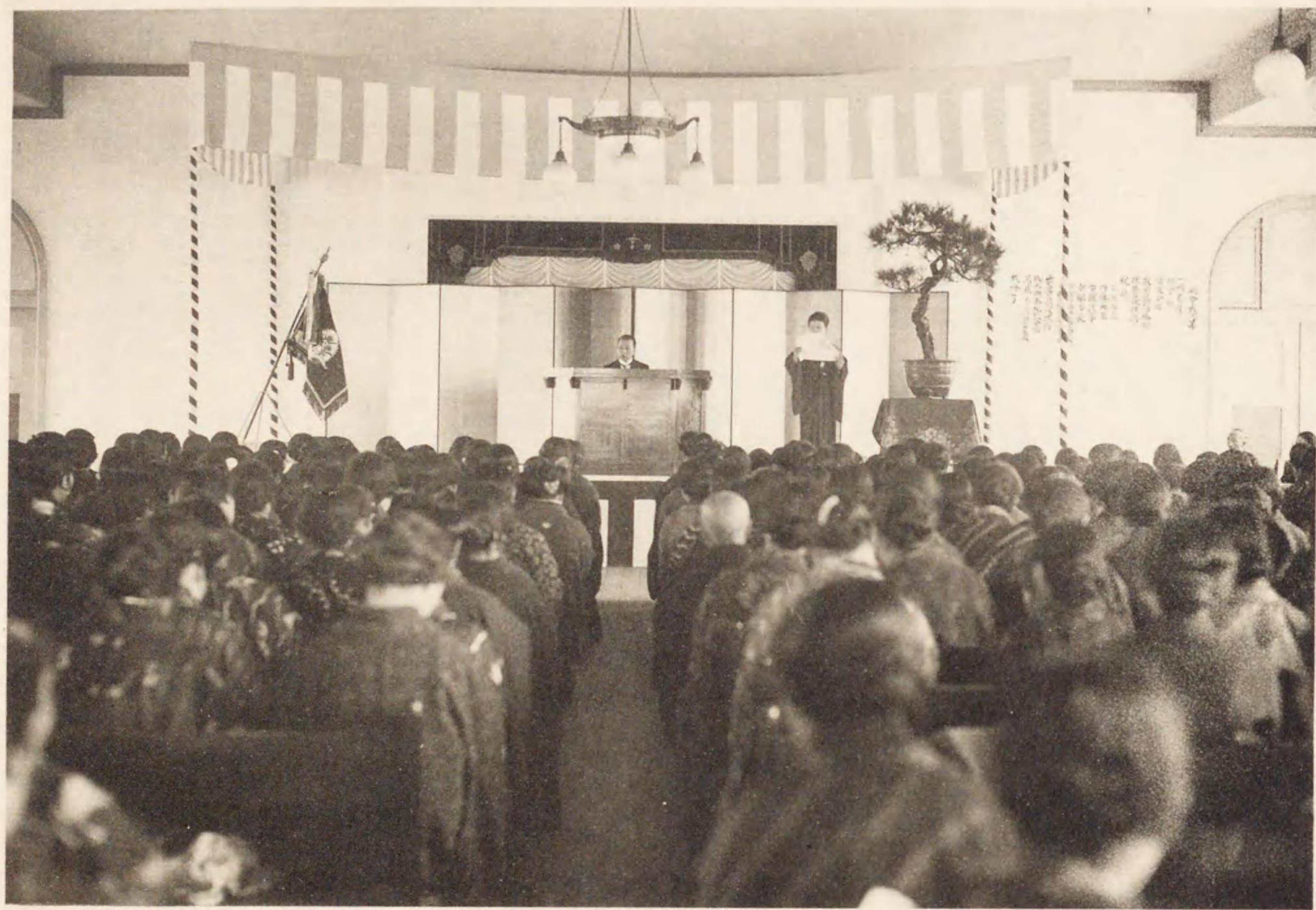
決 議

私共ハ今回ノ大會ヲ最モ意義アラシメ且其宣言ヲ實行センガタメ左
 記ノ事項ヲ申合セ相率キテ之ガ實績ヲ舉グルニ努メタイト存ジマス
 一、神明ヲ尊ビ皇室ヲ敬ヒ國民トシテノ務ヲ果シマセウ
 二、私共ノ團體ヲ眞ニ自分ノモノトシテ之ガ健全ナル發達ヲ圖リマセ
 ウ
 三、女子ノ天分ヲ自覺シ日本婦人ノ美德ヲ發揮シテ家庭ニ於テモ社會

女子青年團歌

♩ 108 歌二 大日本聯合女子青年團

一、 奉 祝 寶 祚 窮 マ リ ナ ク 聖 壽 疆 麗 ナ カ ラ シ ム コ ト ヲ 祈 リ 奉 ル ト 共 ニ
 二、 全 國 女 子 青 年 団 體 ノ 健 全 ナ ル 發 達 ヲ 冀 フ モ ノ デ ア リ マ ス 、 今 ヤ 國 ヲ
 三、 舉 ゲ テ 壽 ギ 奉 ル コ ノ 大 禮 ヲ 機 ト シ 總 テ ノ 國 民 ガ 正 シ キ 生 命 ニ 甦 ラ ン
 四、 ト ス ル ノ ハ 邦 家 ノ タ メ 眞 ニ 慶 バ シ キ 次 第 デ ア リ マ ス 、 コ ノ 國 民 更 正
 五、 ノ 紀 元 ニ ア タ リ ヨ リ 光 ア リ ヨ リ 望 ア ル 生 活 ヲ 營 マ ン ト ス ル ハ 尊 ク 生
 六、 キ ン ト ス ル 昭 和 ノ 婦 人 ニ ト リ テ 最 モ 輝 カ シ キ 目 標 デ ア リ コ レ ニ 到 達
 七、 ス ル コ ト ハ 私 共 ニ 與 ヘ ラ レ タ ル 一 大 使 命 デ ア ル コ ト ヲ 疑 ヒ マ セ ン 私
 八、 共 ハ コ ノ 使 命 ヲ 果 サ ン ガ タ メ 智 慧 ヲ 磨 キ 愛 ト 誠 ヲ 養 ヒ テ 益 ヲ 進 ン デ 善 良 ナ ル 社
 九、 會 ノ 建 設 ニ 奉 仕 致 シ タ イ ト 思 ヒ マ ス
 十、 右 宣 言 致 シ マ ス



(一 其) 會大團年青子女國全



(二 其) 上 同

ニ於テモ平和ノ中心タルコトヲ期シマセウ

四、精神生活ヲ重ンジ趣味ノ向上ヲ圖ルト共ニ實生活ニ適切ナル智能

ノ練磨ニ努メマセウ

五、常ニ體育及ビ衛生ニ注意シ健康ノ増進ヲ圖リマセウ

第二日(十一月二十二日)

桃山御陵參拜

當日は午前九時迄に御香宮境内に集合の上同九時半桃山御陵に參拜
次で乃木神社に參拜同十時十五分より報徳堂に參集して花田報徳會
理事長の「家庭生活ニ報徳精神」なる講演を聞き此處にて晝食を喫し
午後は京都大博覽會其他の見學をなせり。

第三日(十一月二十三日)

當日は 聖上陛下御傍の山陵へ御親謁あらせ給ふにより會員一同
は午前六時御苑内東側の奉拜所に整列し鹵簿を奉送しまつり同十一
時より開會し會員の意見發表をなす。

意見發表者氏名及演題(一人十分間以内)

- 一、我等女子青年團の使命 愛知縣 高橋はるを
- 二、現代處女の覺悟 京都府 清水むめの
- 三、昭和女子青年の目標 鹿兒島縣 杉安ヒロ
- 四、努力を繼續せよ 宮城縣 熊谷淑子
- 五、使命に生きよ 宮崎縣 田尾春子
- 六、處女の自覺 山口縣 藤原久子
- 七、女子青年の自覺ニ修養 神奈川縣 關山八重子
- 八、現代女子青年修養の着眼點 三重縣 松田きぬ

第五節 其他各種團體大會

九、眞理を訊ねて 島根縣 富山マチノ

十、眞の産業趣味を體驗するまで 熊本縣 内田シマエ

二、過渡期の女子青年をあづかるに當つて 福井縣 藤田小ツル

三、所 感 岡山縣 林 綠

三、所 感 滋賀縣 長谷川 千恵子

四、婦人の力の偉大なるを説く 秋田縣 富樫 貞

右終りて閉會式に移り、

理事長の挨拶出席者總代の謝辭あり。

團歌合唱の上大日本聯合女子青年團の萬歳を唱へて閉會をなせし
が本會は時運の進歩に伴ひ女子の發達せる狀況を遺憾なく發露せ
るものにして各地の代表者は夫れ々々緊張せる面持にて其の責任
を盡すに努め來場者一般に感動を與へたり、大盛會裡に各自他山
の石を負ひて故山に向ひたりしが本會は確かに昭和聖世の記念ニ
して恰好の事業たりしを覺ゆ。

第五節 其他各種團體大會

一 京都府下女子中等學校聯合奉祝大音樂會

慶祝に滿ちたるよろこびの聲は、美し和のリズムを描きて本市圓山
公園に集れり、府下聯合女子中等學校の奉祝音樂會は、聖上御還幸の
御波殘を惜むものの如く、二十五日午前九時より一齊に本市圓山音樂
堂に會し、同九時半より開催したり、集れるものは、府立第一高等女

學校、同第二高等女學校、同桃山高等女學校、市立堀川高等女學校、同二條高等女學校、桃山女子師範學校を始め、市内明德、精華、淑女平安、成安、華頂、市外菊花の各高等女學校生徒等約一萬五千名にして、出演者總數二千五百名に上り、加ふるに聴客として集るもの無慮數萬人、眞島ヶ原音楽堂は眞に幾重の人垣を以て圍みたり。

當日は、奉祝に因みて各曲目も精練されたるもの多く出演者も終始一貫して緊張せる面持を表はし、空前の大音楽會として一般の大喝采を博し、午後四時大盛況裡に散會したり。

二 府下聯合婦人大會

今次の御大禮を期し京都府下に於ける各婦人を聯合して京都聯合婦人會を組織し、共同一致以て婦人の本務とする生活改善、勤儉獎勵其他時代の進歩に副ふべく努め、修身齊家の美を一層顯著ならしめん事を期したり。

而して十二月二日午前九時より市内二條高等女學校内に發會式及創立總會を開き、會長には大海原知事夫人、副會長には土岐市長夫人並に福島府學務部長夫人を推舉し、來會者七百餘名にして、討議、研究發表、講演、其他見學等の日程を終へ大盛況の裡に終了したり。

宣 言

内確固タル志操ヲ持シ外温良愛敬ノ徳ヲ守リ克ク家ヲ治メ子女ヲ教養シ以テ女性タルノ光輝ヲ發揚シ來レルハ實ニ我國婦人ノ美德ナリ、ワレラ聖代ニ生ラ享ケ昭和典禮ノ秋ニ當リ京都聯合婦人會ヲ組織シ茲ニ發會式ヲ舉グ感激ノ至ニ堪ヘス、省ミテ現下ノ國狀ニ照ラシ婦人ノ使命愈々重大ナルヲ念ヒ、協力一致誓テ聖旨ヲ奉體シ益々教養ニ努メ

來會者二百十名にして全國各府縣を始め朝鮮大連臺灣各地方よりの出席者を網羅し、文部省諮問案の討議に對する答申案を始め、連日議事並に御所離宮の拜觀をなし盛況の裡に閉會したり。

五 道府縣會議長會

昭和三年十一月十五日午前十時より本府會議場内に開會す、出席者は北海道會議長村田駒次郎外四十二名にして、當日は望月内務大臣、大海原知事の祝辭稻葉京都府會議長の挨拶あり、次で議事に入り、埼玉、宮城、福井、岡山等より提出の諸問題を討議し、午後四時終了たり。

六 全國教化事業代表者大會

第五回全國教化事業關係代表者大會は、御大典を記念し十二月十四、五、六、の三日間市内龍谷大學講堂に於て開催せり、第一日は午前九時古谷中央教化團體聯合會幹事開會を宣し、國歌合唱の後國民精神作興に關する詔書を奉讀し、山川(健次郎)會長の挨拶あり、田中總理大臣、勝田文部大臣、望月内務大臣、大海原知事、土岐市長等の祝辭代讀あり、次で文部大臣諮問事項たる(晩近我國ニ於ケル思想ノ傾向ニ鑑ミ教化上特ニ留意スベキ事項如何)

に就き文部省小椋社會教育課長の説明ありて討議に入れり、第二日は平安神宮參拜を終へて參會者の感想發表あり、午後は松井茂法學博士の(日本共產黨事件ニ教化對策)、河井貞一博士の(マルクス主義の批判的考察)と題する講演あり。

第五節 其他各種團體大會

各其本分ヲ盡シ、社會ノ推移ト國運ノ隆昌ヲ圖リ、以テ祖先ノ遺風ヲ顯彰センコトヲ期ス。

三 全國町村長大會

全國町村長會自治懇談大會は御大典を機會に十二月七、八の兩日岡崎公會堂に於て開催せり、出席者は遠く北海道、沖繩縣地方に及び、申込者三千名に對して出席者五千名を突破する狀況を呈し大盛況を極めたり、されば大會を二日に分ち第一日の出席者を三千名に限定せしが、會場狹隘の爲め場外に溢れたり、來賓として内務大臣代理坂書記官、石田内務部長、土岐市長を始め朝野の名士多く福澤全國町村長會副會長司會の下に發會式を舉げ、次で議事に入れり。

午後は餘興として郷土藝術(宇治藝者の茶摘み踊り伏見阿波橋青年團の六齋踊)を紹介し大喝采を博したり、尙第二日も同様の順序によりて開催し、會員は交代に御所離宮の拜觀を始め京都名所をも觀覽し未曾有の大盛會裡に終了したり。

四 全國圖書館關係者大會

日本圖書館協會主催の下に第二十二回圖書館關係者大會を十二月三日より七日に至る五日間に互り左の如く開催したり、日程及場所大要次の如し。

- 第一日 第三高等學校進徳館内 (議事)
- 第二日 龍谷大學講堂 (同)
- 第三日 大谷大學講堂 (同)
- 第四日 京都府立圖書館内 (同及拜觀)
- 第五日 京都帝國大學講堂 (同)

第三日は大禮御式場跡の拜觀をなせり。

因に本會は青少年團、婦人會、禁酒會、廢娼團體等教化に關する會合だけに議題も頗る廣汎に互り、來會者四百名にして、時代の要望する有益なる會合なりき。

七 全國融和團體大會

大禮記念全國融和團體聯合大會は、平沼麒一郎男を始め朝野多數の來賓を迎へ十二月十五、六の兩日洛東華頂會館内に開催せり、出席者は團體代表全國各府縣に互り六百名に達したり、第一日は午前十時開會、平沼男爵を議長に推し、田中總理大臣、一木宮内大臣、望月内務大臣、勝田文部大臣、貴衆兩院議長、大海原知事、土岐市長等の祝辭代讀あり次の奉祝文並に宣言決議を可決したり。

奉 祝 文

茲ニ御大典記念全國融和團體聯合大會ヲ開催スルニ方リ一同謹ミテ御即位ノ大禮ヲ御滯リナク終了アラセラレタルヲ奉祝シ恭シク寶祚ノ無窮ヲ祈リ奉ル

昭和三年十二月十五日

御大典記念全國融和團體聯合大會會長

從二位勳一等男爵 平 沼 麒 一 郎

宣 言

恭シク惟ルニ 天皇陛下御即位ノ大禮ヲアゲサセラル、ニ方リ優渥ナル勅語ヲ賜ハル、聖旨宏遠殊ニ「教化ヲ醇厚ニシ愈々民心ノ和

會ヲ致シ普ク人類ノ福祉ヲ増サムコトヲト宣ベサセ給フ大御心ニ對シ奉リ衷ニ自ラ顧ルトキ果シテ 聖旨ニ副ヒ奉リ得タデアラウカ相倚リ相扶クベキ國民ニ於ケル不合理ノ差別ガ全ク撤去シ盡サレテキルデアラウカ

我等ハコノ社會的禍根ヲ除キ總テノ人々ガ和睦ミ相親ミ愉快ト榮光トニ輝キ得ル偕和ノ世界顯現ノ爲メニ從來アラユル力ヲ竭シ來ツタ而モ社會ノ現狀ヲ觀ルトキ遺憾ナガラ國民ノ自覺ニ缺クル所尙多ク人心ノ奥底ニ潜在スル差別觀念ハ我同胞ニ對シ精神的ニモ又經濟的ニモ甚ダシキ痛苦ヲ與ヘテキルノデハナイカ、殊ニ近來ノ現象トモ云フベキ内祕的敬遠的差別ノ擡頭ニ對シテハ更ニ大ニ戒心セネバナラナイ

今ヤ昭和ノ聖世ニ遇ヒ優渥ナル聖勅ヲ拜シ全國民ノ齊シク恐懼感激ニ堪ヘザル所須ラク更始一新ヲ劃スベキノ秋デアアル、コノ際我等ハ益々結束ヲ鞏クシ更ニ一段ノ奮勵ヲ加ヘコノ國民的運動ヲ擴充シ以テ不合理ナル同胞差別ノ絶滅ニ努メ國家社會ノ暗影ヲ一掃セネバ已マナイ
茲ニ御大禮記念全國融和團體聯合大會を開催スルニ方リ我等ノ所信ヲ披瀝シテ普クコレヲ天下ニ宣ス

決 議

- 一、社會ノ現狀ニ顧ミ益々融和觀念ノ普及徹底ヲ期ス
- 一、融和ノ實現ニ關シ純正ナル全國民的運動ヲ擴充シ積極的施設完成ヲ期ス

歡迎會 午後二時 於清永北苑

第二日 十一月五日

一、各部 會

一、公開講演 會

第三日 十一月六日

一、總 會

各部會の報告及決議

閉 會

一、會長 挨拶

一、兩陛下萬歲三唱

一、大會萬歲三唱

二、總會 議案

一、天機奉伺に關する件

一、全國佛教大會を永續する件

一、各部會よりの提案

一、禮 讚 文

(首座獨唱)

人身受け難し、今已に受く、佛法聞き難し、今已に聞く、此身今生に向て度せずんば、更に何れの生に向てか此身を度せん、大衆もろもろに至心に三寶に、歸依し奉るべし

(首座發唱)

自ら佛に歸依したてまつる、(合唱)當に願くば衆生ごもに、大道を體解して無上意を發さん

(首座發唱)

自ら法に歸依したてまつる、(合唱)當に願くば衆生ごもに、深く經藏に入て智慧海の如くならん

第五節 其他各種團體大會

午後には内務大臣諮問事項たる
一、現下ノ社會事情ニ鑑ミ融和問題解決上融和團體ノ執ルベキ最モ適切ナル方策如何
につき論議せしが、議長指名の下に十七名の委員附托ミして研究の上答申するこゝし、引續き各團體提案の協議研究題に入り大盛況を以て閉會したり。

八 全國佛教大會

御大典奉祝記念全國佛教大會は京都佛教護國團主催の下に十一月四五、六、の三日に亙り、洛東知恩院境内華頂會館に開催せり、來會者一千五百名大要次の順序に依れり。

一、御大典奉祝全國佛教大會執行順序
第一日 昭和三年十一月四日

開 會

午前十時

一、國歌 齊唱

一、禮 讚 文

一、挨拶 摺

一、議長副議長推薦

一、議長 挨拶

一、祝 辭

一、答 辭

一、大禮奉祝歌

一、總 會

一、部長副部长選舉

以上

司 會 者

來 賓

會 員 總 代

(首座發唱)

自ら僧に歸依したてまつる、(合唱)當に願くば衆生ごもに、大衆を統理して一切無礙ならん

(合 唱)

無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも相違ふこと難し、我今見聞し受持することを得たり、願くば如來の眞實義を解し奉らん

(首座獨唱)

願くば此功德を以て、普く一切に及ぼし、我等も衆生ごも、皆共に佛道を成就せん南無十方三世一切常住三寶哀愍攝護し給へ

決 議 案

提出者 佛教聯合會

我等ハ政府多年ノ聲明ニ基キ第五十六次帝國議會ニ宗教法竝ニ境内下戻法案ヲ提出セシメ全國佛教徒ノ結束ニ依リ萬難ヲ排シテ之ガ成立ヲ期ス

理 由

政府ハ明治三十二年一度宗教法制定ノ必要ヲ認メ之ヲ議會ニ提出シタルモ法案ノ不備ニ依リ異論百出シテ終ニ貴族院ノ否決スルトコロトナレリ爾來累次に内閣ハ美ニ懲リテ噲チ吹クガ如ク宗教法ヲ以テ政界ノ暗礁視シ宗教法ノ制定ニ一指ヲ染メズ殆ド三十年ヲ空過セルハ維新以後宗教無視ノ傳統的政策ニ累セラレ、モノニシテ政府ガ國家法制ノ統一ニ怠漫ナルノ誹ヲ免ルベカラズ適若槻内閣ハ此點ニ顧慮シテ第五十三次議會ニ提案スルトコロアリシモ貴族院ノ特別委員會ハ教化政策上之ガ成立ノ急務ナルコトヲ理解セズ曠日彌久終ニ之ヲ審議未了ニ終ラシメタルハ洵ニ千載ノ恨事ト云ハザルベカラズ

寺院境内地下戻法ニ至リテハ維新當初ニ於ケル廢佛棄釋ノ遺孽餘殃タルモノニシテ夙ニ政府モ之ガ匡救ヲ認メ大正六年寺内閣ハ特ニ之ヲ解決スベク聲明シタルニ拘ラズ寺院財産管理法ノ不備ニ藉口シテ竟ニ決裁ニ至ラズ爾來政

六三九

府委員ハ常ニ宗教法ノ制定ヲ待ツテ同時ニ解決スベキ旨數次議會ニ答辯シタル結果若槻内閣ハ宗教法附則トシテ提案シタル爲メ宗教法ト其運命ヲ一ニシタルハ洵ニ遺憾トスルトコロナリ依ツテ五十六次議會ニハ獨立ノ議案トシテ宗教法ト共ニ提案セシメ維新當初ノ不當處分ヨリ無辜ノ寺院ヲ救済シ國民教化ノ本分ヲ完フセシムルコト宗教行政上焦眉ノ急務タルコトヲ信シ本決議案ヲ提出スル所以ナリ

御大典記念全國佛教徒大會

九 京都神道各教聯合大會

京都府下神道各教聯合會大典記念大會は代表者五百餘名會合し、十月十七日午前十時より市岡崎公會堂に於て開催したり。

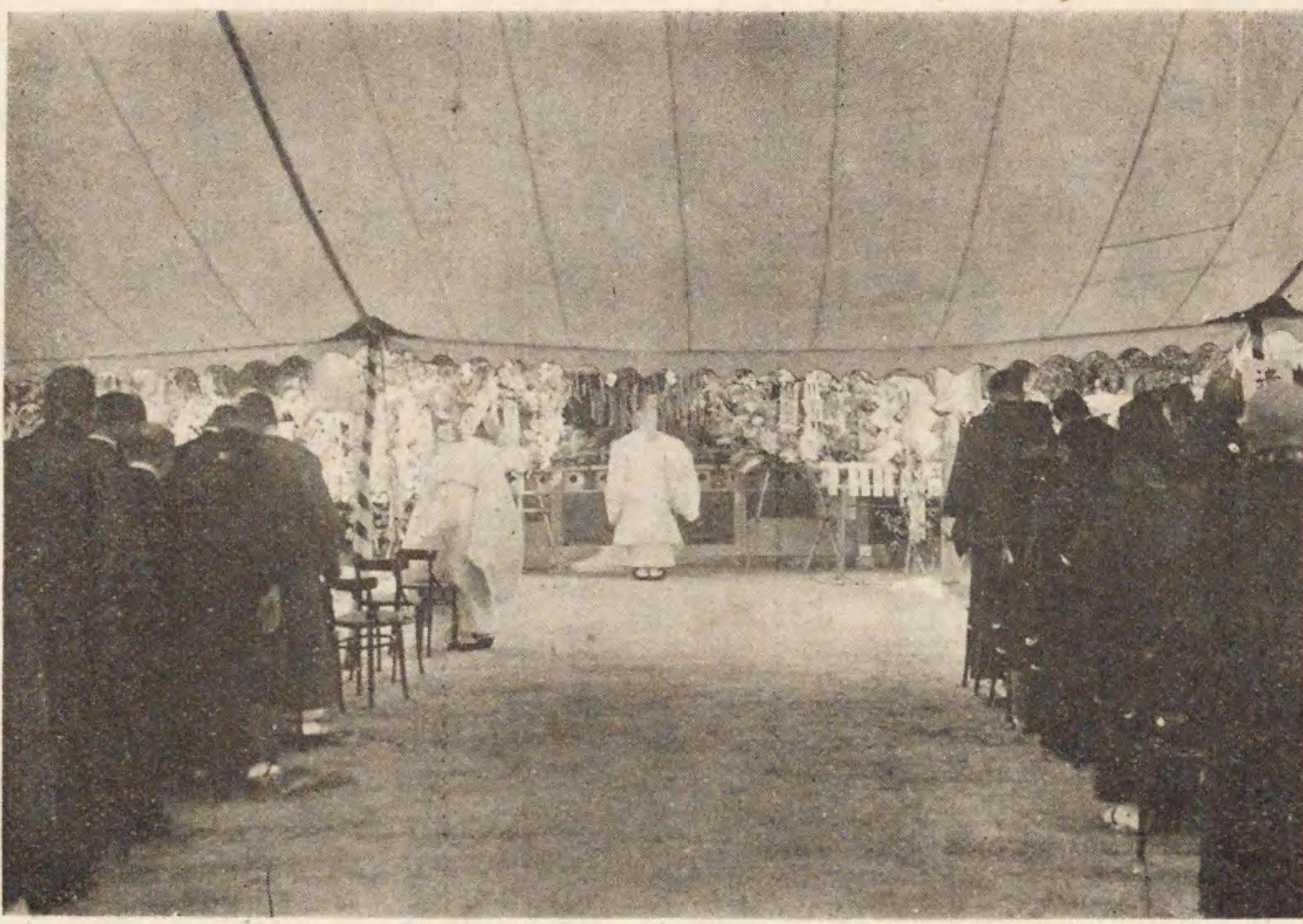
各教名 天理、金光、黒住、御嶽、大社、神習、扶桑、大成、

實行、神道局、修成、神理、

當日は、勝田文部大臣、安藤文部省參與官、大海原知事、土岐市長等各代理來賓の祝詞あり、次の宣言決議をなし、午後は青柳榮司博士加藤玄智博士の講演ありたり。

宣 言

瑞光天地ニ充滿シ歡呼四海ヲ振動スルノ時畏クモ 聖上陛下曠古ノ大典ヲ行ハセラレ尊嚴無比ノ國光ヲ六治ニ輝カシ至大無限ノ惠澤ヲ億兆ニ均霑セシメ特ニ優渥ナル大詔ヲ下シ教化ノ醇厚國運ノ隆昌ヲ進メン事ヲ宜ラセ給ヘリ 聖旨宏遠誰カ感激セザランヤ茲ニ本會總會ヲ開クニ當リ吾等惟神ノ大道ヲ布教スルノ任ニアルモノ協力一致 聖旨ヲ奉戴シ誓ツテ新政ノ大業ヲ翼賛シ奉ラン事ヲ期ス



土岐京都市長等の祭文あり午後四時閉式したるが、此日維新にゆかり深き山國隊、熊野少年勤王隊の行列奏樂ありてこの祭事に一入の氣分を添へたるも思出づるもの深く、大盛況裡に終了したり。

首相諄辭

三十六峰ノ一角靈山ノ秋恰モ

錦ノ御旗ヲ翻ヘシタラムガ如キノ時、茲ニ維新勤王志士千百有餘名ノ英靈ヲ祭ラルニ逢ヒ俯仰無量ノ感ニ勝ヘズ、今ヤ英靈世ヲ去リテヨリ御宇ニタビ改マリ王政維新以來正ニ六十有一年、既ニ御一代唯一度ノ

第五節 其他各種團體大會

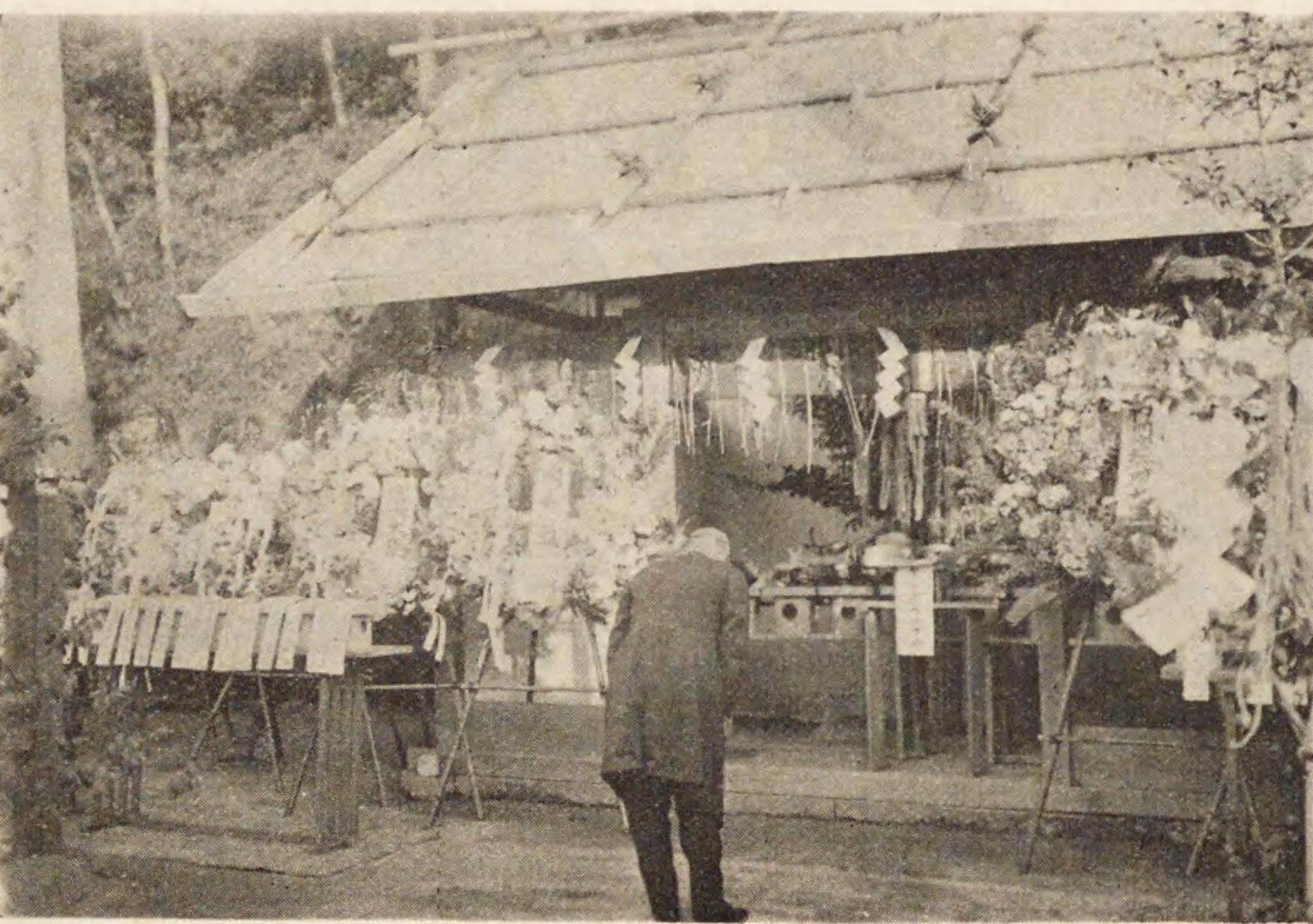
右宣言ス

決 議 案

- 一、本會ハ敬神崇祖忠孝仁義ノ觀念ヲ徹底的普及實行ニ當ル事
- 一、本會ハ會員各自ノ修養ヲ獎勵シ其ノ品位ノ向上ニ精進スル事
- 一、本會ハ神儒佛耶ノ各宗教團體教化團體ト聯絡ヲトリ世界人類ノ福祉ヲ増進セシムル事

一〇 維新志士慰靈祭

名にしあふ本市の東山一帯の地は、昔に風致を以てのみ誇るべきものにあらざりて、歴史の上に京都を讀まば必ず一度は此處に探蹟の心湧出づるなるべし、まして靈山のほごりは近く維新の志士を埋めたる清域にして、現にその一門は、遺族として亡靈の遺志を嗣ける人も尠ならず、されば今次の大禮に際して德音優典の恩命あるや、此秋に當りひいて志士慰靈祭を企つるに至れり。祭られたるは山口藩招魂社の祭神二百二十五柱を始め京都府及び福岡、高知、熊本、鳥取、久留米、各藩の招魂社並に東福寺、大雲院、泉涌寺、山國の各官祭招魂社の祭神其他官修墳墓の神靈等約一千一百に上りたり、殊に畏き邊りよりは祭料として金一封を下賜され、田中總理大臣を始め大海原京都府知事等は、先んじて此舉に賛し、諸般の準備も頗る似はしく整ひて大禮月として印象いさ深き二十五日に祭典を舉げたるなり、秋陽さわやかなる高臺寺畔靈山齋場は清淨に掃き清められて、記念塔前の祭壇を中心し賛助者よりの獻花に埋められ、參拜者ひきも切らず、午後二時始式、來賓としては田中首相代理を始め望月内相、久原遞相外各大



盛儀タル即位ノ禮及大嘗祭ヲ訖ハセラレ、車駕尙山陵親調ノ儀ヲ行ハセラル、ガ爲京都ノ禁關ニ駐マラセタマフ、是ノ時ヲ以テ此ノ明治、大正、昭和ノ三代ニ互レル邦國進運ノ先驅トナリ身ヲ獻ケテ回天ノ皇謨ヲ翼成シ熱血ヲ洛中洛外ノ地ニ濺キタル當年勤王ノ忠烈無比ナリシヲ憶ヒ起シ其ノ意志ノ後繼者タル吾等ノ齊シク此ニ弔テ致シ誠ヲ表スルハ是レ即チ現代盛運ノ淵源ヲ志レス中外ノ至情ヲ傾ケテ深ク先人ノ遺思ヲ感謝スル所以ニ外ナラス願フニ英靈何レモ大禮ノ諸

儀豫定ノ如クニ進行シタルヲ慶シ併セテ今日吾等追懷景慕ノ微誠ヲ露スヲ諒トシ必ズ欣然地下ニ微笑ヲ含ムヘキヲ疑ハス方今 聖天子上ニ在マシ生前志シタル所ハ既ニ其ノ緒ニ就キ現代ノ先代ニ繼ギタル所

亦著々トシテ其ノ歩ノ進ム英靈幸ニ意ヲ安セラレムコトヲ冀フ
瑞祥ハ今全日本ニ滿テリ忠ヲ諷クシ義ヲ勵ムノ精神亦全國土ニ磅礴
タリ是ノ時ヲ以テ此ニ英靈ヲ慰メ英靈ニ謝スルコトヲ得タルハ正ニ時
ノ宜シキヲ得タリト信ズ在天ノ英靈幸ニ彷彿トシテ來テ吾等カ景仰追
慕ニ勝ヘザル此ノ一片ノ至情ヲ饗ケラレムコトヲ望ム

昭和三年十一月二十五日

内閣總理大臣 男 爵 田 中 義 一

十一 都踊ミ鴨川踊

例年春の花時に限りて催せる都踊並に鴨川踊は、この年に限り大禮
奉祝の爲め、大禮月を期して臨時開演することとなり、都踊は十一
月四日より十二月十日に亘りて「奉壽萬歳樂」三名題せる八場面を演じ
就中第四の「瑞穂の國振」は悠紀、主基兩齋田を模したる早乙女風俗の
踊子八人にて仕組めるものにして、郷土趣味豊かなる所を見せ、鴨川
踊は同上の意味にて十一月六日より十二月六日迄一ヶ月間開演し、全
部七場面、内長唄五面、常盤津地二場面にして尙外、船唄、田植音頭
等を呼物として華かなる氣分を漂はせたり、歌詞及順序次の如し。

十一 武徳會奉祝演武會

大日本武徳會の大禮奉祝演武大會は十一月十二三の兩日岡崎武徳殿
にて舉行せり十二日の第一日は午前八時御眞影奉戴式に續いて演武を
開始し同十時には總裁久邇宮邦彦王殿下の台臨あり、今回新に京城に
設置せし朝鮮本部のために特に 令旨を賜ひ、武徳旗の親授式あり、
朝鮮本部副總長たる、學務局長李軫鎬之を拜受し、式後 殿下の御前
において劍道、鎗術、居合術、薙刀術等の型を行ひたり、中にも眞心

鴨川をどり

御大典記念 代々のみやこ



(山振袖門狭中) 踊 川 鴨

考案作歌	中内蝶二	長唄	杵屋 寒玉
常盤津	常盤津 文字八	振付	若柳 吉藏
若柳 吉藏	若柳 吉喜美	鳴物	若柳 吉郎
杵屋 朴清	杵屋 喜惣次	背景	野村 芳光
野淵 音吉	野淵 音吉	大道具	松本 熊次郎
茶儀科	中江 宗絹		

(一) 曠のみのり

大君の 御代の始めの 大御典 今日を生日の 足る日さて 登らせたまふ
高御座 天津日嗣の 御榮を 仰ぎかなで、 畏くも 代々の都の
名蹟を 舞の手ぶりに うつつ身の曠

(二) 難波の朝けぶり

難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今春春べこ 咲く花の ほまれ高津
の高き屋に 登りて見れば けぶり立つ 民のかまごの 賑ひを 詠ま
せたまへる 宮ごころ 難波の春は 夢ならで 花は實さなる 梅が香の
世に芳はしき 君が御仁徳

(三) 鶏の海の宵月

船 唄 志賀の唐崎 松から暮て 歸る帆船が ほのゝと
田植音頭 近江田ごころ よい米ごころ 娘やりたや 御田植に ヨイ

稻の出穂より まだそなた ヨイ〜 ヨイ〜 ヨイヤサ
歌へ早乙女 御田植唄を 雲の上まで 届くよに ヨイ

(四) 袖振山の天津乙女

笛吹いたもれ ビーヒヤリ オーヒヤリホ 笛吹いたもれ ビーヒヤ
リ オーヒヤリホ 吹いたる笛は なに〜 横笛高麗笛 神樂笛 むか
しは柴笛 石の笛 抑も笛竹の 濼艦は 天の岩戸の 神樂舞 銅女命
が わさをきに 香久山竹の 節を抜き 孔を穿ちて ビーヒヤリ オー

第五節 其他各種團體大會

(五) 櫃原の秋色

日本の 國の肇創の 礎さ 太しく建てる 櫃原の 宮居久しき 瑞
籬に 數の幣帛 掛まくも あやに畏き すめらぎの 神に薦むる 捧物
畝傍の山の 裾かけて 千草の花の 染模様 秋の紅 紫の 桔
梗刈萱 女郎花 色ある花を 露ながら 折りてかざらん 家土産に
鼓 歌 我が君は 千代に八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむ
すまで

(六) 代々木の雪曙

代々木の森の 雪晴は 清々しくも 尊けれ 襟を正して をろがめば
心も澄みぬ おのづから 空に遮る 雲もなく 朝日に映えて くつき
りさ 書くば雪の 富士額 曙染の 目もあやに

(七) 華洛の賑ひ

華洛は秋の 錦織る 紅葉まばゆき 打扮榮え けふ九重に 咲き匂ふ
黄菊白菊 かざしの花よ 對の繪日傘 その花傘を さす手引手も
たなやかに 委優しき さりなりは 名に洗れたる 鴨川や 盡きせぬ
御代さぞ 祝ひ納めて

御大禮奉祝都踊

奉壽萬歲樂

作者 猪熊淺磨 舞曲顧問 井上春子
鳴物 吉田琴子 作曲 稀音家 六四郎



(興餘りごお都) 踊 植 田 御

第一 冷 き 歡

神風の届く地球の隅々までも、わけて都は明らかく治る年のいつ、めは、いよむつまじく七重八重、けふ九重に咲く花の、彌生を開く初めに、十重はたへとも群れ競ふ、名にし八坂のまが玉揃へ、色うるはしき朝霞、あつき情に薄化粧、何のかほらん瓦はいやよ、たまのお出の異邦人に、光り輝く初日の出、見せて素顔のすんがりしやんさ、うたひはじめて舞をめし、踊はこゝに六十度あまり、また一度を重ねきて、めでたき秋を祝ふうれしさ

第二 賀 茂 の 納 涼

賀茂の神山かよひきて、流れき清き風そよぐ、檐の小川の夕まぐれ、ひるの暑さもほらひやる、みそぎぞ夏のすしさに、白酒黒酒のみきかもす、豊けき秋のこゝちして

鼓 歌

御大禮尊み奉りまこしへに

みさかえませさいほさまつらく

第三 黄 金 の 花 鬘 斗

黄金白金きら／＼と、あけに縁にいろへたる、蒔繪襖繪り／＼に、見

露や長き夜の、ふけゆくまゝに光そふらむ

第六 高 雄 の 紅 葉

山萬歳をよばふなる、その三絶の鐘の名も紅葉と共に世にひびく、高雄の寺の二王門、神護國祚の筆の跡、あふきて登る右左、秋のにしきの峯つゞき、清たき川もくれなゐの、玉をくだきてながららむ

第七 智 恩 院 三 門 の 雲

紫の雲山のはに、ほの／＼にはふ明六つの、花さく華のいたゞきに、そゝるあるきのさゝめごと、またのおふせを松風に、ふきさそはれてちら／＼と、さけてうれしき雲の雲。

第八 嵐 山 の 櫻

松を櫻をこきまて、春の錦の嵐山、藍地の綾にさゝ波の、繡取したる大堰川、景色さゝのふ山水に、のどけき日かげさしそひて、今を見頃の花ざかり見れさあかぬながめかや

散 し

龍頭頭首の舟装ひ、詩歌管絃の遊びせし、面影うかぶ川の瀬を、下す後には花ふゞき。

臺 拍 子

都名所のかす／＼を、めぐりて立ちかへる、ささばやさかのいやさかえ、みさかえませせ大御代を祝ひまつりて舞ひなむ祝ひまつりて舞ひなむ

るめまばゆき大廣間、雲わにあふぐ風風の、おりて遊びし桐の大樹、今もゆかりの色に咲く、花のさかりぞうるはしき、管絃の調鉦鼓の響、左方右方の手ぶりもあやに、つがひて舞ふや關陵王納曾利、こゝにもつきぬたのしみをあつめあつめてうたひあそびむ

第四 瑞 穂 の 國 振

龜の御下にあふみの國は、昔からなる悠紀の國、二度と再び得がたい譽御代の始の御田植、今日でさう／＼御田植なはりや、はやも早苗に千代の色「早良脇山主基齋田の、稻は昭代玉の苗、流れうつくし椎原の川に、心清めて御田植、植うる手先にま心こめて、祝ふ君が代千代八千代」御稜威かゞやく雲わにあふぐ、天つ日嗣の高御座祝へ祝はむ御大典、御代は萬歳萬々歳
悠紀の膳屋稻春歌を、うたふ聲さへ神さびて祝へ祝はむ御大典、御代は萬歳萬々歳
梅さ竹さの枝なばかさし、松の千年のかけあふぐ祝へ祝はむ御大典、御代は萬歳萬々歳

第五 廣 澤 の 月

都の空をのがれきて、池の心も廣澤の、水面にすめる秋の月、くまなき影にあくがれて、千代の古道あささへば寮の御馬に鞭ざりし、昔をかたるくつわむし、中の尾山の松風は、箒のしらべにかよふなり、嵯峨野の

影流輝刀型には山内侯禎子夫人の出場あり、砲術型には廣島の倉橋誠太範士は、八十四歳の老軀を物こもせず、甲冑姿にて柳山流の砲術型を見せ、居合流には、大阪の秋山多吉郎翁が之も八十四歳の高齢者に似ず熟練なる型を見せて往時の武士道を想起せしむる所ありたり、尙兩日を通じて出場の範士教師は合して二百四十九名にして來賓には二荒伯爵、小笠原子爵、松村男爵、古市樞密顧問官、上原元帥、鈴木參謀總長、一戸、武藤、町内、宇垣各大將を始め各師團長、貴衆兩院議員等、滿殿立錫の餘地なき盛況を呈し、十三日午後六時閉會したり

本市補助費

大禮奉祝ノ爲當地ニ於テ催サル各種奉祝事業ヲ協賛スル意味ニ於テ左記補助金ヲ交付シタリ。

補助一覽

補助申請者及代表者名	事業ノ内容	交付額
京都市聯合青年團長 土岐 嘉平	警備隊編成ニ付隊旗等作成	一、六〇〇
京都市府町村長會長 中野 種一 郎	全國町村長大會開催	一、五〇〇
平安神宮々々司 當山 亮 道	大禮ニ際シ境内外修繕	一、五〇〇
東京統計協會々々長 男爵 阪谷 芳 郎	全國統計大會開催	二、〇〇〇
全國教育大會々々長 荒木 寅三 郎	全國教育大會開催	三、五〇〇
京都傷痍軍人會代表者 坪 郷 芳 一	廢兵團入洛ニ際シ援助	一、〇〇〇(記念品ヲ以テ交付)
平安神宮々々司 當山 亮 道	祭禮延期ニツキ補助申請	一、〇〇〇
京都市聯合青年團長 土岐 嘉平	全國青年團大會開催	二、〇〇〇

第八章 感謝祭竝に謝狀

第一節 感謝祭

本市は曩に祈禱祭を舉行して神明の加護を念願する所ありしが、愈々大禮奉祝の事務も滞なく結了を告ぐるに至りしを以て東京へ御還幸あらせ給ひし後更に次の如く感謝祭を行ひたり。

期日 十一月二十九日午前十時

場所 平安神宮

方法

式次第

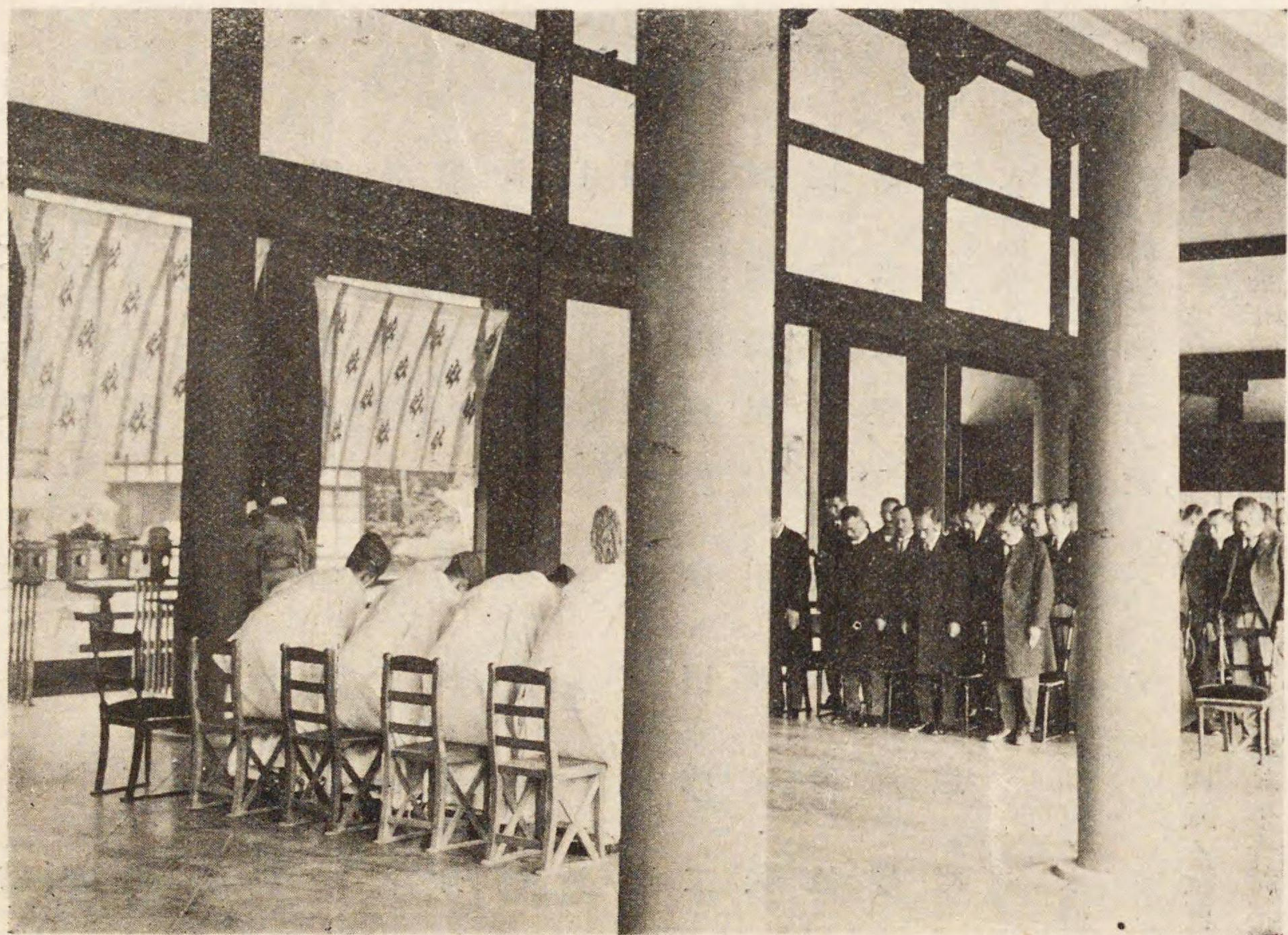
大極殿所定の席に着く

- 次に 修 禱
- 次に 獻饌 奏樂
- 次に 祝詞 宮司
- 次に 玉串 宮司 拜禮
- 次に 玉串 市長 拜禮
- 次に 玉串 其他 拜禮
- 次に 參列者拜禮
- 次に 撤饌 奏樂
- 各退下
- 通知 狀

本市大禮奉祝事務恙ナク遂行ニツキ來ル十一月二十九日午前九時三

第一節 感謝祭

全國圖書館協會理事 山 脇 房 子	全國女子青年團大會開催	六〇〇
全國融和團體聯合大會々々長 平沼 一 郎	全國圖書館關係者大會開催	三〇〇
全國消防組大會京都府代議員 安村 長 造	全國融和事業團體聯合大會	八〇〇
全國佛教大會々々長 西 良 慶	全國消防組大會後援	三〇〇
	全國佛教大會開催補助	一、五〇〇



感謝祭

- 同 金 田 才 平
- 同 酒 卷 芳 男
- 同 大 金 益 次 郎
- 同 池 田 秀 吉
- 三 公同衛生關係者に對する謝狀

其の二

謹啓愈々御清祥奉賀候、陳者御大禮ノ諸儀モ滞ナク終了相成御同慶至極ニ奉存候、御大禮御舉行地タルノ光榮ヲ擔ヘル本市トシテハ市民感激ノ至情ヲ披瀝スベキ諸般ノ施設、奉祝ノ事業幸ニ計畫首尾ヲ全フシ慶祝ノ至リニ不堪候是全ク貴下御盡瘁ノ成果ニ依ルコト不尠深ク感謝罷在候、茲ニ大禮奉祝事務ノ終了ニ當リ不取敢以書中御厚禮申述度如斯ニ御座候

昭和三年十二月十日

敬具

京都市長 土 岐 嘉 平

宛 名

公同正副幹事

三三九人

同 組 長

二、二三九人

計

二、五七八人

其の二

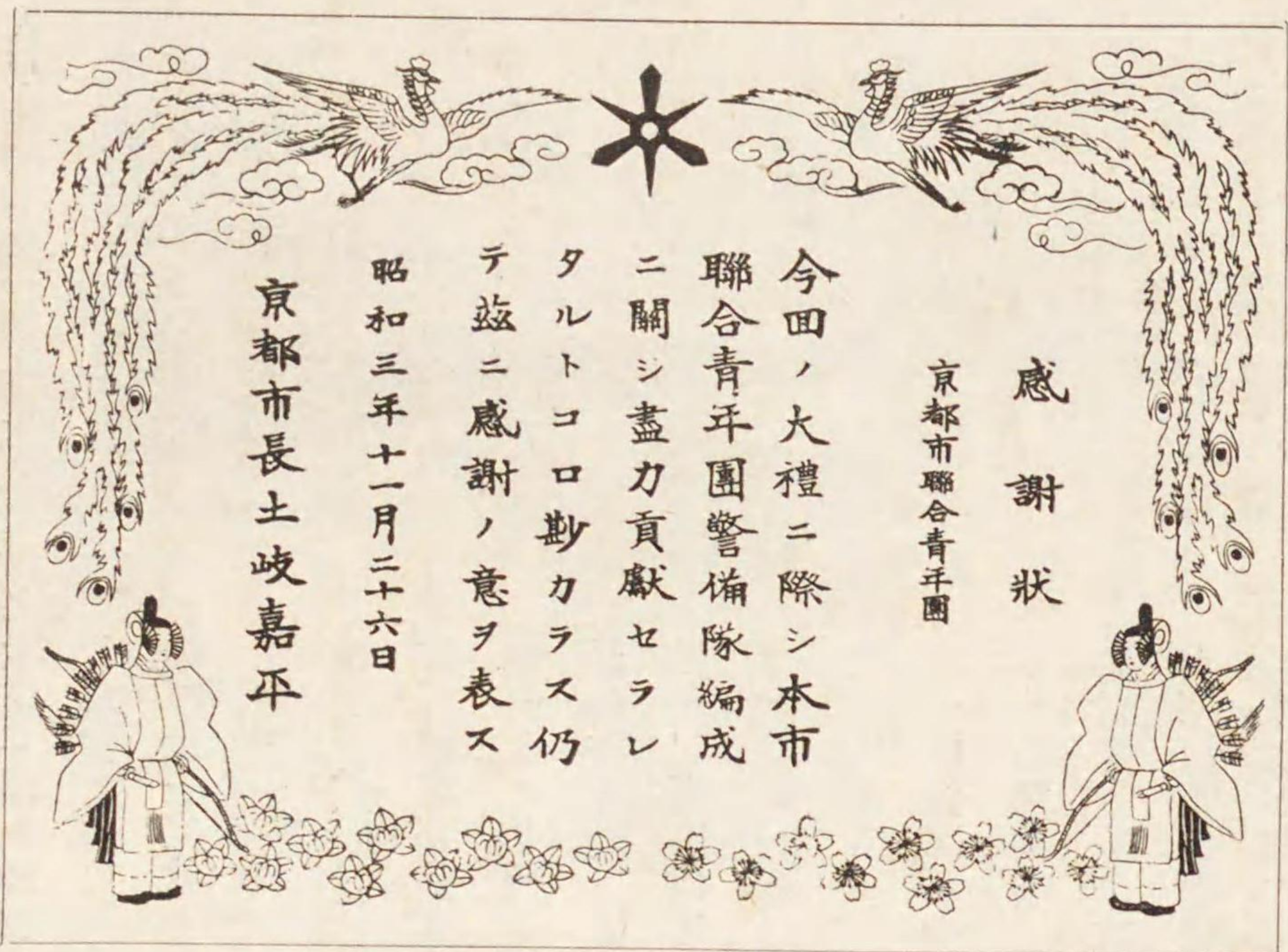
謹啓愈々御清祥奉賀候陳者御大禮ノ諸儀モ滞ナク終了相成御同慶至極ニ奉存候、御大禮舉行地タルノ光榮ヲ擔ヘル本市トシテハ市民感激ノ至情ヲ以テ昨冬以來或ハ檢病、井水調査ニ或ハ豫防其他各種ノ防疫施設ニ所期ノ成果ヲ舉ゲ慶祝ノ至ニ不堪是全ク貴下御盡瘁ノ結果ニ依

滞相濟ミ候ニ關シ御懇篤ナル御祝詞ヲ賜ハリ御厚志忝ク萬謝奉リ候畢

竟御同情アル皆々様御高庇ノ資ト感佩之至リニ御座候不取敢右御挨拶

迄如斯御座候

敬具



昭和三年十一月 日

京都市長 土 岐 嘉 平

宛 名

五 本市聯合青年團警備隊員に贈りたる感謝狀

第二節 禮狀並記念品

ルコト不尠深ク感謝罷在候茲ニ大禮奉祝事務ノ終了ニ當リ不取敢以書中御厚禮申述度如斯御座候

昭和三年十二月十日

敬具

京都市長 土 岐 嘉 平

衛生正副幹事

一五一人

同 組 長

八七五人

計

一、〇二六人

四 大禮奉祝事務終了に付祝電を寄せられたる

左記諸氏に對し次の禮狀を差出したリ

電文及氏名

滞ナク大任ヲ果サレ慶賀ニ堪ヘズ

侯 爵

大 久 保 利 武

恙ナク大任ヲ遂ゲラレ大慶ニ存ズ茲ニ祝意ヲ表ス

秋 本 春 朝

滞ナク大任ヲ全ウセラレ慶賀ニ堪ヘズ謹ミテ祝詞ヲ呈ス

粕 谷 義 三

無事大任ヲ終了セラレ慶賀ノ至リニ堪ヘズ謹ミテ祝申上ゲ

大阪府知事 力 石 雄 一 郎

無事御大任ヲ果サレタル段謹ンデオ歡ビ申上ゲ

大連警務署 大 津 瀧 藏

禮 狀 文

拜啓愈々御清寧ニ被爲渡奉慶賀候陳者大禮奉祝ノ本市諸行事幸ニ無

感謝狀

京都市聯合青年團

今回ノ大禮ニ際シ本市聯合青年團警備隊編成ニ關シ盡力貢獻セラレタルトコロ抄カラズ仍テ茲ニ感謝ノ意ヲ表ス

昭和三年十一月二十六日

京都市長 土 岐 嘉 平

六 其の他感謝狀を贈呈せるもの

宛名及び理由

一、本市大禮事務に關シ特に援助を受けし聖護院郵便局長宛

二、本市參列員招待園遊會に出銜せられし祇園山鉦、町總代宛

三、貴賓室菊花出陳に關シ盡されたる宇治町山本榮治郎宛

七 贈 呈 品

(一)宮内省關係者

品目 吳服——京洛八景——京都名勝誌——人形等の中二種若くは

三種

宛名 前記謝狀を贈りし諸氏二十名へ

(二)本市關係者

品目 漆溜塗、亂れ箱一個宛

宛名 市會議員、市有功者、市篤志者、罹災填補基金委員、市政記

者、公同正副幹事、衛生正副幹事、學區學務委員、學區會正

副議長、學區在郷軍人分會長、學區青年團長、消防組頭、市

立學校長、學區青年團關係者、奉祝事務局委員

計 一、一三四名

六五二

餘 録

一 御式場跡拜觀

大禮御式場跡即ち紫宸殿、大嘗宮竝に大饗宴場御跡は當日鋪設され

し其儘を以て、大禮御直後昭和三年十二月一日より翌四年三月三十一日(十二月二十九

日より、一月三日までは停止)迄拜觀を差許されたり、蓋し

尊嚴なる禁裡を一般臣民に拜觀差許さるゝは大御心の程ぞ

畏く、國民教化の上に多大の感激を與へ給ひしは嗚々を要

せざる所なり、拜觀御差許の報一度傳はるや國民の歡は譬

へんに物なく、早くも十月初旬に入りては大阪、名古屋、

東京、門司等の各驛に於て受付けたる御大典後の拜觀申込

者は、團體だけにて既に六十



(一の其) 況 狀 の 觀 拜 跡 場 式 御

三萬餘人に及びし狀況にて、許可の第一日たる十二月一日より御所の内外に集る拜觀人は日々雲霞の如く、雨雪激しき日も厭はず毎日三萬

人を下らず、多きは十萬以上に達したり。

斯く今次の大禮に際し、親しく御式場跡を拜觀して森嚴なる御盛儀の當時を欣仰し奉らんとするは之れ臣子の至情にして、皇室尊崇の發

露に外ならざるなり、然るに拜觀期間の多くは恰も嚴冬の候に

接し、老幼婦女の遠國より來る拜觀者としては不便尠ならず

茲に於て、京都商工會議所は府市當局と協議し、更に拜觀期日

を陽春四月末日まで延期されんことを請願し、幸に延期さるゝに至れり。

拜觀時間は午前九時より午後三時までとし、又學校生徒、在

郷軍人、赤十字社員、青年團員、婦人會員等の各團體は特別拜觀

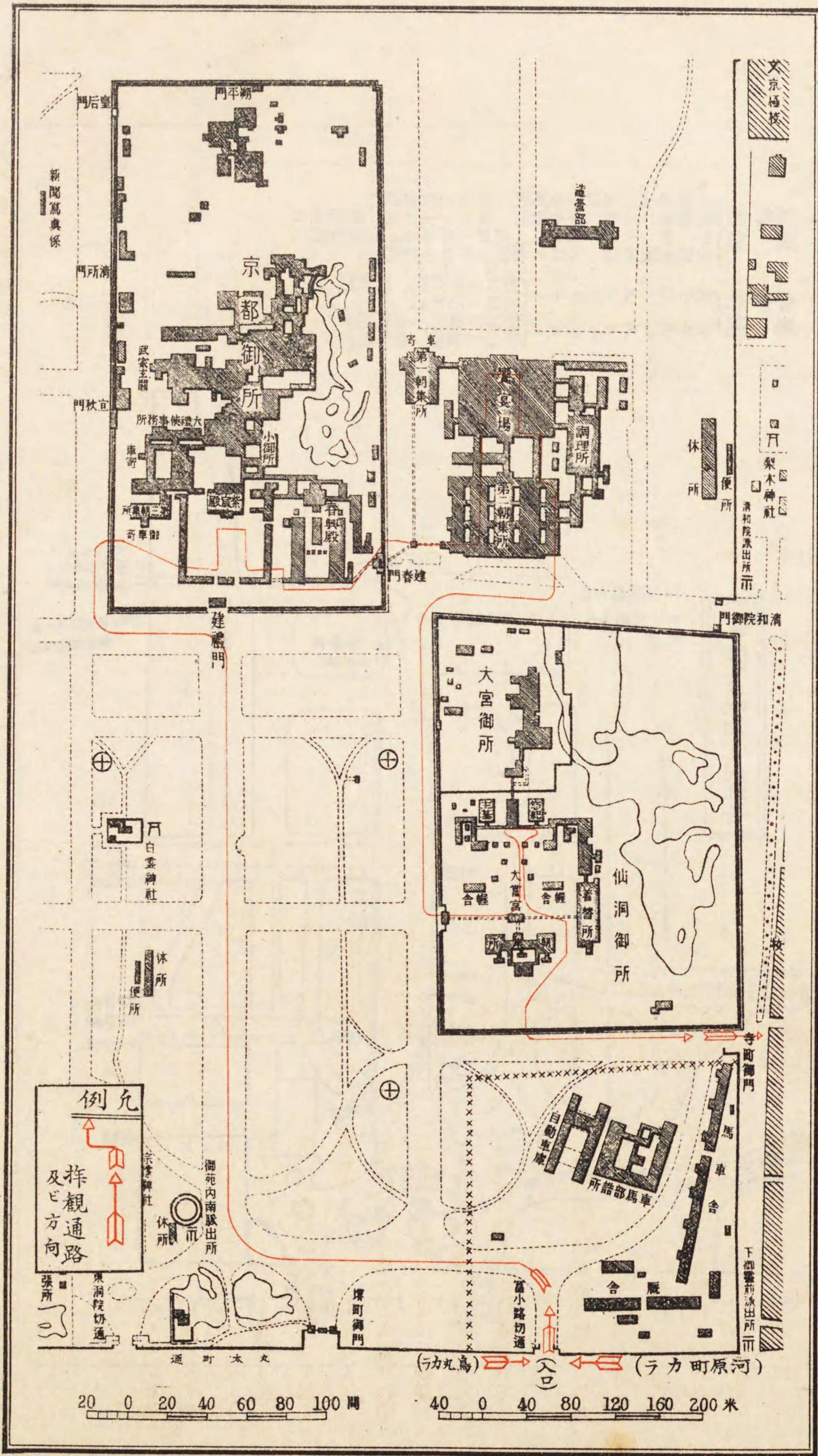
者として取扱はれ、毎日午前八時より同九時迄、午後三時より

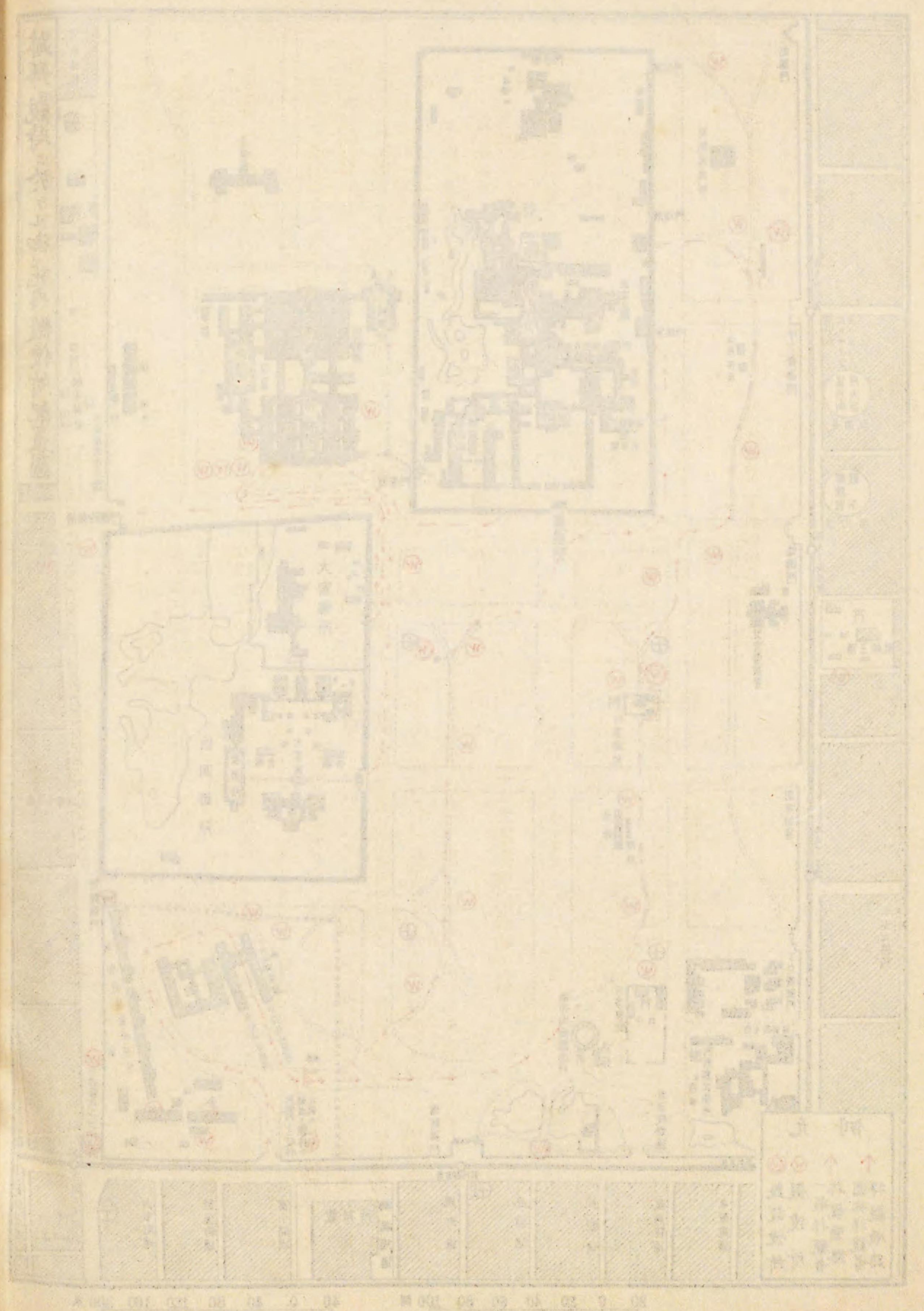
四時迄各一時間宛を許されたり。然しこは十二月下旬に至りて廢止せられ、一般拜觀時間と同様午前八時より午後四時迄變更せられたり。



(二の其) 上 同

御式場跡拜觀順路圖





拜觀者數は、十二月一日より四月三十日に至る總計五百三十三萬九千三百二十三人に達し、其内最も多きは四月二十八日の日曜日にして十三萬八千六百四十七名に及び四月中の拜觀者數は、百四十七萬七千七百七十九名即ち全數の約三分の一を占むるの狀況なりしといふ。

本市は夙に今次の大禮を期し、一般入浴者の爲めに、前記の如く三ヶ所に互れる案内所を設けて諸般の便宜を圖る所ありしが、十二月以後も御式場跡拜觀者の爲引續き其施設を弛めず、次の如き取扱をなしたり。

一、京都驛前案内所及無料休憩所

京都驛前左手に設備したる案内所に接續して約百坪の天幕張無料休憩所を設け、之に事務事務員及使丁を置き、五十臺の床机を並べて休憩者には湯茶を供したり。

二、二條驛前無料休憩所

二條驛前にも約五十坪の天幕張無料休憩所を設け事務事務員及び使丁を配し、湯茶の供給をなす等前同様とせり。

三、御苑内無料休憩所

大禮を訖らせ給ひし後は、特に宮内省へ出願交渉の上、第二朝集所を借り受けて此處にも無料休憩所を設け、以て一般拜觀者の便を圖るの計畫を立て許可を受けたり、而して御門鑑下附を受けたる事務事務員及使丁、掃除人等詰切りて接待に努め、一般拜觀者の爲めに盡す所ありたり。

尙以上の外各休憩所にては、更に入浴者の爲、宿舍の紹介並に市内外地理の説明に當り、殊に案内所と密接の連鎖をこりて多大

の便宜を與へたりしは恰好の施設事業にして、遠きより來れる入浴者は、本市の懇切なる取扱に對し感謝の意を表したり。

拜觀順序

拜觀者は、入口にて行列を整へたる上御苑内建禮門前に進み、それより西へ廻り宜秋門南方の掖門より參入す、而して新御車寄前を東へ月華門より紫宸殿の内庭に入り、南庭にて即位禮當日の御模様そのまゝの鋪設を拜し、日華門左掖門より春興殿の南門前を過ぎ、此所より賢所大前の儀竝に御神樂の儀をしのびまつりつ建春門北の掖門より大饗宴場に入る順序なり、饗宴場にては御間内より玉座の前に至り、舞樂場の東側を通りて朝集所の廊下より外部に出づ。次は仙洞御所正門より大嘗宮に到り、悠紀、主基兩殿も詳細に拜觀して同御所南築地門より御苑内に出で、更に寺町御門より退出したり。

二 大禮御用御建物下賜

大禮用として建設せられたる各種の御建物は大小數十棟にして、建坪も亦總計數千坪に達したりしが、之れが處分につきましては昭和四年一月十二日勅令を以て宮内省に讓與の義を裁可せられ、宮内省に於ては大正大禮の例により民間公同團體へ下賜さるべき趣旨の下に其の御下賜を受くべき各種團體の詮衡等一切の處理方を京都府知事に一任されたり。

社會教育關係者

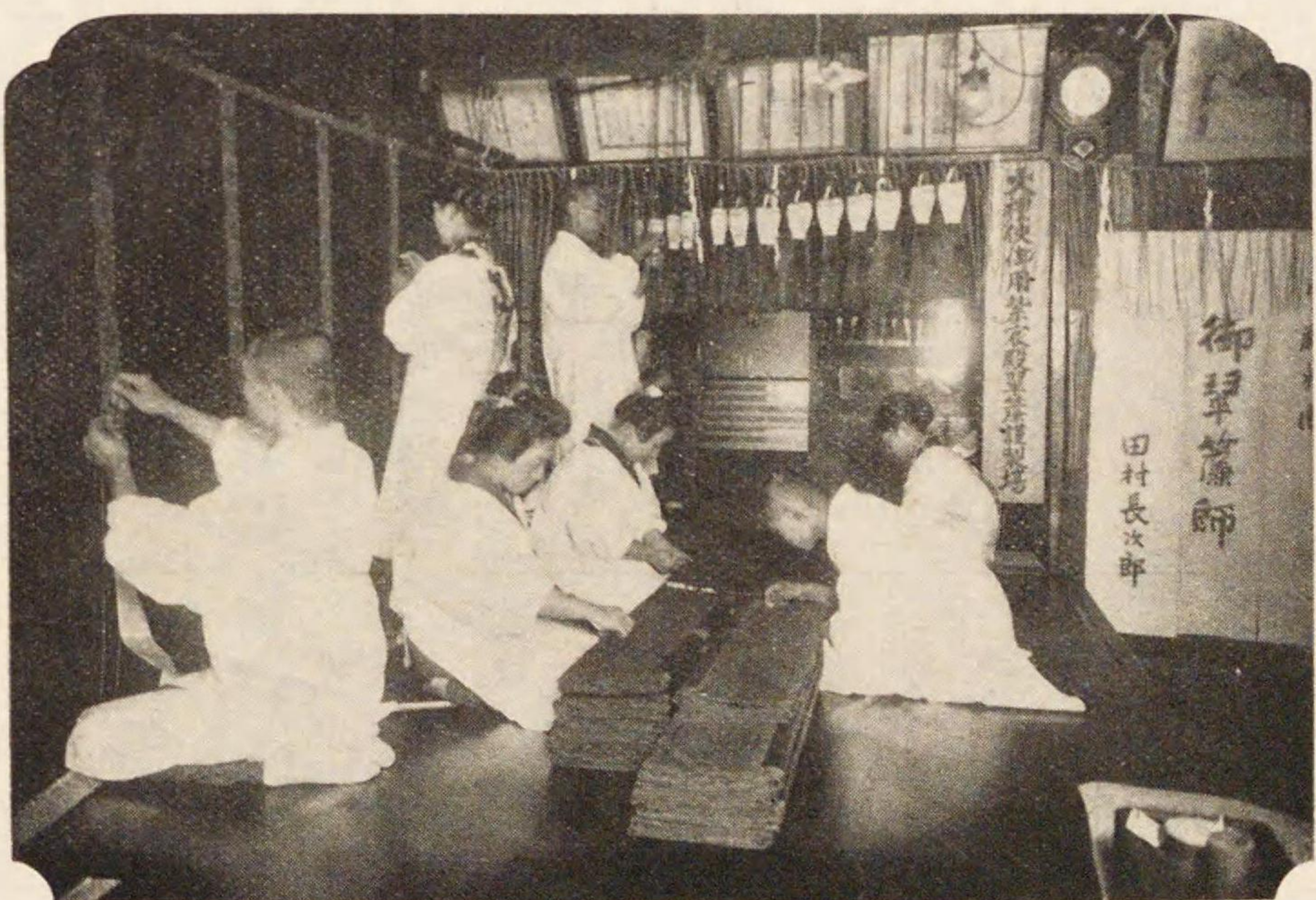
- 京都少年團理事長 中野忠八
- 私立白川學園長 脇田良吉
- 同 酬恩學校長 長國常次郎
- 同 教員 高谷長治郎
- 京都府立圖書館長 北島貞顯

(三)御用命者

本市在住者にして大禮使より直接御用命を受けたる者左の如し。

御用品種別	住所	商號	及氏名
大饗宴御料理	猪熊出水上	萬龜	小西嘉一郎
同	河原町三條下	東洋亭	高橋銀次郎
同	西石垣四條下	矢尾政	淺井安次郎
同	川端四條上	菊水	奥村小次郎
同	四條麩屋町東	萬養軒	伊谷市郎兵衛
同	烏丸出水上		高田茂
御服裂地ノ糊張り	中長者町新町西入		太田善助
奉祝幕ノ旗、萬歳旗	烏丸松原上	高島屋	飯田新七
錦旗、市ノ献上屏風	三條烏丸西		西村總左衛門
日像	東堀川一條上ル		川島甚兵衛
御	四條通堺町角		西河源治郎
裝束、東帶	新町三條上ル		松下季靜
萬歳旗ノ旗、杵、竿	今出川御門内假工場		三上治三郎
竹	三條大橋東入四丁目		森田新太郎
奉祝幕ノ旗	四條高倉		下村正太郎

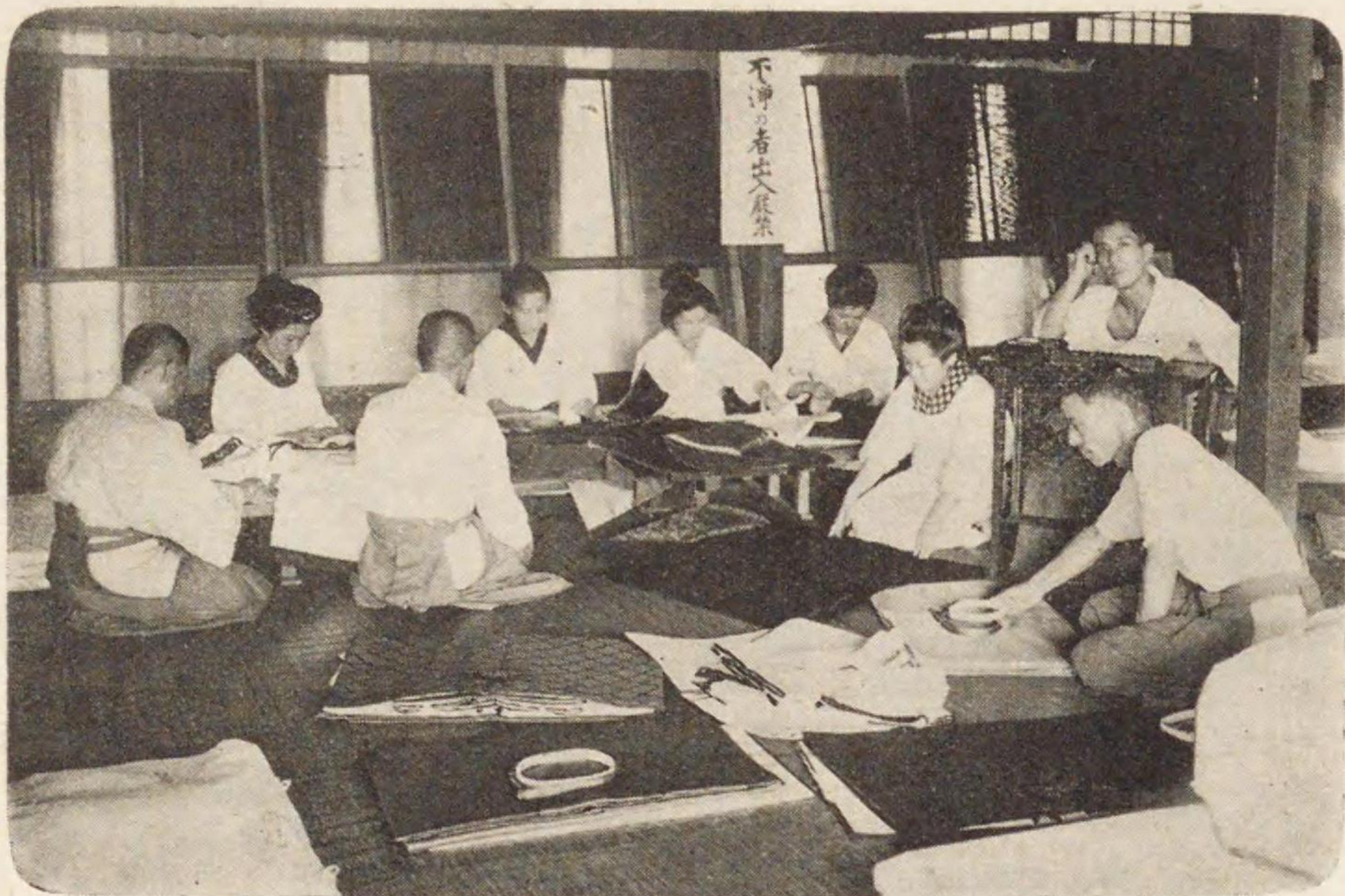
- 御 翳代 簾 四條高倉東立賣仲野町 谷口千之助
- 菊 寺町今出川下西(唐橋子) 京都菊花協會
- 同 菊 下 鴨(植物園内) 京都園藝俱樂部
- 京都菊友會



御用命品の謹製状況

- 同 府献上瑞鳳棚 疏水端二條上ル 象彦 聚樂會
- 同 饗儀用陶器 今熊野南日吉町 淺尾義秀
- 同 折敷 錦小路柳馬場西入 高田庄太郎

- 同 同 箸 四條通高倉東
- 同 白蒸臺 樺木町小川角 市原平兵衛
- 御 大鉦鼓、大修覆 寺町五條上 堀五郎兵衛
- 大鉦鼓、大修覆 寺町佛光寺上 田村長次郎
- 佐竹藤三郎



御用命品の謹製状況

- 裝束類 西陣紋屋町 三上正之助
- 同 東類 小川通丸太町北入 木村新造
- 同 胡蓀 御幸町通萬壽寺上 柴田勘十郎
- 白 陰蓀 下鴨膳部町(農事試驗場)場長 近山廣二

- 悠紀、主基屏風 姉小路東洞院東入 伏原春芳堂
- 紫宸殿用簾 寺町通佛光寺北入 前田平八
- 大鼓、大鉦鼓 寺町通佛光寺上ル 佐竹藤三郎

一、畫家並に工藝家

畏きあたりには今次の大禮を期せられ、京都在住の畫家並に工藝家十二氏に對し其作品中心ゆくもの一點づゝを製作の上献上するやうこの御下命あり、正木東京美術學校長は交渉の御用命を拜し七月十一日入浴の上各作家を訪つれて 聖旨を傳ふる處ありたり、こは全く前例なき思召にしてかく多數の藝術家に對し各その得意とする作品を命ぜられたるは御大典内儀の御祝品として 皇太后陛下を始め奉り皇后陛下御奥宮様は勿論各宮殿下、同妃殿下御幼少の若宮殿下にまで御贈り遊ばさるものゝ如く、一は大禮記念品として、一は美術工藝獎勵の大御心に依るものゝ拜察せらる。

本市に於て其光榮に浴せるもの次の如し。

- 菊池 契月 西山 翠嶂 橋本 關雪 川村 曼舟
 - 上村 松園 木島 梅谷 (以上畫家)
 - 河井寛次郎 清水六兵衛 伊東 陶山 清風 與平
 - 高橋 道八 諏訪 蘇山 (以上工藝家)
- 因に竹内栖鳳、山本春舉兩畫伯は他の御用命に差支へてはきてこの中へは加へ給はず。

二、御染筆の清水焼

御駐紮約二十日の長きにわたらせられ其間、聖上陛下には御大典の儀に御親謁遊ばさる、外政務を齎はせ給ふことなき御多忙にわたらせ給ふも、尙御旅情をお慰め遊ばさる、爲に京都名産の清水焼に御上



御用品の謹製状況

繪を遊ばさる、旨御沙汰あり、主務官に於ては夫れ、詮衡をなせしが、吾本市の名陶工清水六兵衛へ御下命あり、同人は直ちに本焼を謹製すべく準備をなし、御菓子器、一輪挿、お湯呑、皿、茶吞茶碗等各數個づゝ、こ上繪用繪具十種ばかりを整へて奉納せり、かくて御染筆遊ばされたるものは途中破損なきありては、ご厳密な

る注意を加へ、凡ては唐櫃に納めて清水坂の本窯に移し以て謹製にかりしが、東京御還幸前廿四日を以て完成し天覽に供し奉りたり。
(四)饗饌に召されたる者
地方饗饌に召さるべき資格者届出の旨府公報を以て告示せられたる

も、萬一届出洩れ等ありて之が光榮に浴せざる者あるやを慮り、市長に於て尙念の爲め關係方面へ周知方通報するに同時に、元來該届出は各自届出を要する趣旨なりしも、便宜上市役所關係の資格者に對しては秘書課長をして一



御用品の謹製状況

括届出しめ、市會議員につきては市會事務局より届出でたり
今次の地方饗饌に就ては、判任官待遇者にして本俸八拾五圓以上の者は全部饗饌を給はるべきに本市各課長にして直接本市奉祝事務に而も幹部として日夜努力せる者が御召に預からざるは甚だ遺憾なりし其の筋へ賜安方を懇請する處あり

しが漸く前夜に至りて御召狀を頂き一同參列の光榮に浴したり。
地方饗饌は、即位式並に大嘗祭を訖らせ給ひし翌十六日饗宴第一日の儀當日左記の如く行はせられたり。
京都府告示第五百五十六號

地方ニ於テ饗饌ヲ給ハセラル、者ノ範圍、届出、服裝、及場所

一、地方饗饌ニ召サルヘキ者ノ範圍

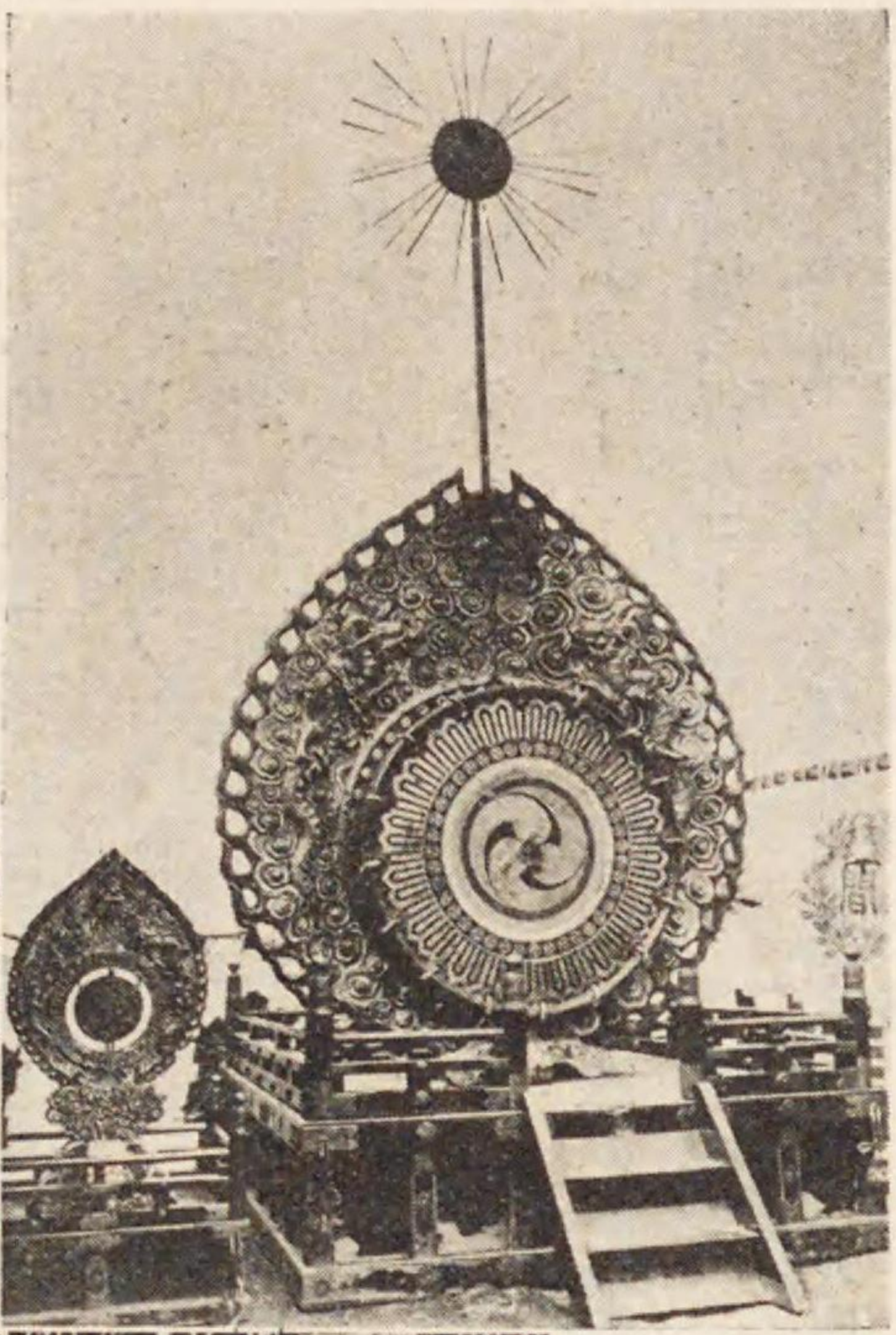
- (一) 高等官同待遇
- (二) 有爵者
- (三) 從六位以上ノ有

(十四) 官公市立小學校ノ長

備考未成年者ハ之ヲ除ク

二、届 出

- (一) 前項各號ノ一ニ該當シ十一月十六日府下ニ現在スベキ者(即位禮及大嘗祭後大饗第一日第二日、夜宴ノ儀ニ召サルベキ者ヲ除ク)ハ其ノ當時ノ宿所、召サルベキ資格、氏名及現住所ヲ記シ知事宛書留郵便ヲ以テ届出ヅルコト但シ



位者

(四) 勳六等、功六級以上

ノ帶動者

(五) 褒章受領者

(六) 神佛各宗派管長

(七) 門跡寺院住職

(八) 京都府會副議長、議員

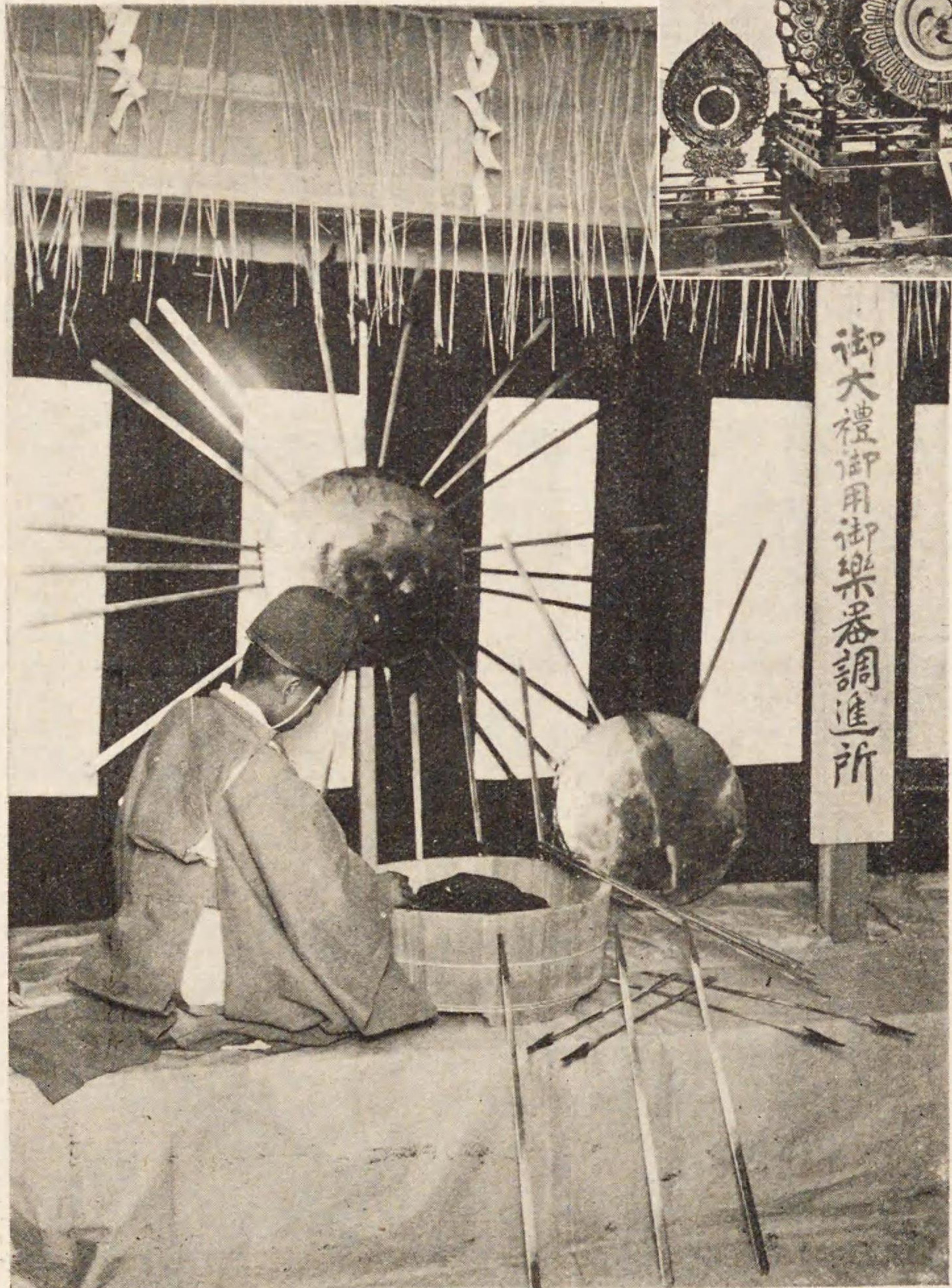
(九) 京都市會議員

(十) 京都市區長

(十一) 町村長

(十二) 在職判任官二等以上、同待遇

(十三) 判任官三等以下ノ警察署長、稅務署長



御用品の謹製状況

- (二) 届出後届出事項ニ異動ヲ生ジタル者又ハ届出期日後新ニ召サルベキ資格ノ生ジタル者ハ直ニ書留郵便ヲ以テ届出ヅルコト
- (三) 二個以上ノ資格ヲ併

有スル者ハ其ノ全部ヲ記載スルコト

(四) 官職ヲ有スル者ハ其ノ官職名ヲモ記載スルコト

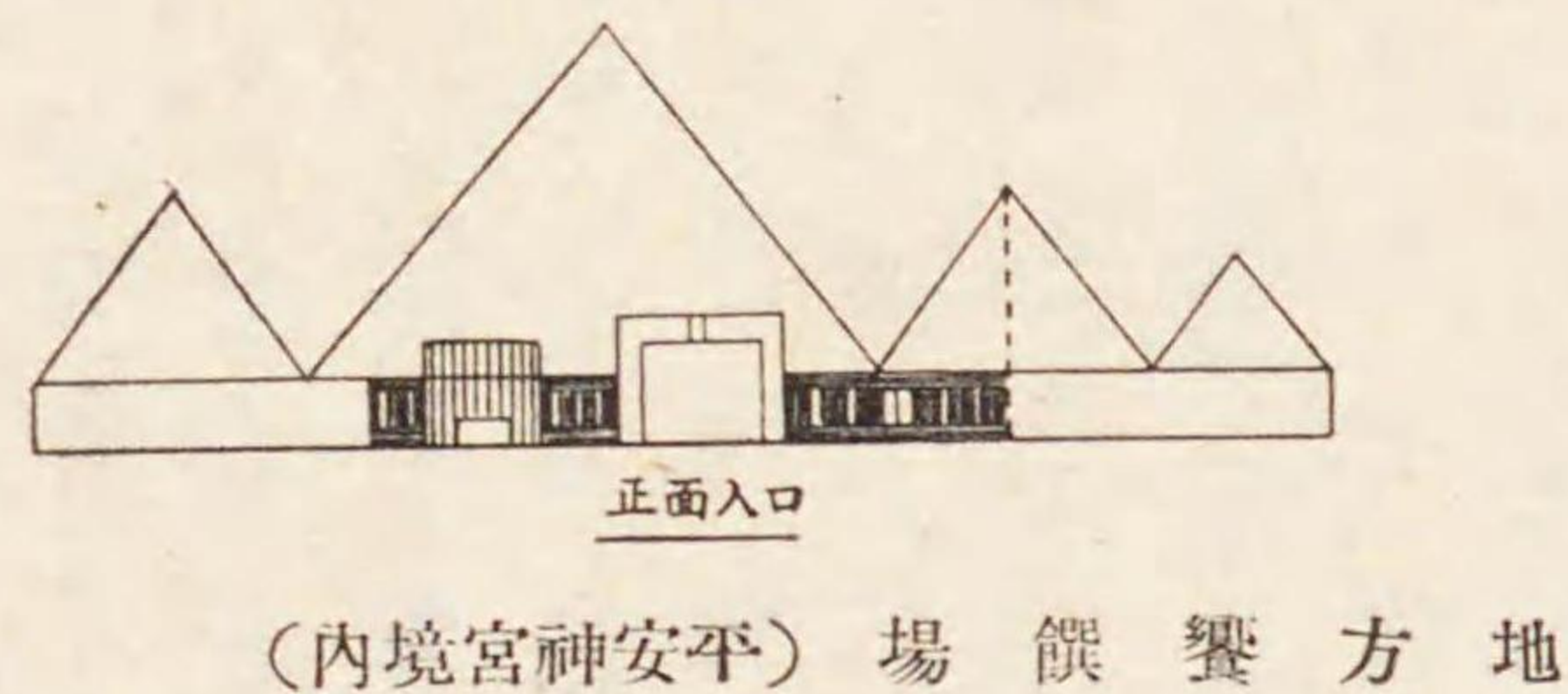
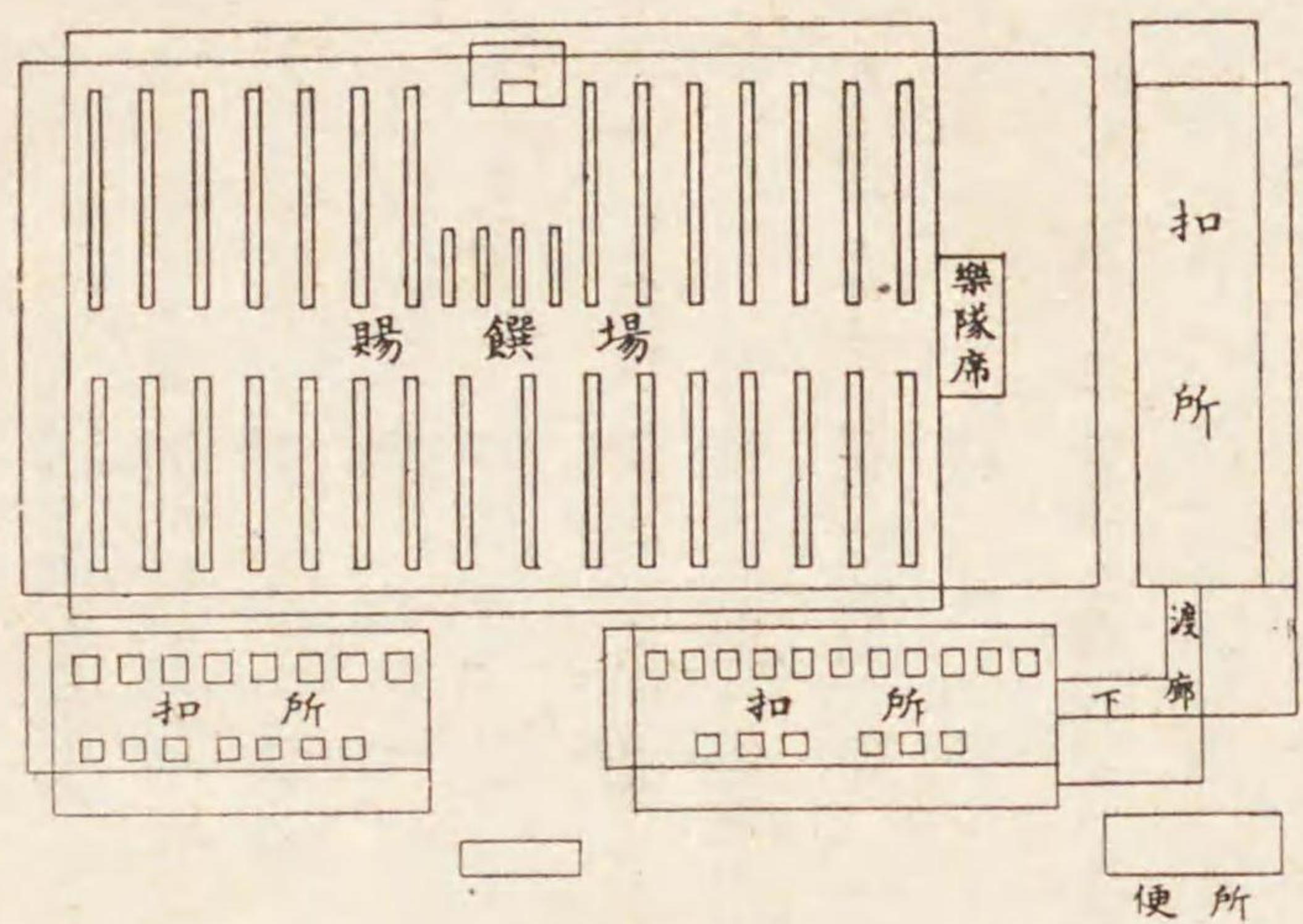
- (五) 判任官待遇ノ者ニシテ官等ノ配當ナキモノハ本俸八拾五圓以上ノ者ハ前項第十二號ニ該當スルモノナルコト
- (六) 前項第五號ニ該當スルモノハ褻章ノ種別ヲ載記スルコト
- (七) 陸海軍軍隊學校艦船ニ在ル者ハ本文ノ届出ニ及バザルコト
- (八) 前項地方饗饌ニ召サルベキ資格ニ該當スル本府在住者ニシテ十一月十六日ニ本府外ニ現在スル者ハ其ノ地ノ地方長官(内地ニ在リテハ道廳長官、府縣知事、朝鮮、臺灣ニ在リテハ總督、關東州、樺太、南洋ニ在リテハ長官)宛宿所、召サルベキ資格、氏名ヲ書留郵便ニテ届出ヅルコトニ定メラレアルヲ以テ注意ノコト(七月二十六日官報大禮使彙報參照)

二、服 裝

- (一) 男子ハ大禮服、正裝、通常禮服(燕尾服、黒高帽)、禮裝、通常服(フロックコート)、通常禮服ノコト
- (二) 女子ハ中禮服(ローブデコレター)通常服(ローブモンタント)、袴袴、白襟紋付ノコト
- (三) 神佛各宗派管長門跡寺院住職ハ前二號ノ服裝ニ相當スル服裝ノコト
- (四) 已ムヲ得ザル事情ノ爲成規ノ服裝ヲ整ヘ難キモノアルトキハ男子ハ「モーニングコート」、紋服並紋付羽織(縫紋ヲ除ク)及袴ヲ着用シ得ルコト
- (五) 教誨師、基督教々師等、禮服ニ相當スル服裝アルモノハ其ノ服裝ヲ以テ代用シ得ルコト

四、場 所

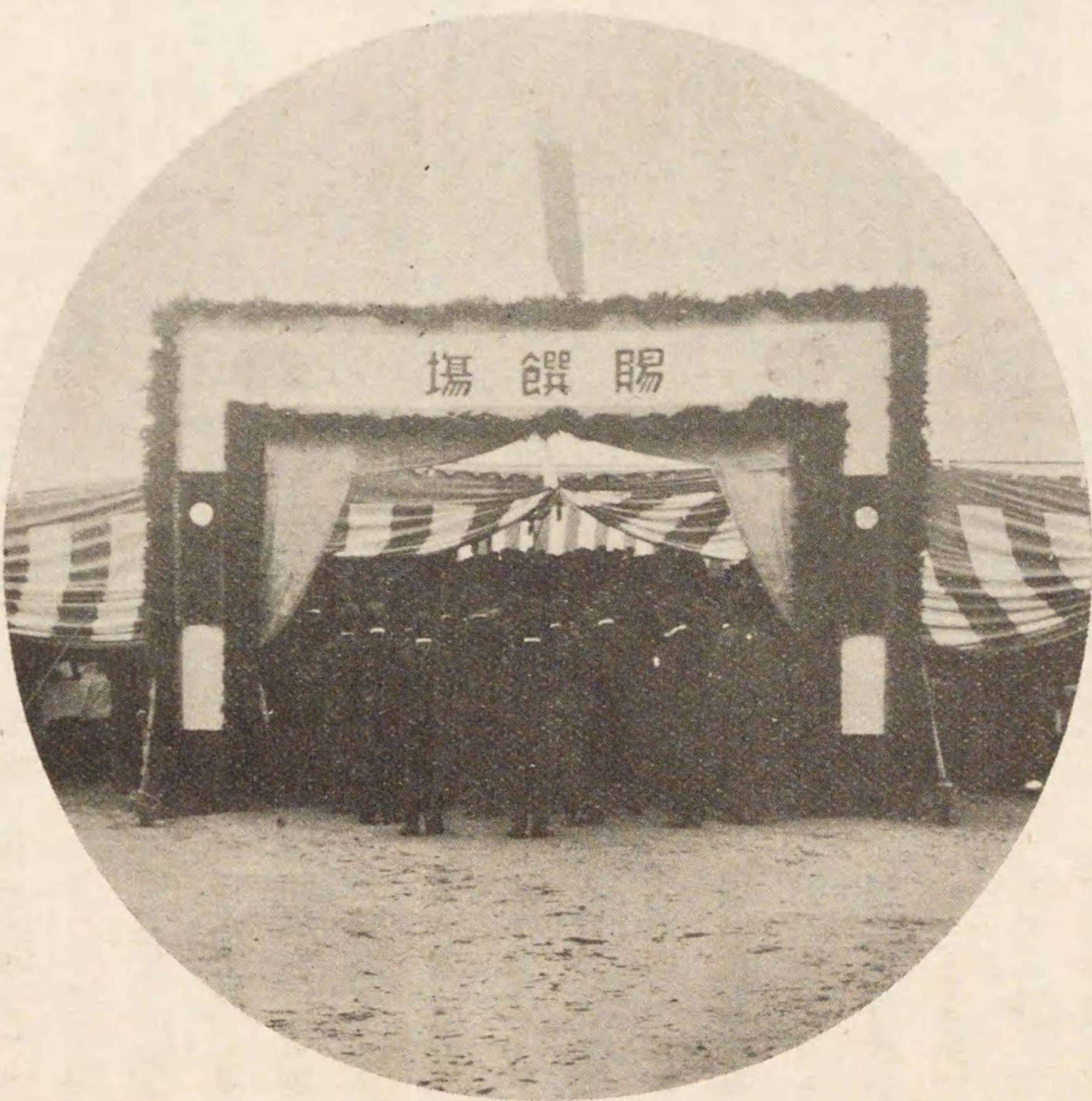
- 同記念博物館 正六位勳五等 和田不二男
- 同 正八位勳五等 岩本千太郎
- 同 帝室博物館學藝委員 關保之助
- 同 正五位勳六等 會田龍雄
- 同記念博覽會 正七位勳六等 三浦吉四郎



(内境宮神安平) 場饗饌方地

- 同 正七位勳五等功五級 土岐百巖
- 同 勸業課 從六位 横谷八代松
- 同 水道課 豫備役陸軍二等藥劑官勳六等 平井砂
- 同 豫備役陸軍三等獸醫 西田季雅
- 同 功六級 兒玉立哉

京都市官幣大社 平安神宮境内廣庭
但シ陸海軍官衙勤務ノ者及在郷軍人ノ饗饌場ハ追テ告示ス
本市關係者ニシテ地方饗饌ニ召サレタル者



口入場饗饌方地

- 所屬職名 召サルベキ資格
- 本市收入役 正六位勳六等 北崎名
- 同社會教育課 從四位勳三等功五級 宇野捨二
- 同 砲步少尉正八位 松見貫一

- 同 衛生課 勳六等 大屋常次郎
- 同 同都市計劃課 正六位 富樫米藏
- 同 同營繕課 從六位 木村喬
- 同 同土木課 正六位勳五等 三橋國太郎
- 同 同 正六位勳六等 中島勝正
- 同 陸軍歩兵中尉從七位 村上孝一
- 同 陸軍歩兵少尉 松浦貞彦
- 同 從七位勳六等功七級 吉川孟文
- 同 勳六等 小池八與吉
- 同 陸軍歩兵少尉 武田治之助
- 同 勳六等 廣瀬愛城
- 同 勳六等 村田惣三郎
- 同 勳六等 内藤寛治
- 同 從五位勳五等 藤木兼直
- 同 豫備役陸軍三等主計 田口俊一
- 同 陸軍歩兵少尉 金井清
- 同 正六位勳四等 河田梅右衛門
- 同 從六位勳五等功五級 筒井壽
- 同 勳六等 塚田忠雄
- 同 陸軍工歩少尉 板谷一男
- 同 勳五等 赤井直
- 同 同上京區役所 區長 太田勝郎

婦人衣紋方

大禮参列の各宮殿下を始め奉り、宮中女官達の大禮装着付に奉仕する婦人衣紋方は、主として本市在住の華族の令嬢等二十八名に仰付けられ三月九日より賀陽宮京都御用邸内に於て講習をなせり、氏名次の如し。

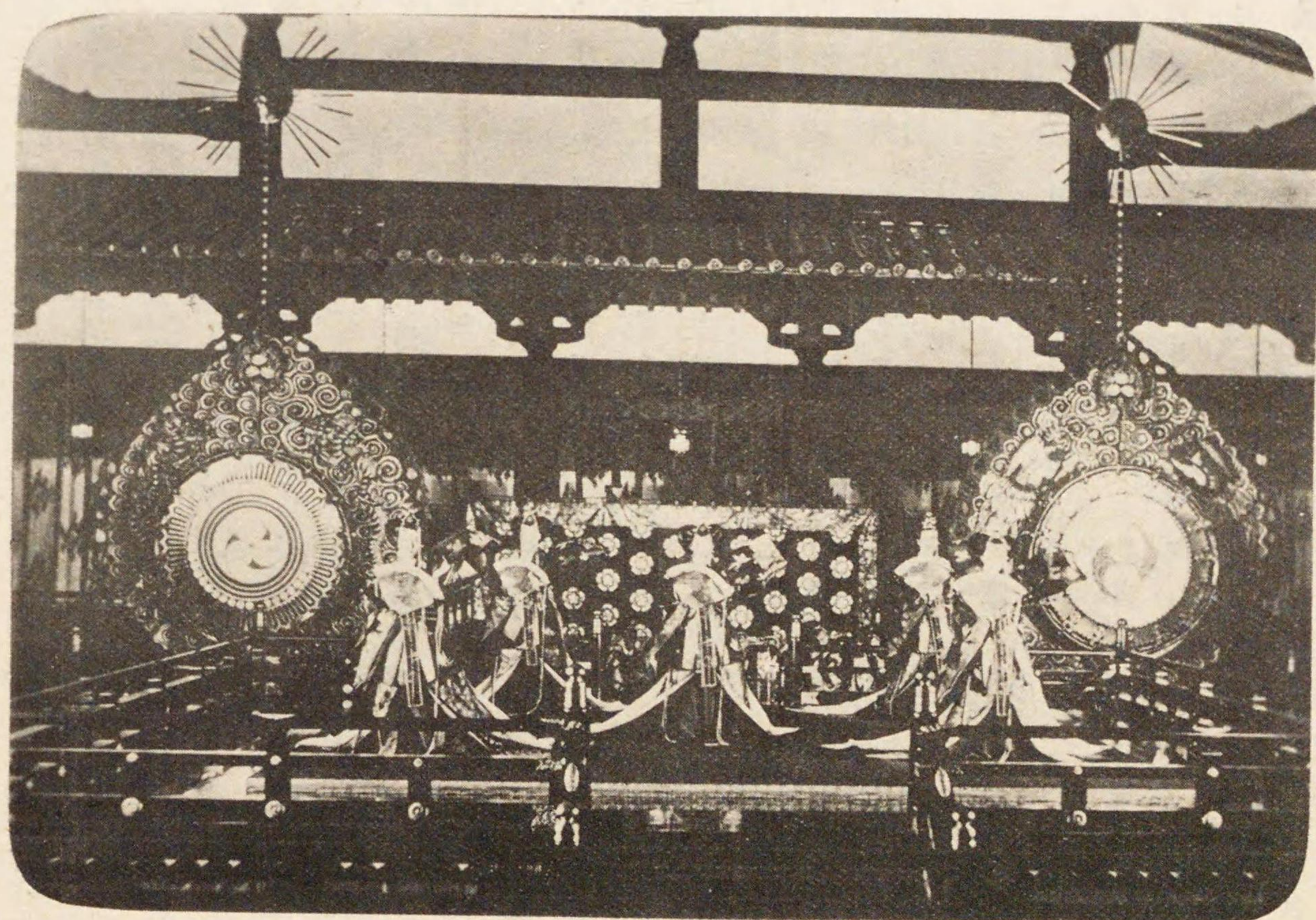
- 船橋 正 梅園まぢ 鷺尾よね 福井詮子
- 高田まさな 野中文女 小谷政子 金子縫野
- 高谷房江 新 利子 久坂八重子 川本ちよの
- 宮本千代 山中 操 牧 静子 羽倉せつ
- 岡崎嘉代 梅戸次枝 植松りつ 細川信尾
- 秋山はる 杉本きぬ 藤田秀子 森島静枝
- 小島あい 栗田のぶ 宮崎あや 進藤静枝

2、五節舞姫

大饗第一日の當日、檜扇高く五彩あざやかに舞ひまつるの光榮に浴せる(本市堂上華族)五節舞姫は、六月二十五日より毎月數回に互り、京都華族會館分館にて武井樂部長を始め大禮使囑託の樂師數名の指導を受けて、鉦、鼓、箏の音もゆかしく練習を始め、舞衣の袖も輕やかに、正、控の定まるまでは八名共、同様其の日宛らの稽古をなし、以上指導者、樂師等は毎月態々東京より入洛し熱誠以て完璧を期したり而して正、控の別は、大饗の前十五日御所内第二朝集所に於て、三矢大禮使參與官立會の下に、抽籤を以てし、次の如く決定したり。

正 (舞臺へ上る順序)

- | | | |
|-----|---------|--------|
| 京都市 | 油小路子爵 女 | 油小路 昊子 |
| 同 | 日野西子爵 女 | 日野西 兌子 |
| 同 | 菊亭子爵 女 | 菊亭 福子 |
| 同 | 藤谷子爵 女 | 藤谷 直子 |
| 同 | 難波子爵 女 | 難波 綾子 |
| 京都市 | 冷泉子爵 女 | 冷泉 須磨子 |
| 同 | 植松子爵 女 | 植松 信子 |
| 同 | 町尻子爵 女 | 町尻 信子 |



大禮の御儀に召されたる人々の感激

一 田中總理大臣謹話

御盛儀を仰ぎ奉りて

こゝに滞なく即位の大禮を終へさせられたことは全國民と共に慶賀に堪へないところであります、天氣も午後には特に一天晴れ渡りて萬好都合であつたことは、如何に幸多き大御代であるかを表示したものであるかを考へます、御勅語を宣せられた玉音朗かによく大庭の隅から隅まで透徹いたし供奉參列の諸員も一同感激の色に満ちた次第であります、國民の現下に處すべき進路を明白に御示しあらせられ、これまた何人も感奮興起せずにはをられないところであるに信するのであります、明治より大正、大正より昭和と時代も新になつて今日この大御代に處すべき前途を如何にすべきかこれは何人も大に考へなければならぬところであると思ひます、本日萬歳を三唱するに當つて日本全國民一齊に奉和したやうに心を一にし歩調を一にしてこの大御代の爲に更らに一段の感奮興起を要する次第であります、ありがたい御勅語を拜しまして一層責任の重きを感じ、全國民と共に益々努力を加へ、皇恩の萬一に報い奉らんことを期してゐる次第であります、即位の禮を終らせられましたにつきまして喜ばしさに堪へないに共いよく奮奮せんことを誓ひ奉る次第であります。

聖駕還幸に供奉して

國家の洪範として教化の大本として、最も重大の意義を含める御即

した、天皇陛下が御告文を奏せられました時、御勅語を賜はらせられた時、玉音は實に朗々胸をうち有り難き大御心のほかに思はず目に涙しました、天皇陛下萬歳奉唱の時には皇族各宮殿下をはじめ奉り參列全員から心からなる萬歳のさけびを擧げられました、大禮使節からも萬歳の聲が響きました、この利那程に感じたことはありませぬ、こゝに滞なく即位禮の御儀を了らせられ大禮使長官として至上の喜びであります。

三 外國使節ゾルフ獨逸大使の聲明書

先頃東京で私に御大典について私の印象を語るやう頼まれました時私は其の依頼に應じてよいかさうか迷ひました、御大典は日本皇室に日本全國民に亘りて非常な神聖なものでありますから、私はもしも御大典のこゝについて何かお話を申し上げたりしてはその神聖を汚すやうなこゝになりはせぬか非常に恐れたのであります、賢所大前の儀に紫宸殿の儀に參列いたし日本國家の寶である傳統について學ぶこゝが出来ました、天皇陛下が勅語を御朗讀選ばされた後田中首相によつて奏し奉られた萬歳は其の強き熱誠において私が他の西洋諸國で耳にするこゝの出来ぬほど立派なものであります、御大典の御儀により私の頭には最も精練された藝術的印象が與へられました、森嚴なる氣に満ちた古代の音楽に伴はれた古式の傳統的儀式の崇敬さは永久にこれを記憶するのであります、この印象は必ずや外交界に於ける私の同僚達にも與へられたこゝに、信じます。

四 朝鮮中樞院副議長 貴族會 長 朴泳孝謹話

位の大典は忠誠なる舉國民民歡呼の間に、御治定に相成つてをる、諸儀の大部分を濟ませ給ひ今日しも、兩陛下は芽出度還幸啓遊ばさる、のであるが、三旬の永き間、玉體を勞させたまふこゝが御尋常であらせられぬのを拜察し奉りまして、吾々臣民は齊しく恐懼に堪へない次第であります、唯此の上にも風露のお障りなく山河祥を呈して靈駕の御往還に聊かの御恙あらせられざるを祈り奉るの外ありません。

さて今回の御盛儀に方つて私の最も痛切に感得しましたこゝは、一般國民がよく大典の威儀を明かにして深厚なる大御心に副ひ奉らんことを期し、終始至誠を捧けて君國への御奉公を完全に盡されたる尊き心の發露であります、それは全國に於ける奉祝の形式が極めて盛大壯麗であつたこゝを申のではありませぬ、眞摯健全なる國民精神が迸つて寶祚萬歳の歡呼となり、國體崇敬の謳歌となり、更に君民一體の堅き契りを新にしたこゝであります、即ち此の御大典が如何に一般國民に思想道德の本義を闡明するの道を示されたか、また國民が如何に我國體の崇敬森嚴にして世界萬邦に冠絶する所以の觀念を増大したか、私が一々説明するまでもなく世界の齊しく首肯するところであるに信するであります、私は此の世界無比の國魂國風を中外に宣揚された昭和の御代の 聖天子を仰ぎ奉り下國民に向つてたゞたゞ有難い限りなき感謝の念が衷心から湧き出るのであります。

二 近衛大禮使長官謹話

天祐のいたすところでありませう、めでたい即位禮當日は朝來から陽光が輝き瑞祥漲りまこゝに神國日本の感を深ふしました、午前の賢所大前の儀午後の紫宸殿の儀共に並びなき莊嚴の裡にめでたく訖りま

世界に比なき萬世一系の皇位につかせ給ふ、今上陛下の即位式中に於ても、至尊至重の賢所大前の儀並びに紫宸殿の儀に參列するこゝを得ましたこゝはまこゝに有難くなんこも申上るこゝの出来ない幸福感に打たれました、しかも御儀式中勅語を拜承してゐる中にうけた崇嚴なる靈感に對しては、將來益々國家の爲にお盡し申上げ、大御心に副ふべく努力せなければならぬと深く心に念じました。

五 淺山京都市會議長謹話

御盛儀は午前賢所大前の儀、午後は紫宸殿の儀を滞なく終らせられました、森嚴なる御儀式に思はず頭が深く垂れて其の神々しさにうたれました、私は大禮御舉行地の市會議長として御召の光榮に浴しましたこゝは洵に感激に堪へません、殊に市民の代表として私を特にお召になつたこゝは一世の光榮で、聖慮の有難さを市民諸君と共に分ち聖代の萬歳を祈る次第であります。

六 鹵簿を奉迎したる外國記者の感激

外國記者團員メルボルン、ヘラルド紙記者

ビーユツク謹話 (七十二歳の老記者)

御大典の意義は實際他國人には理解が出来ないでせうが、私は日本の國體をよく現はしてゐると思ひます、他の國では政治宗教が別で、君主が即位した後その國の教主から王冠を受けるのですか、日本では陛下がすべての上に立たれるので、御大典は陛下が内外に御即位のこゝを宣示されて奉祝を受けられるのだと承つてゐます、しかし何

こいふ華麗な御列でせう、十日の御即位式を思ふこそ、るに美の國詩の國の華麗さが今から偲ばれて奥床しう感ぜられます。

同ワールド・ドラベラー紙記者

ウイムサット嬢謹話の一片

この盛大な御大典を報道する大役を勤めようご御苑内の指定席へ参りましたが、ごうでせう……その席の直ぐ後の櫻の木に一輪の花が咲いてゐるではありませんか、全く此の盛儀の瑞兆に信じました。

追 感

昭和の大禮に際して本市の施設せる事項は如上にして尙盡きざるものありしが幸に遺憾なきを得て聊か昭和聖世の初頭に對へまつりたるは略了知ざるを得ん。然れども當時を追懐しては未だ筆紙の克くせざるものあり再び茲に録して本市民と共に感激を深くし歡びを新たにせんとするもの決して贅言にあらざるを信す。

今次の大禮は御盛儀の御模様より一般奉拜者の數に至る迄即ち曠古の大典にして、隨て大禮御舉行地たる光榮を有する我京都市民は克く協同一致以て赤誠を披瀝し、本市奉祝事務局は言ふも更なり各學區公同衛生組合並に各種團體を始め一般市民に至る迄和衷協同の實を擧げ、空前の大計畫に大施設に而して之れが實行に晝夜を徹し寢食を忘れ一意奉公の誠を致したるなり、而して萬一の過失無からん事を期し日夕恐懼措く所を知らざりしが幸ひに些の支障をも見ずして今日に至れるもの、更らに聖恩の宏大なるに感激し眞に我國民精神の外に誇るべき一表徴たるを思はしめたり、殊に本市は七日御着筆前後より東京御還

幸遊ばざるまでの間上司の多くは一睡だもせざる日多く審議を要する事項一刻も忽にすべからざる事ごもあり時には緊急交渉をなすべく夜半若しくは朝まだき幾多の問題に解決を求め「時間を辨へざるものよ」と京童の口に上りしことまゝありし程なりしが、専思専念奉公の他には顧るものもなく隨つて職員も之に應じて終始自律的の活動を續け、尙之と同時に本市自治政の根底となりて常に奉仕せる公同、衛生組合の勢力を始め警備隊としての在郷軍人會及青年團員等は何れも愛市愛公の念に燃えて四六時中大道に立ち續けのまゝ押し寄する群集の爲に大活動をつゞけ、入浴者をして感嘆せしめたるなど其實例乏しからず。更に本市は數千の貴賓参列者を始め數百萬の入浴者を迎へて、之れが接遇案内より一般交通輸送の上に、總てが晝夜に互れもの多く人知れず汗を絞りたる事ごも多かりしは、光輝ある大禮地の市職員並に一市民として深く光榮とし永く記念しまつるべき所にして今や筆を擱くに當り特に追感をもせしは、將來本誌を繕きて再び當時を追懐し更に其の感を新らたにするものあらんを信じなければなり。

昭和五年二月 五日 刷

昭和五年二月十一日 發行

京 都 市 役 所

京都市下京區西洞院七條南

印刷者 内外出版印刷株式會社

代表者 須磨勘兵衛

